



日本遺産「炭鉄港」 構成文化財・関連文化財一覧



炭鉄港推進協議会
2025年3月

目次

1.	はじめに.....	3
2.	構成文化財・関連文化財一覧.....	4
	(1) 小樽市.....	4
	(2) 室蘭市.....	19
	(3) 夕張市.....	47
	(4) 岩見沢市.....	94
	(5) 美唄市.....	113
	(6) 芦別市.....	142
	(7) 江別市.....	153
	(8) 赤平市.....	164
	(9) 三笠市.....	179
	(10) 歌志内市.....	210
	(11) 上砂川町.....	221
	(12) 栗山町.....	227
	(13) 月形町.....	233
	(14) 沼田町.....	241
	(15) 安平町.....	250
3.	位置図.....	256
4.	サブストーリー.....	256
	(1) 空知の石炭産業の移り変わり（炭鉱史）.....	257
	(2) 石炭と鉄道をきっかけに栄えた鉄鋼業（鉄鋼史）.....	262
	(3) 石炭積出港の盛衰（港湾史）.....	265
	(4) 石炭とともに歩んだ鉄道（鉄道史）.....	268
	(5) 炭鉱を支えた人々の生活（生活史）.....	272

1. はじめに

2019（令和元）年、空知の石炭を基軸に、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾、そしてこれらを繋ぐ炭鉱鉄道によって展開された近代化のストーリーが、「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命『炭鉄港』～」として日本遺産に認定されました。

2025（令和7）年3月現在、炭鉄港地域は15市町で構成され、構成文化財は49件に上ります。

一方で、構成文化財として認定されていないものの、炭鉄港のストーリーにおいて重要な文化財は、『そらち・炭鉄の記憶一覧』（2016（平成28）年）、『炭鉄港ストーリー構築事業報告書』（2017（平成29）年）などの報告書により整理されてきました。これを踏まえ、炭鉄港推進協議会では、日本遺産の構成文化財には含まれないものの、炭鉄港のストーリーと深い関わりを持つ文化財を「関連文化財」として位置づけることとしました。「関連文化財」は、文化財保護法に基づく指定文化財等に限定せず、また、構成文化財と同等に積極的に活用することを目指しています。

さらに、「関連文化財」の選定にあたり、既存の炭鉄港のストーリーを補完する「サブストーリー」を作成しました。従来の4つのストーリーは時代別に構成されていましたが、「サブストーリー」は産業別の視点を取り入れることで、各ストーリーを横断的に結びつける役割を果たします。

今後は、これらの「関連文化財」と「サブストーリー」を活用し、炭鉄港のさらなる発信と利活用を推進していきます。また、「関連文化財」および「サブストーリー」は、その活用状況に応じて適宜追加・見直しを行い、炭鉄港の継続的な発展に役立てていきます。

2. 構成文化財・関連文化財一覧

(1) 小樽市

小樽港にとって 1869（明治 2）年に海関所が置かれたことが、その後の発展の大きなきっかけとなります。それまで道南に限られていた商船の通行が許され、港には本州各地からの北前船が先を並べるようになりました。

そして空知で発見された石炭の搬出港に選ばれたことにより、近代都市小樽の発展は決定づけられました。1882（明治 15）年に正式に開通した官営幌内鉄道は石炭輸送だけでなく、道内内陸部への物資輸送の幹線となります。

北海道への移民も急増し、内陸部での農作物の移出も増え始めたこの時期、小樽港は函館港を凌駕する北海道の玄関となります。この時期を代表する構成文化財が「炭鉄港」唯一の国指定重要文化財旧手宮鉄道施設です。また、日本初の外洋性防波堤「北防波堤」が完成すると、「神戸、横浜に次ぐ商港」と評され、産炭地空知をはじめとする北海道経済を支える拠点となります。

戦後の空知の市民生活を支えた行商の人々が仕入れをした市場も小樽駅周辺で営業し、「小樽中央市場」は現在も営業する市場として日本遺産で唯一の存在です。小樽運河をはじめ保存を求める市民の声がかきかけとなり、市内に数多く残る近代化遺産を保存、そして活用することで新たな街づくりに動き始めた小樽。幌内鉄道の跡地を整備した散策路など、多くの文化遺産が生きた形で残されています。

No.1 旧北海道庁土木部小樽築港事務所見張所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市築港 2-2	
建築年等	昭和 10（1935）年	
構造	木造 1 階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道開発局	
管理者		
文化財登録/指定	小樽市指定歴史的建造物群	
解説文	<p>北海道経済を先導してきた小樽港の発展とともに歩んできた事務所。初代小樽築港事務所長の廣井勇博士は、小樽築港工事においてコンクリートの施工技術の発展に寄与する研究と開発を行い、今日の輝かしい港湾技術の基礎を築いた。小規模（2.5 間×3 間）であるが、外壁には 2 種類の板壁を使い分け、方形屋根に小さい屋根をのせるなど、工夫を凝らしている。小樽港縦貫線の道路工事に伴い、平成 13 年に東寄り約 60m の位置から現在地へ曳き家された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.2 旧右近倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市色内3丁目10-18	
建築年等	明治27（1894）年	
構造	木骨石造1階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	(有)北一	
管理者		
文化財登録/指定	小樽市指定歴史的建造物群	
解説文	明治20年代としては大規模な倉庫であり、小屋組にはクイーンポストトラス（対東小屋組）が用いられている。隣の旧広海倉庫、旧増田倉庫との景観は、かつての倉庫街の面影を残している。妻壁の「//」印は、北前船主・右近権左衛門の店印「一膳箸」であり、船の帆柱に掲げられた船旗にも使用された。平成7年に正面の壁が強風で崩れたが、翌8年に現在の姿に修復された。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.3 旧広海倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市色内3丁目10-19	
建築年等	明治22（1889）年	
構造	木骨石造1階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	（有）北一	
管理者		
文化財登録/指定	小樽市指定歴史的建造物群	
解説文	<p>加賀に拠点をおいた海運商・広海二三郎は、本倉庫を大規模な石造り（木骨石造）で建築した。この土地は、かつて手前まで海岸が迫り、正面の右手の方向に鉄道施設があったことから、海陸双方の荷物の輸送と貯蔵に最適な場所であった。本建築は、荷を積み入れるために奥行きのある長方形とし、採光のため屋根の中央と両側に段差を設けている。出入口のアーチは、壁面のアクセントとなっている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.4 旧浪華倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市港町 6-5	
建築年等	大正 14（1925）年	
構造	木骨石造 1 階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	公益財団法人似鳥文化財団	
管理者		
文化財登録/指定	小樽市指定歴史的建造物群	
解説文	<p>市内に現存する木骨石造の倉庫の中でも比較的大規模な建物である。小屋組は、クイーンポストトラス（対東小屋組）と呼ばれる洋風の構造であり、屋根には当時採光用として設置された円形の小屋根がある。荷物を搬出入する開口部は、海側の壁面以外に運河側にも配置され、舳へ荷積みする利便性が図られている。運河の完成の 2 年後に建てられたこの建物は、運河の盛衰を見守り、その歴史を今に伝える倉庫建築のひとつである。</p>	
参考情報		
アピールポイント	19 世紀後半から 20 世紀初頭に欧米で制作されたステンドグラスや、アールヌーヴォー・アールデコのガラス工芸や家具の西洋美術品を展示。	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.5 手宮線跡及び附属施設

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	北海道小樽市色内1丁目15-14	
建築年等	明治13（1880）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	小樽市	
管理者	小樽市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>旧国鉄手宮線は、1880（明治13）年に幌内鉄道の一部である手宮～札幌間を結ぶ北海道最初の鉄道として開通し、北海道開拓に重要な役割を担ってきたが、1962（昭和37）年に旅客営業が廃止され、1985（昭和60）年に廃線された。市内中心部には、旧国鉄手宮線で使用されていた鉄道施設を残し歴史性の保全を重視しながら素朴な風景を演出したオープンスペースを整備し、オープンスペース以外の区間には当時の線路がそのまま残されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント	現在は散策路として整備され、写真スポットとしても有名。	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.6 旧手宮鉄道施設

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	北海道小樽市手宮 1 丁目	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	小樽市	
管理者	小樽市	
文化財登録/指定	国指定重要文化財、近代化産業遺産群	
解説文	<p>幌内鉄道の基点となった手宮には、車両整備などのための様々な鉄道関連施設が設置された。現存するこれらの鉄道施設は、幌内から石炭を運び、近代日本の産業発展を支えた幌内鉄道の遺産であり、蒸気機関が主流であった当時の鉄道の仕組みを知ることができる貴重な近代化遺産として、2001（平成 13）年、国の重要文化財に指定されている。機関車庫三号、転車台、機関車庫一号、貯水槽、危険品庫、擁壁で構成される。</p>	
参考情報		
アピールポイント	<p>重要文化財でもある機関車庫、転車台を実際に使ったの北海道で最も古い動態保存を実施。蒸気機関車全盛期の小樽を現代に再現する「動く歴史絵巻」と言える。</p>	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.7 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	北海道小樽市手宮1丁目3-6(総合博物館)	
建築年等	明治18(1885)年ほか	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	小樽市	
管理者	小樽市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群、鉄道記念物	
解説文	蒸気機関車「しづか号」(1885年)、い1号客車(1892年)、蒸気機関車「大勝号」(1895年)、キ601号回転雪かき車(1923年)、キ800号かき寄せ雪かき車(1928年)、キハ031号気動車(1956年)などで構成された保存車両群で、幌内鉄道時代の貴重な車両が含まれている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.8 モルタルテストピース

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	港湾		
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）		
所在地	北海道小樽市築港 2-2（小樽港湾事務所）		
建築年等	明治 29（1896）～昭和 12（1937）年		
構造			
現存状況	有		
見学可否	要許可		
現地看板	有		
刊行物掲載	有		
所有者	北海道開発局		
管理者	北海道開発局		
文化財登録/指定			
解説文	<p>小樽港北防波堤の建設を指揮した広井勇博士は、工事着工（1897 年）の前年から強度試験用の供試体（モルタルテストピース）の製作を開始した。比較のために火山灰の配合を変えたモルタルブリケット供試体を淡水と海水に浸したものと空気中のものの耐久性試験を行った。テストピース製作は着工後も継続され、総数は 6 万個にも及んだ。これらの大部分はすでに強度試験を終えている。</p>		
参考情報			
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.9 小樽港北防波堤

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市手宮 1 丁目 6	
建築年等	明治 41（1908）年	
構造	コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	北海道開発局	
管理者	小樽市	
文化財登録/指定	選奨土木遺産	
解説文	<p>1897（明治 30）年、波力公式「広井式」の考案者としても知られる小樽築港事務所初代所長の広井勇は、わが国初の本格的港湾整備となる小樽港北防波堤の建設に着手した。その構造は、投石マウンドの上にコンクリート方塊を積み重ねた混成堤で、コンクリートブロックは水平に対し 71 度 34 分の傾斜をつけ斜めに重なり合うように積む。</p> <p>これにより工事中の先端ブロック脱落を防ぎ、捨石沈降に伴って隣接するブロック同士で噛み合わせが強くなり、局部的な波撃に対して応力を分散させることができる。この方塊は防波堤の延長方向に傾斜積みされていることから、「斜塊」と呼ばれた。広井は頻繁に現場に赴き自らスコップを使って指導した。防波堤は打設後 100 年以上を経過した現在も、小樽港第一線防波堤としてその機能を果たしている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.10 北炭ローダー基礎

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市手宮 1 丁目 4-1	
建築年等	昭和 14（1939）年	
構造	コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可（遠望）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	北海道石炭荷役㈱	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>鉄道で運んだ石炭を船に積み込むためのベルトコンベアーの機械を据え付けていた基礎部分である。1939（昭和 14）年、手宮に建設され、石炭積み出しがピークを迎えた昭和 30～40 年代にかけて大きな役割を果たした。</p> <p>小樽築港地区の石炭積み出し施設が 1970（昭和 45）年に操業停止した後も稼働を続けたが、1980（昭和 55）年から休止、1985（昭和 60）年、手宮線の廃止とともに撤去され、現在では台座のみが残る。小樽港に唯一現存する石炭積み出しの痕跡である。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	炭鉄港×AR アプリ対応	

No.11 小樽港斜路式ケーソン製作ヤード

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	港湾	 	
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	小樽市築港 2-2		
建築年等	明治 45（1912）年		
構造			
現存状況	有		
見学可否	可		
現地看板	有		
刊行物掲載	有		
所有者	北海道開発局		
管理者	北海道開発局		
文化財登録/指定	選奨土木遺産		
解説文	<p>1908（明治 41）年に起工した小樽築港第 2 期工事では、防波堤の築造にケーソン（函塊：コンクリートと鉄筋の函）を使用した。ケーソンを陸上の斜路上で製作し、小樽港独自で開発した斜路から海中に滑り落とす方式を、軍艦の進水方式を参考にして小樽築港事務所長・伊藤長右衛門が考案した。斜路は陸上部 60m、海中部 64m で 10%の傾斜で海底に延び、4 本の木製レール上を滑り落とす構造になっている。安価で作業も容易なことから、その後各港でも使用するようになった築港工事史上特筆すべき施工法である。</p> <p>小樽港第 2 期工事竣工（1923 年）までに 100 函、1912（大正元）～2005（平成 17）年の 93 年間で約 800 函が製作され、小樽港だけではなく留萌港・岩内港といった築港工事で小樽製ケーソンが用いられた。このように小樽港斜路式ケーソン製作ヤードは、我が国の近代港湾の発展に貢献した。</p>		
参考情報			
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.12 旧三井物産小樽支店（色内銀行街）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市色内1丁目9-1	
建築年等	昭和12（1937）年	
構造	鉄筋コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	（株）ケーシー	
管理者	小樽興信商事（株）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井物産小樽支店は、道内の木材を一手に取り扱い、欧米への輸出で大きな利益を上げるようになっていたが、幌内炭鉱で採掘され、鉄道で小樽へもたらされた石炭は極めて重要な商品であった。1937（昭和12）年に建てられた旧三井物産小樽支店は、鉄筋コンクリート造5階建てで、周辺では最も高いビルである。設計は松井貴太郎（横河工務所）が担当し、当時、最新の建築思想である国際建築様式の意匠を取り入れている。1階外壁には黒御影石が貼り付けられ、2階以上の白色タイル壁と鮮やかなコントラストをなす。</p> <p>建物正面は、平らな壁に四角形の窓を演出し、正面玄関の天井に設置されている照明器具や玄関外のブラケットはアール・デコ風の装飾が斬新である。玄関ホール付近の内装は琉球産大理石が用いられている。2基あるエレベーターの右側は建築当初からのもので、エレベーター左側壁面には上階から投函する形式の「私設郵便箱」が設置されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.13 旧三菱商事小樽支店（色内銀行街）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市色内1丁目1-12	
建築年等	大正11（1922）年	
構造	鉄筋コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	北海道中央バス株式会社	
管理者	北海道中央バス株式会社	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1922（大正 11）年に建てられた旧三菱商事小樽支店は、鉄筋コンクリート造4階建てで設計と工事は清水組（現・清水建設）が行った。三菱系ビルとして、1階は銀行、2階は鉱業、3階は商事の各支店が入っており、昭和初期、活気にあふれる小樽支店では、本社採用の社員たちが世界中と商取引を行っていた。建築当初、外壁にレンガ色のタイルが貼られモダンな外観だったが、1937（昭和 12）年に現在の色調に変更された。1階は石造りのように改修され、山側（西面）はギリシャ・ローマ建築風の円柱が6本並ぶかたちとなった。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.14 小樽中央市場

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	小樽市稲穂 3 丁目 11-2	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	小樽中央市場共同組合	
管理者	小樽中央市場共同組合	
文化財登録/指定		
解説文	<p>戦後から昭和 40 年代にかけて、小樽駅のコンコースは早朝から仕入れた鮮魚や野菜などの生鮮食料品、生活雑貨等をブリキ缶に入れて背負った行商人、通称「ガンガン部隊」でゴった返していた。戦後の流通が混乱した時代には行商人たちが内陸部の食料流通に大きな役割を果たしており、ガンガン部隊は鉄道に乗って小樽から空知の産炭地に向かい、新鮮な食材をもたらした。ガンガン部隊の全盛期には、国鉄は一般客とのトラブルを避けるため、専用車両「行商指定車」を設けたほどであった。</p> <p>当時、小樽の市場はガンガン部隊の商品供給基地であり、小樽中央市場はその主要な供給基地の一つであった。小樽中央市場の商圈は、後志から瀬棚、岩見沢、富良野、砂川方面に至る広範囲にわたり、産炭地の人たちの生活を支えていた。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(2) 室蘭市

1872（明治 5）年に室蘭港が開港すると翌年 1873（明治 6）年に函館－森～＜海路＞～室蘭－札幌を結ぶ札幌本道が完成します。以来 1892（明治 25）年の鉄道開設、1894（明治 27）年には特別輸出港にも指定され 19 世紀後半に天然の良港と空知地方からの石炭輸送による石炭積み出し港として栄えます。その後 1907（明治 40）年日本製鋼所、1909（明治 42）年北海道炭鉱汽船輪西製鐵場が設立、20 世紀前半に製鉄業のまち室蘭として発展していきます。

道内一の石炭積出港として、最盛期には本州向け道内炭のおよそ 6 割が移出された室蘭港も石油へのエネルギー転換により 1976（昭和 51）年、石炭積み出し港としての役割を終えましたが、その後も臨海工業港及び背後地の流通拠点港として北海道工業地域の発展を支えてきました。「港まち」・「鉄のまち」と言われる室蘭は鉄道や石炭により現在の素地を培い北海道さらには日本の近代化に貢献してきたのです。

鉄鋼業をはじめ湾内に大きな工場が林立している景色と、少し視点を変えるだけで豊かな大自然に触れられる室蘭。最近「工場夜景」やドラマ・映画のロケ地など、独特な地形と歴史を活かした被写体としての魅力にも注目が集まっています。1912（明治 45）年に建てられた旧室蘭駅舎は道内の駅舎の中では最古の木造建築物として 1999（平成 11）年に国の有形文化財として登録されるなど、歴史や特色を活かしたまちづくりが進んでいます。

No.15 輪西屯田兵火薬庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市宮の森町1丁目1-1	
建築年等	明治19（1886）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	1886（明治19）年、第一回屯田兵村建設時に中隊本部とともに建てられた火薬庫。関連する文化財として、輪西屯田兵記念碑（1909年）、輪西屯田兵関係資料がある。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.16 北海屋ビル

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市海岸町2丁目4-2	
建築年等	明治38（1905）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1905（明治38）年建設の事務所で3階建。店舗前面を不燃性の銅板で覆っており、看板建築様式を示している。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.17 旧火力発電所（日本製鋼所）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市茶津町 4	
建築年等	明治 42（1909）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>1909（明治 42）年に建設された火力発電施設で、煉瓦造・延床面積 3,241 m²。発電所および汽缶室部からなり、合弁先の英国から輸入した発電機 3 機（1,000KW 直流発電機）とボイラー 20 基（英国製の高圧・水管式汽缶）が格納されていた。1928（昭和 3）年に電力会社から初めて電力の供給を受け自家発電との併用を開始。1938（昭和 13）年には、全ての電力を電力会社から受電するようになったため、当該発電所は予備扱となり、1961（昭和 36）年に廃止された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.18 瑞泉閣

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市茶津町 4	
建築年等	明治 44（1911）年	
構造	レンガ造・木造	
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>1911（明治 44）年に建設された宿泊・接待のための施設。大正天皇が皇太子時代に北海道行啓の際、日本製鋼所室蘭製作所を視察され宿泊所として建設された。建物は和洋折衷で、洋館 199 m²、和館 303 m²からなり、外観の無骨さとは対照的に洋館内部は英国風の華麗な装飾が特徴的である。2008（平成 20）年に外壁・屋根瓦など建設当時の様式を可能な限り再現した改修工事を終え、現在も同製作所の迎賓館として使用されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.19 室蘭市旧室蘭駅舎

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市海岸町1丁目5-1	
建築年等	明治45（1912）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	国登録、準鉄道記念物	
解説文	<p>1912（明治45）年に建設された木造2階建の駅舎。建築様式は寄棟造りで、明治の洋風建築の面影を残す屋根や白壁づくりの外観、外回りは入母屋風で「がんぎ」と呼ばれるアーケード様式になっている。細部の意匠は、洋風で仕上げられており、軒下の持ち送り、屋根上のドーマー窓、方杖をもったアーケードの軒支柱、1階の縦長の窓等に特徴がある。3代目の室蘭駅舎として1997（平成9）年まで稼働していた。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.20 旧三菱合資会社室蘭出張所（北星）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市緑町 2-1	
建築年等	大正 4（1915）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1914（大正 3）年に旧三菱合資会社室蘭出張所として建築された事務所で木造 2 階建。戦時中は日本石炭（戦時国策により石炭各社を統合した統制販売会社）の事務所として使用されたが、戦後は三菱鉱業の室蘭営業所として長く利用された。その後、民間企業に賃貸されていたが、老朽化により取り壊しの話が出た際に、それを回避すべく市民出資によって保存団体を立ち上げて三菱マテリアルから購入し保存の道筋をつけた。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.21 日本製鋼所室蘭製作所製造 複葉機エンジン「室0号」

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	室蘭市茶津町4	
建築年等	大正7（1918）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	1918（大正7年）に日本製鋼所が製作した日本最初の航空機エンジン。陸軍東京工廠から「6年式ダイムラー100馬力」10台の正式受注を受け、わが国初の制式航空発動機として完成した。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.22 日本製鋼所配水池跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市東町	
建築年等	大正7（1918）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1918(大正7)年、日本製鋼所の私設水道の配水池として建設された。チマイベツ浄水場建設（1940年）の頃に廃止されたとされる。耐水性を考慮したレンガ積み の遺構が、東町5丁目の旭公園内に残存している。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.23 旧山口紙店

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市海岸町2丁目5-8	
建築年等	大正12（1923）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1912（明治45）年創業の山口紙店が、1923（大正12）年に建設したレンガ造2階建の倉庫。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.24 多田薬局本店倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市中央3丁目4-14	
建築年等	大正14（1925）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1925（大正14）年に建築された倉庫で鉄筋コンクリート2階建。多田薬局は、初代・多田光次郎氏が1907（明治40）年に長野県から移住して輪西地区で創業、1909年に中央町の現在地に移転した。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.25 旧北炭室蘭海員倶楽部

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市緑町 9-28	
建築年等	大正 15（1926）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1926（大正 15）年に建築された北海道炭礦汽船㈱の海員倶楽部。山荘風の意匠が特徴。北炭の専務取締役であった井上角五郎氏の別荘があった場所に建設された。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.26 旧室蘭灯台(大黒島灯台)

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市絵鞆町2丁目	
建築年等	大正15（1926）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可（遠望）	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>室蘭港の港口部に位置する周囲700mの大黒島にあった灯台で、初灯は1991（明治24）年、現存する建物は1926（大正15）年に建設された。1974（昭和49）年に消灯され、1978（昭和53）年には霧笛も廃止された。縦3列の窓のファサードを有する四角い建物に丸屋根の灯台を載せた白く特徴的な外観を有し、道の駅のある絵鞆地区から確認可能である。しかし、建物は老朽化が進行しており、一般者の大黒島への立ち入りは禁止されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.27 三輪商会倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市海岸町3丁目2-10	
建築年等	昭和2（1927）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	株式会社 協同鋼管	
管理者	株式会社 協同鋼管	
文化財登録/指定		
解説文	1927（昭和3）年に建設された石造倉庫。現在はギャラリー「千種万歳堂」として使われている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.28 旧北炭役宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市西小路町 10-22	
建築年等	昭和 12（1937）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1937（昭和 12）年に建設された北海道炭礦汽船㈱の幹部職員住宅。木造 2 階建て、黒い下見板張りと軒先の漆喰がコントラストをなし、和風建築ながら丸窓が配置されているなど和洋折衷の意匠。	
参考情報		
アピールポイント	現在は古民家カフェ「ROUND WINDOW」の店舗として使われており、北海道産小麦を使ったパンやスイーツが名物。	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.29 知利別会館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市知利別町4丁目27	
建築年等	昭和15（1940）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>1940（昭和15）年、日本製鐵(株)輪西製鐵所の幹部社員・賓客用の倶楽部として建設された。終戦直後の1年間は進駐軍に接収され、その後も幾度となく改築工事が行われたが、可能な限り建設当時の部材を残してきた。現在も新日鐵住金(株)の迎賓館の役割を担っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.30 旧チマイベツ浄水場

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市石川町	
建築年等	昭和 15（1940）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>室蘭水道は、すでに私設水道を整備していた日本製鋼所と 1916（大正 5）年に分水契約を結んで建設された全道で 4 番目の水道である。その後の都市の発展に伴う水源追加の必要性から、1940（昭和 15）年にチマイベツ川にチマイベツ浄水場を建設し、日本製鋼所からの受水を廃止したことで、独自の水道体系を確立した。</p> <p>2007（平成 19）年、同所に浄水場を更新したため廃止された。シンプルな外観に対して、重厚かつモダンな内部の造作が特徴的である。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.31 室蘭市役所本庁舎

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市幸町 1-2	
建築年等	昭和 27（1952）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1952（昭和 27）年に建設された市役所庁舎。4 階建。1962（昭和 37）年に造築した庁舎も隣接している（かつて 1～2 階が消防庁舎であったため屋上には 30m 級の望楼が残っている）。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.32 室蘭市立絵鞆小学校円形校舎

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市祝津町2丁目7-30	
建築年等	昭和33（1958）年・昭和35（1960）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1958（昭和33）年と1960（昭和35）年に建設された2つの円形校舎を持つ小学校。設計は全国で円形校舎・円形病院を数多く設計した坂本鹿名夫氏。絵鞆小学校は2015（平成27）年3月に閉校。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.33 恵比寿・大黒天像

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	室蘭市陣屋町2丁目4-25、仲町12	
建築年等	明治42（1909）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	室蘭で初めて製造された鉄を用いて制作された。高炉の火入れを記念して関係者に贈呈されたもの。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.34 工場景観と企業城下町のまちなみ

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	文化的景観	
所在地	室蘭市東町5丁目2	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可（遠望）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	港の周囲の工場群は、夜景観賞の人気スポットとなっている。また製鉄所付近には、最盛期の面影を残す商店街や施設などが残っている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.35 中央埠頭倉庫（プラットホーム跡地）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市海岸町1丁目61-7	
建築年等	昭和32（1957）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	室蘭市	
管理者	室蘭市	
文化財登録/指定		
解説文	中央埠頭の倉庫には貨物列車の荷役を行うためのプラットホーム（台状の設備）が残っている。倉庫の床面を車両の荷台と同じ高さにすることで、貨物の積み降ろしを容易に行うことができる設備であり、かつて港湾設備のすぐそばまで引き込み線が引かれていた。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.36 旧国鉄埠頭・旧北荷埠頭

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	昭和9（1934）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	室蘭市	
管理者	室蘭市	
文化財登録/指定	選奨土木遺産	
解説文	国鉄が石炭の積み出しに使用。最新の積み込み設備を導入した。	
参考情報	https://www.jsce.or.jp/contents/isan/files/2022_01.shtml	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.37 ホーレス・ケプロン顕彰碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	港湾	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	入江臨海公園	
建築年等	平成 3（1991）年寄贈	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>ホーレス・ケプロン(1804-1885 米国)は、北海道開拓史の顧問で、明治 5 年(1872)から同 7 年に北海道を調査し、室蘭港が天然の良港であることを認め、港湾改修・道路開発・鉄道敷設を進言した。室蘭港の基盤を作ったともいえるケプロンの功績を称え、期成会が中心となって碑を建立した。</p>	
参考情報	<p>ふるさと室蘭ガイドブック p38（室蘭市）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.38 御傘山神社

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市御前水町 1 丁目 12-3	
建築年等	明治 41（1908）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	操業当初本社を室蘭に置いていた日本製鋼所が、社運発展と操業の安全を記念して建立した神社。	
参考情報	https://hokkaidojinjacho.jp/%E5%BE%A1%E5%82%98%E5%B1%B1%E7%A5%9E%E7%A4%BE/	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.39 輪西神社

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄鋼	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	室蘭市みゆき町2丁目17-10	
建築年等	昭和4（1929）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>新日本製鉄室蘭製鉄所の守護神社。室蘭製鉄所はその昔日本製鉄所輪西工場と称しており、輪西工場とその従業員の繁栄と無事故を祈り、1928年に御傘山神社の頓宮として創立された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.40 「室蘭線発祥の地」記念碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	JR 御崎駅付近	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	室蘭までの鉄道が敷設されたことを記念して、御崎駅が石炭積出用鉄道栈橋に近かったことから御崎駅構内に建立された。	
参考情報	http://blog.livedoor.jp/muronavi_5/archives/50227658.html	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	2012 年頃には木製の説明碑が建っていたが、現在は倒壊し、確認することができない。	

No.41 S-205 号 蒸気機関車

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	室蘭市仲町 16(株)テツゲン 室蘭支店構内)	
建築年等	昭和 13（1938）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	(株)テツゲン	
管理者	(株)テツゲン	
文化財登録/指定		
解説文	(株)テツゲン室蘭支店の構内に保存されている SL で、昭和 13 年日立製作所で製造され、国鉄の SL が全廃された後も昭和 57 年まで同社室蘭工場専用線で活躍した。敷地内は立ち入り禁止だが、市道側からフェンス越しに見る事が出来る。	
参考情報	https://www.moiwa-orosi.com/entry/2018/07/22/%E5%AE%A4%E8%98%AD%E5%B8%82_%E9%90%B5%E5%8E%9F%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B9_S-205%E5%8F%B7	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(3) 夕張市

1874（明治7）年、アメリカ人鉱山地質学者ベンジャミン・スミス・ライマンの探検隊が夕張川上流の炭鉱地質を調査、その後1888（明治21）年、道庁の技師坂市太郎が志幌加別川の上流で石炭の大露頭を発見したことから「炭鉱の街夕張」の歴史が始まりました。1890（明治23）年に北海道炭礦鉄道会社（北炭）が夕張炭鉱を開鉱して以来夕張は炭鉱の街として栄え、北炭、三菱を中心に関連産業も発達していきました。

1960（昭和35）年には116,908人の人口を抱える都市となりましたが、昭和40年代になるとエネルギーの需要が石炭から石油へ移行したことにより次々に炭鉱は閉山していきました。1990（平成2）年に三菱石炭鉱業南大夕張炭鉱が閉山し「炭鉱の街夕張」としての歴史に幕を閉じ、その後夕張は「炭鉱から観光へ」と舵を切りました。

かつての炭鉱跡地を利用したテーマパーク「石炭の歴史村」が建設され、1980（昭和55）年には石炭博物館がオープンするなど、遺された炭鉱遺産は様々な形で活用されてきました。2007（平成19）年に夕張市は財政再建団体となりますが、石炭博物館が2018（平成30）年に全面改修を終え、マチや人々の営み、石炭産業について学ぶことができる中核施設としてリニューアルオープンするなど、炭鉱遺産は交流人口の創出や郷土愛を育む地域資源として活用され続けています。

No.42 夕張の石炭大露頭「夕張 24 尺層」

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（天然記念物）	
所在地	夕張市高松 7-1	
建築年等	明治 21（1888）年発見	
構造		
現存状況	有	
見学可否	一般公開	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定	道指定天然記念物	
解説文	<p>新生代古第三紀（約 5,000 万年前）の地層が地上に露出した露頭であり、石狩層群夕張層の基底部にあたる。下位から十尺層・八尺層・六尺層と累重し、計二十四尺（約 7.2m）の厚さを持つ良質な瀝青炭層。1888（明治 21）年秋に、幌内（三笠）から調査に入った道庁技師・坂市太郎によって発見されたといわれている。炭層の開発には非常に苦勞し、最初に層部中間（八尺層）を採掘。次いで、上部（六尺層）を採掘した後、最後に下部（十尺層）に進んだ。模擬坑道は、この二十四尺層の中に展開されている。</p> <p>国内に他に例のない大規模なものであり、天然標本として教育・自然科学的に非常に貴重なものであるとともに、夕張のまちの出発点である。</p>	
参考情報	前石炭博物館館長記述 夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	上層部の崩落による補修工事検討中。	

No.43 北炭北海道支店石炭分析室

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市鹿の谷山手町 52	
建築年等	大正 8（1919）年	
構造	鉄筋コンクリート・レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1913（大正 2）年に北海道炭礦汽船（株）北海道支店が移転した後、1919（大正 8）年に支店隣接地に、石炭の品質改善、利用・販売促進、採炭技術の改良を目的に建設された分析所。レンガ造の小規模な建物だが、同時期に各所に建設された変電所や立坑巻室と同様に、鉄筋コンクリートとレンガとの混構造が意匠に反映されており印象深い施設である。（現在は倉庫として活用。）</p>	
参考情報	前石炭博物館長による記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	外からは倉庫としても使っているように見えない。	

No.44 北炭夕張炭鉱北上坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市丁未	
建築年等	明治 24（1891）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北上坑は、北炭夕張炭鉱夕張第一砵の初期の主要坑道で、1891（明治 24）年に第二斜坑として開坑され、1918（大正 7）年に北上坑と改称された。</p> <p>この坑口では、明治末期から大正にかけて、一度に 200 名以上が犠牲となる大事故が三度発生している。1912（明治 45）年・ガス爆発・死者 267 名、1912（大正元）年・ガス爆発、216 名、1920（大正 9）年・ガス爆発・死亡 209 名。一時、休止の後に、1957（昭和 32）年に志幌鉱として再開、1967（昭和 42）年に廃止。</p>	
参考情報	『夕張市史』『北炭 70 年史』小野博旨「北海道炭鉱汽船株式会社夕張炭業所の技術構造」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	大正期の災害の慰霊として、末広墓地に慰霊碑が建立されている。春先・秋口くらの雪が少ない時期なら確かめに行きやすく、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団が「ぷらぷらまちあるき」を歴史村でしているため、より現状を知っている可能性がある。	

No.45 北炭夕張炭鉱社光ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市高松	
建築年等	明治 39（1906）年以降	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1906（明治 39）年に索道が設置されズリの堆積が始まったズリ山で、市内に残る中では最も古いもの。夕張駅構内の東側（その後の石炭の歴史村駐車場）にあった選炭機から索道でズリを運搬したため、ズリ山は鋭角のない形状であった。堆積したズリは取り崩され原形をとどめていないが、炭鉱住宅街（社光地区）に最も近接したズリ山であり、地域住民にとって、見慣れた故郷の風景の一部を形づくってきた。索道のバケットで遊んだ思い出を持つ住民もいた。</p>	
参考情報	前石炭博物館長による記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	夕張神社から見えるが森に隠れている。	

No.46 夕張炭鉱総合ボイラー煙突

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市社光	
建築年等	昭和 28（1953）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>総合ボイラーの煙突で、1953（昭和 28）年に北炭夕張炭鉱のボイラー施設の集約化を図った際に建設された。炭鉱稼働時は「安全第一」の標語が取り付けられ、選炭場のシンボルとして戦後の夕張の景観に欠かせないものであった。</p> <p>閉山後は地域エネルギー供給センター施設として転用されたが、現在は使用されていない。選炭機関連施設で唯一残る遺産。</p>	
参考情報	前石炭博物館長による記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	ボイラーの煙突は、福岡県田川市の博物館横などでも保存されている。煙害対策のため、戦前から煙突を高く建造するようになった。貴重なものだが、メンテナンスなどはしていないものと思われる。	

No.47 北炭夕張炭鉱大新坑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市小松	
建築年等	大正 2（1913）年	
構造	コンクリート・レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1907（明治 40）年に北炭夕張炭鉱で唯一の入排気目的以外の立坑として開発に着手されたが、国内不況の影響で一時中止された後、1913（大正 2）年に再開。その後、夕張第二砵大新坑（後に 4 区立坑）として、夕張炭鉱の主要坑口の 1 つとして、1955（昭和 30）年まで使われていた。坑名は、坑口近くを流れる大新の沢から付けられた。</p> <p>夕張炭鉱の立坑としては、その後他に、大井立坑が計画されたが、出水のため完成を見るに至らなかった。大新坑の遺構としては、立坑の捲室と付属の建屋の跡が見られる。</p>	
参考情報	北炭 7 0 年史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	札幌市立大学の芸術系研究室により、アートプロジェクトで作品展示が実施された。その時も随分崩落し、何の建物かわからない状況で、山の中の遺構で見に行くのは困難。	

No.48 北炭夕張炭鉱高松ズリ捨線

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市高松	
建築年等	昭和 26（1951）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>北炭夕張炭鉱の坑内・選炭機で生じたズリを、当初はスキップで、後にベルトコンベヤーによって、高松ズリ山に搬出するために築かれた運搬線路。全長約 800m で、代表的な遺構は拱橋（こうきょう）・スキップ隧道・ベルト隧道西坑門の 3 つ。1977（昭和 52）年の夕張新第二炭鉱閉山まで稼働していた。高松ズリ山は、夕張市内に残る最大のズリ山であるが、ズリは山の裏側に堆積されたため、全容が見える場所は限られる。しかし、昔から写真・絵画に描かれており、選炭機・炭住とあわせて夕張炭鉱の景観の一部を構成していた。</p> <p>〔拱橋〕 7 連アーチ橋、橋長 59m、幅員 8.6m、各アーチは半円形でスパン 6.0m。</p> <p>〔スキップ隧道〕 直線状のコンクリート造隧道で、延長 73m、幅員 5.5m、両端にはコンクリート造の坑門を構える。呼称は、建設当初はスキップ（特殊な鉄製炭車）が走行したことによる。</p> <p>〔ベルト隧道西坑門〕 直径 2.5m の半円アーチ断面形状を有する隧道の西端のコンクリート造坑門で、幅 8.9m、高さ 3.3m。呼称は、内部にベルトコンベヤーが設けられていたことによる。</p>	
参考情報	『夕張市史』『北炭 70 年史』文化庁国指定文化財等データベース夕張市 Web	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	現在も遠目でも見ることができる。北寿産業でズリの活用を行っており、許可をとれば歩いて近くまで行くこともできる。	

No.49 北炭夕張炭鉱千歳坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市丁未	
建築年等	明治 23（1890）年	
構造	コンクリート・レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1890（明治 23）年に開鉱した夕張炭鉱で、最初に水平坑道として開削された坑口。当初の名称は一番坑であったが、1918（大正 7）年に千歳坑に改称された。その後は丁未坑→千歳坑と改称を繰り返している。坑口レベルは、SL+366.6m。1970（昭和 45）年の閉山まで、夕張炭鉱夕張第一砵の主要坑口として使用された。</p> <p>付近には、レンガ造の古い千歳坑口も残っている。大正期の写真には、「壹番坑」のプレートのある坑口を背景に、当時ここで使われていたユニークな空気機関車が写されたものがある。これは、動力に圧縮空気を使った機関車で、夕張一番坑では、アメリカ H・K ポーター社製の圧縮蒸気機関車 3 台が、1900（明治 33）年から 1923（大正 12）年まで使用されていた（廃止後は一時、夕張神社境内に展示）。</p>	
参考情報	『夕張市史』 小野博旨「北海道炭鉱汽船株式会社夕張炭業所の技術構造」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	比較的発見しやすい坑口。	

No.50 旧北炭夕張炭鉱天龍坑口

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市高松7	
建築年等	明治33（1900）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	一般公開	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>1900（明治33）年に第三斜坑として開坑、1918（大正7）年に天龍坑と改称された。夕張炭鉱初期の主要坑道だったが、1938（昭和13）年にガス爆発事故（死者161名）が発生し採炭が中止された。石炭露頭に開削された坑口であり、入気坑と排気坑が対になって残っていること、赤レンガの化粧坑口が意匠的に美しいことが特徴である。北炭夕張炭鉱の坑口名は川の名前を使用しており、この坑名も天龍川に由来している。</p> <p>〔資材斜坑坑口〕煉瓦5枚厚、スパン4mの半円アーチを築き、壁面にはピラスター、コーニスなどや、「天龍坑」と陰刻された扁額を付ける。人車斜坑坑口とともに、北炭夕張炭業所内で最大採炭量を誇った第二砦における代表的遺構のひとつ。</p> <p>〔人車斜坑坑口〕錐形に盛り上げた石材を要石に用いた煉瓦4枚厚、スパン2.5mの半円アーチを築き、ピラスター、コーニスなどを付けた壁面の左右に翼部を張り出す堂々とした構え。</p>	
参考情報	前石炭博物館館長記述 文化庁国指定文化財等データベース	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	レンガの補修もしていないため、崩れかけていることが見てわかる。模擬坑道の奥に位置しており、排水用パイプがあるため、近くで見ることができない。	

No.51 北炭夕張炭鉱夕張第3硯坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市末広2丁目	
建築年等	昭和2（1927）年	
構造	コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	不可（許可を要す）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1897（明治30）年に新夕張炭鉱として採炭に着手、その後は東京瓦斯・石狩石炭(株)など所有を変転し、1920（大正9）年に北炭が石狩石炭(株)を併合した。1932（昭和7）年に夕張炭鉱へ吸収したが、1938（昭和13）年に夕張炭鉱を再編した際に夕張第三硯となった。</p> <p>〔松島坑〕北炭が石狩石炭(株)から引き継いだ旧7番坑の坑口を切り替え、松島坑としたもの。その後、1963（昭和38）年に終掘し、残炭採炭を目的に新夕張炭鉱(株)松島坑となるが、1972（昭和47）年に閉山。マウントレースイスキー場の斜面に痕跡を残すのみで発見は困難である。</p> <p>〔橋立坑〕北炭が石狩石炭(株)から継承した旧本坑の坑口を切り替え、橋立鉱として使用。松島坑と同様に1962（昭和37）年に終掘し、残炭採炭の新夕張炭鉱(株)橋立坑となり、1969（昭和44）年に閉山。</p>	
参考情報	夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	スキー場の斜面にあるが、見に行くことはできる。	

No.52 採炭救国坑夫の像

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	夕張市高松7	
建築年等	昭和19（1944）年	
構造	コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	一般公開	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>石炭産業に従事する人々の激励・慰問のため、軍需生産美術推進隊彫塑班の中村直人氏ら（二科会会員）と地元協力者らにより、1944（昭和19）年に建設された高さ3.63mの像（6月29日完成）。戦時体制下で、資材の入手が困難な上に、1週間以内の完成期限やコンクリート製大型塑像の屋外制作といった困難な条件の下での作業となり、携わった関係者は完成までに非常に苦労したと伝えられている。</p> <p>完成当時は「進発の像」と呼ばれたが、戦後、石炭増産が経済復興を進める上で最重要課題となる中で「採炭救国坑夫像」と呼ばれるようになった。制作当時に設置された北炭夕張炭業所前庭から、1985（昭和60）年に現在地へ移転された。炭都・夕張のシンボルとして市民に親しまれ、戦時美術品としても美術史的にも価値がある。北海道で確認されている坑夫像は他に2体（三井砂川炭鉱、三井芦別炭鉱）があるが、オリジナルとして残っているのは夕張だけである。</p> <p>※彫塑班は複数名で来道</p>	
参考情報	夕張の碑	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	<p>令和2年度に改修しており、研究者によってはオリジナルとは言わないものになっている。改修は、コンクリートではない別の素材で表面全体が包まれ、表面の質感などは変わった。なお、空知にある他の像は別素材による再現となっている。炭鉱に関する像は全国にあるが、戦中の炭鉱関連の像としては11体しか確認されておらず、美術の戦争利用という観点でも学術的に貴重な作品。</p>	

No.53 末広墓地石碑群

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市末広 1 丁目	
建築年等	明治期以降	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	自由に見学可能	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市、各種団体	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	末広地区にある市営墓地。明治期以降の女子墓碑群や各炭鉱災害犠牲者の慰霊碑などが多く残っている。1920（大正 9）年に北炭夕張炭鉱北上坑で発生したガス爆発事故（死亡 209 名）の慰霊碑や、女子墓碑、炭鉱災害慰霊碑、朝鮮人墓碑、夕張孤児院院主墓碑などがある。夕張の炭鉱の悲しい歴史が凝縮された場所と言える。	
参考情報	夕張市史、夕張の碑	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	自由に見学できるものの、石碑は墓地内に点在しており案内などはない。したがって、知っている人といかないとわからない。近くに駐車場が少ないのも難点。なお、慰霊碑は末広墓地だけでなく市内に点在している。明治から昭和初期の慰霊碑が集中している点で、近代化が進む社会の中の、産炭地の現実が垣間見えると言ってよい。	

No.54 日本キリスト教会夕張伝道所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市鹿の谷1丁目	
建築年等	昭和元（1926）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	日本キリスト教会	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北海道炭礦汽船（株）社員のなかのキリスト教徒によって運営されてきた教会堂。建設資金は、北炭をはじめ多方面から集めた寄付金や、婦人会が主催したバザー・音楽会・映画会などの収益金で調達された。</p> <p>建設の際に周囲に植えたアカシアの木が現在では教会堂の屋根より高くなり、「アカシアの教会」として地域住民に親しまれている。映画「塩狩峠」（1973年、監督：中村登、製作：ワールド・ワイド）の中で、旭川六条教会として登場している。</p>	
参考情報	夕張市史、炭鉱関連資料を参考に前石炭博物館館長が記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	<p>今も残るキリスト教会は、元々は1926（昭和元）年に夕張聖公会協会が建設したもので、建造物だけを引き継ぐ形で、日本キリスト教団、そして日本キリスト協会と現在まで受け継がれている。よって名称は「旧夕張聖公会協会協会・旧日本キリスト教団協会・現日本キリスト教会夕張伝道所」と表記するのが、最も正しいのかもしれない。それに伴って、建築年数等が変更される。元々から辿れば、1926（昭和元）年としてもよい。以上のことは、現在の管理団体の考え方もあるため、精査が必要。さらに補足だが、建築から100年以上が経とうとしており、夕張市内で最も古い建造物になるものと考えられる。</p>	

No.55 福住人車軌道敷

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市富岡・福住・旭町	
建築年等	昭和 20（1945）年	
構造		
現存状況	無（盛土跡が残る）	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>山頂に向かって延びた炭鉱住宅に居住する従業員・家族のために、北炭が設置したケーブルカーの線路跡。1942（昭和 17）年から計画・建設され、1945（昭和 20）年から運行を開始した。始点（夕張鉄道バス停「人車前」・海拔 365m）から、中間にあった 2 駅（雄飛台、福住 3 区）を経て、終点（福住 6 区・海拔 500m）まで標高差 135m。</p> <p>定員 76 名、運行時間＝06:00～23:00、運行数＝一日 80 往復、一日あたり利用者数＝4,000 人、運賃無料。</p> <p>斜面上部の炭鉱住宅の閉鎖に伴い、1974（昭和 49）年に廃止。急斜面上に展開する夕張炭鉱の居住環境の特殊性を物語る遺産である。</p>	
参考情報	前石炭博物館長による記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.56 旧北炭鹿ノ谷倶楽部（夕張鹿鳴館）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市鹿の谷2丁目	
建築年等	大正2（1913）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	元大夕張鹿鳴館(株)	
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群、国指定登録有形文化財	
解説文	<p>1958（昭和33）年現在、北炭には20個所の倶楽部が存在していたが、そのうちもっぱら賓客や会社幹部の宿泊・会合に用いる最もランクが高いものが鉱業所単位にあった。「鹿ノ谷倶楽部」は夕張鉱業所・平和鉱業所の倶楽部で、「空知鉱業所倶楽部」「幌内鉱業所倶楽部」に比べて、規模（30余室）・質（建築技術の粋を集め贅を尽くした本格的和風建築物）ともに北炭を代表する倶楽部であった。</p> <p>1913（大正2）年に北海道支店が岩見沢から夕張に移転した際、岩見沢にあった重役宅を移築して、増築の上で倶楽部として建設された。</p> <p>北面して玄関を構える木造平屋建で、建築面積1,609㎡。中央に本館、西に第一別館（1916（大正5）年増築）、東に第二別館を配し、廊下で繋いでいる。本館は諸室を雁行型に配し、寄棟や切妻の屋根を複雑に連続させ、下屋庇をまわし深い陰影を見せている。倶楽部建築の好例である。1954（昭和29）年に昭和天皇が宿泊した際に、寝室、炊事場を大改造している。1992（平成4）～1994（平成6）年大規模改修。1999（平成11）年にはNHK連続テレビ小説「すずらん」のロケにも使用された。</p> <p>本館のほかに、かつて第1・第2号社宅もあり、北炭の幹部職員が居住した鹿の谷地区は一般市民が入り難い雰囲気があったと言われている。</p>	
参考情報	『夕張市史』『北炭70年史』文化庁国指定文化財等データベース	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.57 清水沢宮前町・清栄町住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清水沢宮前町、清水沢清栄町	
建築年等	1960年代後半以降	
構造	コンクリート造1～2階建、木造平屋建	
現存状況	一部残存、一部解体	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市/清水沢プロジェクト	
文化財登録/指定		
解説文	<p>宮前町には、北炭夕張新他鉱の開発前から、主として清水沢炭鉱と電力所（発電所）の職員・鉱員住宅が入居していた。職員住宅は木造平屋建、鉱員住宅は1960年代後半の厚生年金融資還元のプロック住宅（1棟4戸2階建）と1970年前後の改良住宅（1棟4戸2階建）が混在していた。</p> <p>清栄町は北炭清水沢炭鉱の選炭施設用地だった所で、北炭夕張新炭鉱の炭住街を清陵町に建設するため清陵町炭住に居住していた清水沢炭鉱・電力所・炭鉱病院の従業員の移転先と、一部の直轄・下請会社の職員を収容するために、夕張新炭鉱関係炭住の中で最も早い1971（昭和46）年に改良住宅を主体とする152戸が建設された。</p> <p>このように、清水沢宮前町・清栄町は、様々なタイプの住宅が混在し、所属も多岐にわたっていたという点で珍しく、それが今も住民（大半は元炭鉱従業員）が居住し、地区中心としての浴場・集会所が残っているという点で貴重である。一団で今も残るこれら炭鉱住宅街は、北炭清水沢炭鉱ズリ山から一望に俯瞰できる。</p>	
参考情報	「北炭労働運動百年史の栄光と悲惨」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.58 北炭夕張新炭鉱清陵町住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清陵町	
建築年等		
構造	コンクリート造2～4階建	
現存状況	一部残存、一部解体	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭夕張新炭鉱は、1970（昭和45）年に着工され、1975（昭和50）年から営業出炭を開始した。鉱員の多くは、市域北部の夕張炭鉱（夕張第一鉱・夕張第二鉱）、夕張新第二炭鉱、平和炭鉱から移行したため、坑口により近い市域南部の清水沢地区に炭鉱住宅を建設する必要があった。1974（昭和49）年から移転が開始され、1976（昭和51）年度末の入居戸数は、清陵1区572戸、清陵2区173戸、清陵3区357戸、沼ノ沢32戸の合計1,134戸となった。夕張川左岸段丘上に展開された新炭住は改良住宅法によって建設された。標準的な炭住は、1棟18戸（3階建）と1棟5戸（2階建）の3DK浴室なし。炭住の街区計画は、北海道大学工学部の太田實教授（都市計画学）に依頼した。当初は集中暖房方式も計画に入っていたが、オイルショックと工期遅延によって開発資金が大幅に膨らんだことから断念され、従来の炭住街のような同一規格の住宅が規則的に並ぶのではなく、個々の棟の向きが違っている特徴的な住棟配置に太田プランの片鱗が残されている。地区中心には商業・公益施設が、居住区ごとに浴場・集会所が配置された。夕張新炭の主要出入坑口である第一立坑や繰込所がある総合事務所は、炭住から山を挟んで1,500m東方にあるため、その間を通洞で結び人車を運行していた。なお、職員住宅は、清栄町の一部に新築された以外は手当てされず、それまでの千代田・鹿ノ谷など従来の職員住宅から通勤する者が多かった。</p>	
参考情報	笠島一「北炭労働運動百年史の栄光と悲惨」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	書かれたことの根拠となる資料が探せず、留意が必要。	

No.59 本町商店街

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	文化的景観	
所在地	夕張市本町 1 丁目・本町 2 丁目・本町 3 丁目・本町 4 丁目	
建築年等	昭和 24 (1949) 年以降	
構造		
現存状況	有	
見学可否	自由に見学可能	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人 (本町商店街振興組合)	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1949 (昭和 24) 年に 335 戸を焼失した夕張大火の後に建設された商店街。1960 年代の最盛期には、夕張最大の繁華街として、多くの商店・飲食店や金融機関などが軒を連ね、昼夜の別なく賑わっていた。道道 38 号に沿って (現在の市役所西側を走る新道の開通前)、上流部から本町 1 丁目 (国鉄夕張線に沿って夕張炭鉱病院から北海道拓殖銀行付付近)、本町 2 丁目 (おかむらデパート付近)・本町 3 丁目 (商工会会議所・夕張信用金庫付近)、本町 4 丁目 (市役所東側) の一帯で、デパートがある本町 2 丁目 が最も賑わいを見せた。本町 2・3 丁目の道道に平行する東側斜面上の梅ヶ枝通は、飲み屋街として飲食店が最も集積していた。人口減少に伴い次第に規模を縮小し、石炭の歴史村開業に合わせて「歴史村商店街」と改称された。2005 (平成 17) 年に、本町二丁目の区画整理事業が完了し景観が激変した。なかでも最後まで残った歴史的建造物として、桜湯があった。大正時代に創業した銭湯で、大火による焼失後に再建。最盛期には階上では書画展やダンス講演会などが催され、1995 (平成 7) 年の廃業後も 1997 (平成 9) 年～1999 (平成 11) 年に市民有志による「桜湯ポスター館」として継続利用されたが、区画整理事業に伴い解体された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	上記にある本町二丁目の区画整理事業により、歯抜けの商店街となった。	

No.60 北炭夕張炭鉱専用鉄道高松跨線橋

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市高松	
建築年等	昭和 11（1936）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	自由に見学可能	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>夕張鉄道に接続していた北炭夕張炭鉱専用鉄道（1927 年開通）に架かる跨線橋。橋長 22m、幅員 2.4m の単アーチ橋で、炭住街と高松浴場を結んでいた。外観の特徴として、地盤高の異なる地点を結ぶために橋桁が傾斜していること、橋上に 5 段の階段を設けて中央部を高くしていること、欄干と一体型の照明灯を中央部に配置していることが挙げられる。なお、中央部の嵩上げは建設当初になかった形状で、鉄道車両の大型化に伴い改修されたと伝えられている。北炭夕張炭鉱専用鉄道は、高松地区に乗降場が設けられ、通勤列車が運行されていた時期もあった。</p>	
参考情報	『夕張市史』『北炭 70 年史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	<p>破綻発覚の最中の文化財登録ということもあり、保存保全のための流れなどが熟慮されないまま、現在まできている。一部崩壊などもしており、下を通り抜けるのも危険な状態。</p>	

No.61 S L 館の鉄道車輛

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	鉄道		
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）		
所在地	夕張市高松		
建築年等			
構造			
現存状況	有		
見学可否	不可（非公開）		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	夕張市		
管理者	夕張市		
文化財登録/指定			
解説文	<p>夕張の石炭及び旅客輸送に貢献した夕張鉄道及び三菱大夕張鉄道の蒸気機関車及び客車。鉄道省の車両をベースとしつつ、各社固有の形式（装備）で発注し、製造された希少な鉄道車両群である。</p> <p>【夕張鉄道 11 形 14 号機】：同鉄道開業に際して自社で発注し、日立製作所笠戸工場で 4 両製造されたうちの 1 両。鉄道省 9600 形をベースとし、勾配線区をもつ運炭鉄道として、9600 形の縮小版もしくは 9200 形の近代化をイメージしたとされる夕鉄固有の車両。14 号機は野幌延長に備えて増備され、貨物及び混合列車牽引で活躍。1971（S46）年に廃車され、翌年に夕張市に寄贈された。</p> <p>【夕張鉄道ナハニフ 151】：昭和 10 年代の旅客増に対応すべく、ナハ 150 形(150～153)として自社で発注し、日本車輛東京支店で 4 両製造されたうちの 1 両。鉄道省スハ 32 形に類似しているが、車長は 18m 級、台車は TR11 である点が本車輛固有である。客貨分離により 1960 年前後に付随車化（気動車の中間に組込、車掌室や荷物室を設置、クリーム+茶色の塗装）された。本車輛は 1971（S46）年に廃車され、翌年に夕張市に寄贈された。</p> <p>【三菱大夕張鉄道 No.4】：日立製作所笠戸工場で製造。鉄道省の 9600 形の機関と C56 形のテンダーの組み合わせによる固有の形式。製造後は三菱大夕張の車籍のまま三菱美唄鉄道に貸し出され、1947 年に返却（夕張へ）。貨物、旅客の輸送で活躍したが、1973（S48）年の大夕張炭鉱閉山と大夕張鉄道短縮に伴い SL は廃止され、翌年に廃車され、その後夕張市に寄贈された。</p> <p>石炭の歴史村構想の一環で、1980（昭和 55）年に SL 館を開館し、寄贈された鉄道関連品を収蔵する展示施設として運営。</p> <p>2007（平成 19）年度から夕張リゾート(株)が指定管理者として運営してきたが、</p>		

	2008 (平成 20) 年 10 月末で同社は指定管理を返上したため、休館が続いている。三菱大夕張鉄道保存会が主体となり雪下ろしなどを行ってきたが、展示施設建屋の劣化が進んでいる。
参考情報	奥山道紀：夕張鉄道 車両編：RM ライブラリー286・ネコパブリッシング、2024年5月
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	SL 館内にあることにより、屋外に比べて保存状態は良い。公開の希望や問合せも多いが、歴史村が非公開で、SL 館内の劣化も進行しているため、公開（自由見学）は困難な状況。貴重な遺産として限定的な公開などを検討していく必要がある。長期的な保存に向けては、支援者参加型（クラウドファンディングなど）の保存方策の検討も必要。

No.62 幸福の黄色いハンカチ思い出ひろば

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	夕張市日吉 5-1	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	一般社団法人夕張市観光プロモーション	
文化財登録/指定		
解説文	1977（昭和 52）年公開に公開された、『幸福の黄色いハンカチ』のラストシーンを再現した施設。ロケ地となった炭鉱住宅が保存公開され、撮影用の車や小道具が展示されている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.63 旧北炭夕張炭鉱模擬坑道（夕張市石炭博物館）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市高松 7-1	
建築年等	昭和 14（1939）年	
構造	鉄骨アーチ巻一部コンクリート巻・レンガ巻	
現存状況	有	
見学可否	一般公開（令和 7 年度より予定）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>公開されている国内唯一の石炭層に設けられた模擬坑道である。延長は 180m、1939（昭和 14）年に皇族が夕張を訪れた際に見学用坑道として整備された。1954（昭和 29）年に、昭和天皇・皇后両陛下が訪問された際に、ダブルジグコール・カッターが設置され、模擬坑道として一層形が整えられた。</p> <p>その後、映画撮影、救護隊の訓練、一般見学などにも利用された。1980（昭和 55）年の石炭博物館の開館の際に、見学コースの一部として、自走枠やドラムカッターなど大型採炭機械が加えられ、展示用模擬坑道として完成。坑内では地中にある実物の炭層を見学できるほか、上添坑道・下添坑道・採炭切羽・斜坑などの炭鉱の坑道骨格を見ることが出来る（今後どのように説明ができるか精査が必要）。</p>	
参考情報	『夕張市史』石炭博物館館長記述文化庁国指定文化財等データベース	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.64 北炭化成工業所コークス炉煙突

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉄	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市日吉	
建築年等	昭和 33（1958）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭化成工業所（主としてコークスを製造する石炭化学プラント）の煙突。高さ 63m、基底部直径 5.0m、頂頭部直径 1.9m。1934（昭和 9）年に鑄物用特殊コークスの製造を開始し、1945（昭和 20）年に従来のコークス工場を拡張し化成工業所を設立。1950（昭和 25）年の不況により一時減産となったが、朝鮮特需による需要増加再び増産体制に入り、1958（昭和 33）年にコッパース式コークス炉 50 基を新設しさらに拡張した。1978（昭和 53）年に北炭の経営合理化のため閉鎖。その後、石炭技術研究所の石炭ガス化試験工場として使用されたが、現在は煙突のみ残っている。</p>	
参考情報	『夕張市史』『北炭 70 年史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.65 北炭平和炭鉱坑口・ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市千代田	
建築年等	昭和 12（1937）年以降	
構造	坑口＝コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）、ズリ山は道路沿いから見えますが、坑道は崖下などです。	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1920（大正 9）年、(株)石狩石炭から引き継いで若菜辺炭鉱として北炭の炭鉱となったが、1914（大正 3）年に死者 423 名を出すガス爆発事故を起こすなどガス湧出量が極めて多い炭鉱であったため、1930（昭和 5 年）に休止された。その後、増産要請に応じて平和炭鉱と名付けて開発計画を樹立し、1937（昭和 12）年に第 1 斜坑の開削に着手、1939（昭和 14）年から出炭を開始した。</p> <p>その後、1954（昭和 29）年には第 2 斜坑からの出炭を開始。1966（昭和 41）年には出炭量が 100 万 t を超えるまでに成長したが、深部移行によって採炭条件が悪化し 1975（昭和 50）年に閉山、従業員は夕張新炭鉱に移行した。1937 年の開削時から使用された水平人車坑口（2 ヶ所）が半分ほど地中に埋もれた状態で残っており、隣接してズリ山も赤盤積出で一部改変されているものの山容を保った状態で残っている。</p>	
参考情報	前石炭博物館長による記述	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	現地の状況は要確認。	

No.66 夕張鉄道軌道敷

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市本町 4 丁目～夕張市日吉～夕張市富野	
建築年等	昭和 13（1938）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	夕張市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>夕張鉄道は、石炭搬出と炭鉱資材搬入のため北炭が全額出資して設立した鉄道会社で、新夕張～野幌間 53.2 km を結んでいた。1926（大正 15）年に新夕張～栗山間 30.2 km が、1930（昭和 5）年栗山～野幌間 23.0 km が開通した。夕張市内には、旧夕張市民会館にあった夕張本町（当初は新夕張）駅、末広駅、国鉄夕張線接続駅で本社・機関庫が置かれた鹿ノ谷駅、営林署前駅、若菜駅、夕製前駅、礦業所前駅、平和駅、錦沢駅があった。</p> <p>旅客が 1960（昭和 35）年前後で約 200 万人、貨物が 1965（昭和 40）年前後で約 200 万トン（うち 3/4 が石炭）と輸送量のピークを迎え自社発注の気動車を導入するなどしたが、以降は石炭産業斜陽化と人口減少によって輸送量は漸減し、1971（昭和 46）年に新夕張～鹿ノ谷間の廃止と鹿ノ谷～栗山間の旅客営業廃止、1974（昭和 49）年に栗山～野幌間の旅客営業休止、1975（昭和 50）に鹿ノ谷～栗山間の全線が廃止された。</p> <p>夕張鉄道の跡地の大部分はサイクリングロード（高松～千代田間：夕張市観光施設設置条例、かつては千代田から先の富野までであったが途中のトンネルが通行不能となり通行できなくなった）として整備されていて、かつての線路跡をたどることができる。鹿ノ谷駅は機関庫などがあった駅構内部分が広大な空地となっていており往時の規模を推察できるほか、営林署前駅は駅舎とホーム上屋が、若菜駅はホーム基礎が残っている。</p> <p>平和運動公園には、北炭平和炭鉱の炭住街を大きくカーブして迂回敷設された線路跡（Ωループ）や J R 石勝線・道道 38 号、志幌加別川をオーバークロスする鉄道橋が残っている。遊園施設がありスイッチバックであった錦沢駅はサイクリ</p>	

	<p>ングロードの廃止によってアプローチが困難であるが、道道3号の付け替えに伴い架設された錦冬橋の栗山方付近で、鉄道線跡（スイッチバック最下段）に接近している。</p>
参考情報	『北炭70年史』『夕張のSL展』
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	

No.67 北炭清水沢炭鉱事務所・繰込所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清水沢清栄町	
建築年等	昭和 29（1954）年	
構造	事務所＝木造 2 階建、繰込所＝鉄筋コンクリート造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	国	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭清水沢炭鉱の繰込所。清水沢炭鉱は、石炭増産のための政府政策に呼応して復興金融公庫（復金）融資を受けて 1947（昭和 22）年に開発着手されたが、1949（昭和 24）年にドッジ指令によって突如、復金融資が打ち切られた。鉱令の増した北炭夕張炭鉱の後継鉱として期待されていたことから、規模を圧縮して事業は継続されたが自然条件に阻まれ、着工後 7 年が経過した 1954（昭和 29）年に出炭を開始した。</p> <p>当時の姿をそのまま残す事務所と繰込所は、開発資金圧縮の影響を受け小規模なものながら、戦後復興の期待を込めて開発された炭鉱らしい明るいフォルムを持っている。後に主要入出坑坑口となった清水沢立坑（内径 4.8m、深度 260m、1957 年完成）と繰込所とは、道道 907 号（1993 年に国道 452 号に昇格）と三菱大夕張鉄道を挟んだ位置にあり、入出坑の際は徒歩連絡であった。現在は、民間会社の事務所、倉庫（工場）として使用されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	清水沢炭鉱の開坑の表現を削除。会社としては 1947 年から始まっているため。建築年はわからなかった。	

No.68 北炭清水沢火力発電所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清水沢清栄町	
建築年等	大正 15（1926）年	
構造	鉄筋コンクリート造 3 階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）清水沢プロジェクトに申し込みで内部も見学可。	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	東亜建材工業（株）	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭の火力発電所で、坑内電化の普及と事業発展によって増大した電力需要をまかなうため、1926 年（大正 15）年に 6,000KW 発電機 2 台で運転を開始した。同時に清水沢～夕張間を 44KV 送電線路で連絡したことで 1918（大正 7）～1924（大正 13）年に整備された約 100 km の送電線路（真谷地～夕張～幌内～幾春別・神威）と接続され、電力配分の効率化が図られた。その後、一層の電力負荷増加に対して、1937（昭和 12）年に夕張～幌内～神威間送電線路を 66KV に昇圧、翌 1938（昭和 13）年には 12,500KW 発電機 1 台が増設され稼働開始、1941（昭和 16）年には 25,000KW 発電機 2 台が増設された。</p> <p>これにより、発電設備容量は 74,500KW（認可出力 49,500KW）となった。1948（昭和 23）～1949（昭和 24）年の 24 カ月にわたり動員発電所に指定され、北海道電力会社の委託発電を受けて 1 億 256KWH の送電を行い、終戦後の電力不足の解消に貢献した。1953（昭和 28）年から平和炭鉱・清水沢炭鉱の坑内誘導ガスと化成工業所で副産されるコークスガスの利用を開始、1957（昭和 32）年からは夕張第 2 鉱のガスも使用された。1971（昭和 46）年には灯油混焼も開始され、1 個所で石炭・ガス・石油・水力（隣接する清水沢水力発電所）の 4 リソースを利用するユニークな発電拠点となった。</p> <p>1978（昭和 53）年の北炭からの生産部門三社分離によって北炭夕張炭鉱(株)の所属となり（この時点で発電設備容量 62,500KW・認可出力 50,000KW）、夕張新炭鉱が閉山した 1982（昭和 57）年には北炭真谷地炭鉱(株)に移管、さらに送電先の北炭真谷地炭鉱・北炭幌内炭鉱の閉山により 1990（平成 2）年に操業を停止した。底地が国有地であることから、1996（平成 8）年から建屋・施設の解体が進</p>	

	められている。
参考情報	『北炭 70 年史』「電力所概要」
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	

No.69 旧北炭清水沢水力発電所

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清水沢清栄町	
建築年等	昭和 13（1938）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	堰堤（道路）は自由に見学可能	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道	
管理者	北海道企業局	
文化財登録/指定		
解説文	<p>電力負荷の増大に対応して、1938（昭和 13）年に清水沢火力発電所の上流部に隣接した夕張川にの堰堤（高さ 21.20m・堤長 77m・有効落差 14.0m）を設け、2,000KW の清水沢水力発電所が稼働開始した。1949（昭和 24）年には、北海道開発局による土地改良区農業灌漑用水確保のため夕張川の利水計画がたてられ、その一環として全額国費負担で堰堤の 2.2m 嵩上げ工事が行われた（高さ 25.4m・堤長 92.8m・有効落差 18.2m）。これに合わせて発電容量が 2,800KW に増強され、1963（昭和 38）年には 3,400KW にさらに増強された。</p> <p>炭鉱の閉山に伴い 19946（平成 6）年に北海道企業局に譲渡され、その後上流に夕張シューパロダムが完成したことで、農業用水確保の役割を終えたことから、2016（平成 28）年に嵩上げゲートを撤去した。併せて老朽化した発電所の全面改修を実施し、2021（令和 3）年 4 月に営業運転を再開した（出力 3,490KW）。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』「電力所概要」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.70 北炭清水沢炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市清水沢清栄町	
建築年等	昭和 35（1960）年前後	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）一部登ることもできる。	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭清水沢炭鉱のズリ山。山頂は SL263m で、周辺の炭住街は SL195m であるから、比高は 68m となる。夕張川右岸河岸段丘の上位面にあった選炭機からのズリと、下位面にあった北炭清水沢火力発電所からの石炭焼却灰を積み上げるため、両施設の近傍に幾つかのズリ山が築かれた。</p> <p>現在残っているズリ山は、国土地理院の空中写真・地形図の図歴からみて、1960（昭和 35）年前後から堆積が始まったものと推定される。1966（昭和 41）年撮影の空中写真によると現在残る程度にまで積み上がっており、1977（昭和 52）年の空中写真では夕張川にベルト栈橋らしきものが架橋され左岸斜面上にズリが積載されていることから、1960 年代末には新たなズリ山に移行したと思われる。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.71 国鉄夕張線（石勝線=通称夕張支線）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市社光～夕張市紅葉山	
建築年等	昭和 13（1938）年	
構造		
現存状況	有（建造物の一部）	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	JR 北海道ほか	
管理者	JR 北海道ほか	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1890（明治 23）年に開鉱した北炭夕張炭鉱の石炭を輸送するため、北炭は 1892（明治 25）年に追分～夕張間 43 kmの夕張支線を開通させた。1906（明治 39）年に国有化され、1907（明治 40）年には紅葉山～楓間の貨物営業を開始、1911（明治 44）年に三井鉱山専用鉄道として登川まで延伸された。出炭量の増加によって 1912（大正元）年～1919（大正 8 年）にかけて複線化されたが、第一次世界大戦後の不況と 1926（大正 15）年の夕張鉄道開通による新たな短絡運炭経路の出現によって輸送量が減少し、1932（昭和 7）年に再び単線に戻された。</p> <p>1981（昭和 56）年に国鉄石勝線が開通し、紅葉山駅は新線に付け替え移転して新夕張駅に改称、新夕張～夕張間は石勝線夕張支線となった。あわせて紅葉山～登川間は新線に移行し、旧楓駅と旧登川駅の間地点に新しい楓駅が設置された。1987（昭和 62）年に国鉄分割民営化に伴い、北海道旅客鉄道（JR 北海道）が承継した。楓駅は 2004（平成 16）年に旅客営業を廃止し信号所となり、2016（平成 28）年には新夕張・滝ノ上間のにあった十三里駅も信号所化された。2019（平成 30）年に新夕張～夕張間の JR 石勝線夕張支線が廃止され、2024（令和 6）年に滝ノ上駅が信号所化されたことで、夕張市内の駅は新夕張駅のみとなった。</p> <p>この他、夕張市内では、開業当初から利用された鹿ノ谷駅のほか、夕張駅、南清水沢駅の駅舎が現存する。橋脚・隧道は、次の個所で残っている。</p> <p>〔橋脚〕 鹿ノ谷～夕張間（鹿ノ谷から 300m）、清水沢～鹿ノ谷間（清水沢から 2,600m・800m）、南清水沢～清水沢間（清水沢から 800m）、沼ノ沢～南清水沢間（南清水沢から 1,600m）</p> <p>〔隧道〕 清水沢～鹿ノ谷間（清水沢から 2,700m）なお、夕張駅は下流に移動しており、1890 年開業時～1985（昭和 60）年まで夕張神社前に、二代目は 1990</p>	

	(平成2)年まで旧夕張市民会館裏手にあり、現位置の夕張駅は三代目にあたる。
参考情報	
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	鹿ノ谷駅の方が南清水沢駅よりも古く、同じ駅舎といっても、改修されていない駅舎として残るのは鹿ノ谷駅だけなので、留意が必要。

No.72 北炭真谷地炭鉱貨車積ポケット

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市真谷地	
建築年等	昭和 34（1959）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	北炭真谷地炭鉱の貨車積み施設で、1959（昭和 34）年の新選炭機整備に合わせて建設された。ポケットの線路は 2 線で、精炭は真谷地炭鉱専用鉄道によって沼ノ沢駅に搬出された。現在は大半が除却され、擁壁など一部が残っているのみ。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	現地を見に行かないとわからない。	

No.73 北炭真谷地炭鉱専用鉄道跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市沼ノ沢～夕張市真谷地	
建築年等	大正2（1913）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	北炭真谷地炭鉱の運炭鉄道。国鉄夕張線（JR北海道石勝線）沼ノ沢駅から真谷地炭鉱まで4.4 kmを結んでいた。1905（明治38）年から馬車鉄道によって石炭運搬され、1913（大正2）年に専用鉄道に代わった。大正時代から戦前にかけて（1915～1932年）に旅客運送も行ったが、その後バス転換、1936（昭和11）年に旅客輸送を再開し1966（昭和41）年まで続いた。途中で、真栄町（6区）、清真台（5区）の2停留所が設けられていた。1966（昭和41）年まで国鉄機関車が乗り入れており、1977（昭和52）年から1987（昭和62）年の廃止まで夕張運送に運行委託されていた。現在は、線路跡、清真台停留所ホームへの階段が残っている。	
参考情報	夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.74 北炭楓坑発電所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市楓 33	
建築年等	大正 2（1913）年	
構造	レンガ造平屋建	
現存状況	有（崩れた状態）	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>電力利用の拡大により新設された発電所で、1909（明治 42）年に着工されたが、日露戦争後の不景気で一時建設を中止した後、隣接する三井炭山(株)登川炭鉱から受電予約を受けたため 1912（大正元）年に工事再開、1913（大正 2）年に竣工した。出力 1,000KW、ボイラーおよび発電機は米国ウェスティングハウス社製。2 棟並んだレンガ造の切妻屋根が特長的である。夕張発電所の増設や送電線路開通などにより電力需要を賄える見込となったため、1920（大正 9）年に休止。1922・1923・1926 年に一時再開したが、1928（昭和 3）年に廃止された。廃止後は楓坑事務所に転用され、1987（昭和 62）年の北炭真谷地炭鉱閉山まで使用された。閉山後はガラス工芸館として再利用されたが、これも 1994（平成 6）年に閉鎖された。</p>	
参考情報	夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.75 北炭真谷地炭鉱楓坑ズリ山

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	炭鉱		
文化財区分	記念物（史跡）		
所在地	夕張市楓		
建築年等	昭和 38（1963）年以降		
構造			
現存状況	有		
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	夕張市		
管理者			
文化財登録/指定			
解説文	<p>北炭真谷地炭鉱は、1905（明治 38）年に頭山満・金子元三郎から鉱区（クリキ炭鉱と呼称）を買収した。鉱区は、標高 400～500m の山を挟んで、北側の真谷地地区（桂坑）と、南側の楓地区（楓坑）の 2 区域からなり、買収直後に開坑に着手した。楓坑は、1919（大正 8）年に三井鉱山(株)から登川炭鉱を買収した際に登川管轄下に入って操業されたが、1953（昭和 28）年の合理化で登川炭鉱を楓坑に集約し真谷地鉱に統合された。</p> <p>桂坑（桂立坑）と楓坑（斜坑）は別個に揚炭系統と選炭機を有したが、1960（昭和 35）年から合理化工事に着手。1963（昭和 38）年に連絡坑道（桂側六片坑道-SL127.9m）と桂坑の新立坑（第二立坑）で揚炭を一本化する体制が完成し、楓坑の選炭機など坑外施設が不要となった。</p> <p>楓坑ズリ山は、楓坑選炭機があった時代にできたもので、立層採炭（欠口採炭法）切羽が大半であるため坑内で発生するズリは充填に再利用されており、比較的小規模のズリ山である。ズリ山の輸車路部分を、1981（昭和 56）年に開通した国鉄石勝線が横断することになったが、この部分はトンネルで抜けている。</p>		
参考情報			
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.76 旧北炭滝ノ上水力発電所

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市滝の上 5	
建築年等	大正 13（1924）年	
構造	レンガ造一部 2 階	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	北海道企業局	
管理者	北海道企業局	
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭により建設された自流ダム水路式の水力発電所で、1921（大正 10）年起工し、1924（大正 13）年稼働開始。夕張川の千鳥ヶ滝上流に取水堰堤を築き、縦型軸長 18m の縦型フランシス水車で発電機 1,200KW 2 台（芝浦製作所製、認可出力 2,400KW）を稼働する構造であった。水圧鉄管を省略しヘッドタンクを深くしたオープンフリーム式の発電方式は、水力発電の草創期に水力が多く落差の低い発電所で多く採用された。発電所の建築面積は 182 m²。</p> <p>おおむね建設当時の原形が保たれている。レンガ壁と白色で縁どるアーチ窓の外観が印象的で、正面の窓上には北炭の社章をかたどる星印の色ガラスが収まっている。中央に発電機が据えられた内部は床から屋根裏までの一体空間で、小屋を鉄骨トラスで組まれており、レンガ造の建物とは思えないほど広く明るい空間となっている。1994（平成 6）年に北炭から北海道企業局へ譲渡され（出力 1,170KW × 2 台）たが、老朽化が進行したため、2010（平成 22）年に運転を停止した。2013（平成 25）年から既存の発電所棟の外観を維持しつつ補強改修するとともに、取水堰や水路等も改修し、隣接地に水車発電機（出力 1,900KW）を新設して、2016（平成 28）年に運転を再開、現在も操業している。</p>	
参考情報	『夕張市史』北海道文化史源データベース	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.77 三菱大夕張炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市鹿島北栄町	
建築年等	昭和 4（1929）年以降	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道森林管理局	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1973（昭和 48）年に閉山した三菱大夕張炭鉱によって形成されたズリ山で、夕張市内に残るズリ山のうち最大級のもの。閉山時からの原形が保たれており、1998（平成 10）年度から森林管理署などが植林・緑化事業を進めている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	存在しても確認に出向くことがほぼ不可能な場所。三菱で確認容易な坑口：昭和 15 年の「三菱大夕張炭鉱の新斜坑材料坑道の坑口」も候補となる。	

No.78 三菱大夕張炭鉱若葉坑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市南部	
建築年等	明治 44（1911）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	三菱鉱業が進出する前の大夕張炭坑(株)（1907 年設立）時代の初期の坑口。1911（明治 44）年に第一斜坑として開坑し、1916（大正 5）年に三菱合資（1918 年に三菱合資から三菱鉱業が独立）に買収された後、北部(鹿島)地区開発までの間、大夕張炭鉱の中心坑口であった。1927（昭和 2）年に北部開発が進んだことから廃坑。坑口周辺には、コンクリート基礎や煙突状のレンガ建造物を多く見ることができ、旧南部小学校裏手のインクライン跡をたどると炭鉱集落の跡なども見ることができる。	
参考情報	夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	遥か山の中なので見ることは困難	

No.79 大夕張森林鉄道夕張岳線第一号橋梁

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市南部青葉町・鹿島白金	
建築年等	昭和 33（1958）年	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道森林管理局	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>大夕張ダム（1962 年完成）の水没補償工事としてダム湖（シューパロ湖）上に建設された大夕張森林鉄道の単線橋梁。橋長 381.80m。形式と径間数×支間：①～⑥三弦ワーレントラス構造・1×39.00m+5×52.08m。三弦ワーレントラス構造を採用した下路橋梁のため、正面から見ると三角形の断面となり、鉄道橋や車道橋では他にほとんど例を見ない独特な構造。供用後わずか5年後の1963（昭和38）年に森林鉄道が廃止された以降は放置されてきたが、大夕張ダムの景観の一部を構成する美しい橋として知名度が高かった。2014（平成26）年、夕張シューパロダムの湛水開始により水没。</p>	
参考情報	土木学会歴史的鋼橋集覧	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	夕張で使われていた森林鉄道の汽車は、開拓の村の中にある。	

No.80 大夕張森林鉄道夕張岳線第五号橋梁・第六号橋梁

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市鹿島白金	
建築年等	昭和 33（1958）年	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道森林管理局	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	<p>大夕張森林鉄道の単線橋梁で、上路ワーレントラス(軍用組立式)、1958(昭和 33)年に建設された。</p> <p>[第 5 号橋梁] 三角形のトラス部材（溶接構造）をピンで結合する旧陸軍の重構桁鉄道橋を使用している。現存する旧陸軍の可搬橋は当地のものが唯一と推定される。初期の全溶接橋として貴重なサンプルである。重構桁の最初は九三式(1933)で、その後九六式(1936)、九九式(1939)と改良された模様。数種類のユニットを組合わせて、最大支間 32m までの多様なスパンと荷重に対応可能であった。横河橋梁と桜田機械の 2 社が製作したことが判明している。</p> <p>[第 6 号橋梁] 旧陸軍の重構桁鉄道橋を使用している。1948（昭和 23）～1949（昭和 24）年に、大夕張森林鉄道の 4 橋に架設された。終戦後の鉄材不足の中、橋梁メーカーにストックされていたものを大夕張営林署が苦心して探し出してきたものという。現存する 5 号・6 号橋梁の 2 橋はそれらの転用である。2014（平成 26）年、夕張シューパロダムの湛水開始により水没。</p>	
参考情報	土木学会歴史的鋼橋集覧	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.81 三菱大夕張鉄道橋梁旭沢橋梁（5号鉄橋）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	夕張市鹿島明石町・鹿島千年町	
建築年等	昭和3（1928）年	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	<p>三菱鉱業大夕張鉄道が、南大夕張から大夕張炭山まで延長されたことで架設された単線橋梁。横河橋梁製作所製造。橋長 72.3m、上弦材は I ビームでその上に直接枕木が載る。トラスドガーダーということがある。鋼橋脚には溶接補強が見える。トラスと鋼トレスル橋脚（4脚）の組み合わせは希少である。</p> <p>形式と径間数×支間：①～④単線上路プラットトラス・4×14.630m、⑤～⑥上路 I 桁鋼構橋脚・2×5.943m。2014（平成 25）年、夕張シューパロダムの湛水開始により水没したが、渇水期には上路トラスが水面上に現れ、国道から展望可能となる。</p>	
参考情報	土木学会歴史的鋼橋集覧	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.82 三菱大夕張鉄道車輛

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	夕張市南部、旧南大夕張駅構内	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	自由に見学可能	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	夕張市	
管理者	三菱大夕張鉄道保存会	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>三菱鉱業大夕張鉄道の南大夕張駅（島式ホーム1面2線の地上駅、清水沢駅から7km 603m）に置かれている同鉄道の車両群で、西方から配置順に次の通り。①ラッセル車「キ1」1940（昭和15）年・三菱鉱業自社発注車、②客車「スハニ6」1913（大正2）年・3軸ボギー台車、③客車「オハ1」1906（明治39）年、④客車「ナハフ1」1931（昭和6）年・三菱鉱業自社発注車、⑤石炭車「セキ1」1911（明治44）年、⑥石炭車「セキ2」1934（昭和9）年、他に：モーターカー、軌道自転車。市民団体の三菱大夕張鉄道保存会（1999（平成11）年設立）が、雪で転倒していた車両を引き起こして補修し、その後は維持管理し一般公開している。</p>	
参考情報	夕張市史	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.83 三菱大夕張炭鉱 大夕張鉱業所の坑口群（通洞、新斜坑材料坑道ほか）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市鹿島北栄町（国道 452 号旧道分岐点の向かい側）	
建築年等	昭和 4（1929）年以降	
構造	コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>夕張における三菱の炭鉱開発は南大夕張坑に始まったが、坑の老化に伴い 1927（昭和 2）年に稼業の本拠を北部（大夕張）に移行し、大夕張鉱業所を設置するとともに「通洞坑」の開鑿を開始した。出炭と需要の増加に対応して、深部開発と併せて坑内運搬及び通気の合理化を図るため、1940（昭和 15）年より通洞の南側坑外から「新斜坑」の開削を開始した。新斜坑は、傾斜 16°、距離 2000m、10 片坑底坑道と連結して本鉱山の根幹をなした。鉱業所近傍の通洞には 2 つの坑口（本延、連延）、新斜坑には 5 つの坑口（第一卸、第二卸、人道、火薬取扱、材料）が存在した。うち、新斜坑材料坑道の坑口は、国道 452 号の西側に近接し、コンクリート造の坑口ポータル上部には三菱の陽刻が施され、三菱大夕張炭鉱を語る上で象徴的な構造物として残存している。</p>	
参考情報	<p>釘宮健二：大夕張鉱業所新斜坑セメント注入工事、土木学会誌 35-4、1950 年 4 月、北海道地下資源調査所：5 万分の 1 地質図幅説明書、1954 年 3 月、松岡辰男：大夕張排気立坑開さくについて、日本鉱業会誌、1952 年 9 月</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	<p>確認可能な遺構が数少ない大夕張炭鉱において、新斜坑材料坑口は国道に近接する遺構として貴重な存在である。国道から坑口前まで踏み跡があるが、立入については管理者への確認が必要。一定の認知度を勘案すると、自由見学を前提とした通路確保などの対応が望まれる。</p>	

(4) 岩見沢市

1882（明治 15）年 11 月 13 日、官営幌内鉄道の幌内～手宮間が全線開通したことから 1884～1885（明治 17～18）年に開拓が始まりました。1891（明治 24）年に岩見沢～歌志内間、翌年に岩見沢～輪西（室蘭）間の鉄道が開通したことで陸上交通の要衝となります。1905（明治 38）年に時の栗澤村（現在の岩見沢市栗沢町）に万字炭鉱が開鉱したことで、その積出のために 1914（大正 3）年に万字線が全線開業、その沿線に 1918（大正 7）年に美流渡炭鉱が開鉱、1919（大正 8）年に朝日炭鉱の本格操業に伴って朝日駅が開駅するなど、周辺地域の炭鉱・鉄道と共に発展していきます。

1926（大正 15）年に完成した操車場も、当初平均 1,617 両／日だった操車能力が 1953（昭和 28）年～1957（昭和 32）年の改良工事で 1,800 両／日に、1959（昭和 34）年～1962（昭和 37）年の志文～岩見沢間増線など第 2 期改良工事で 2,500 両／日に増強されるなど貨物や石炭の輸送の増加と共に増えていきますが、石炭産業の衰退と共に鉄道のまちとして変化の時を迎えます。

岩見沢市では炭鉱・鉄道の歴史を地域の「たから」として捉え、市民有志によって岩見沢駅で鉄道 EXPO が行われるなど新たな観光振興につなげる取り組みも行われました。美流渡や万字といった元炭鉱まちはのどかな雰囲気が移住先として注目され、朝日駅も活用への動きが活発です。これまで培われてきた、充実した交通網と都市機能を活かして、空知の中心都市として、地域の新たな歴史を創っていくことが期待されています。

No.84 旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場（岩見沢レールセンター）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市有明町中央	
建築年等	明治 32（1899）年	
構造	木骨レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道旅客鉄道（株）	
管理者		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>開拓使によって建設された幌内鉄道は、1882（明治 15）年に手宮～幌内間が全通し、1889(明治 22)年に道庁理事官であった旧薩摩藩士・堀基が設立した北海道炭鉱鉄道会社に払い下げられた。その鉄道財産の中に、手宮駅（小樽市）に隣接した手宮工場があり、ここでは主として機関車・車両の組み立て・修繕のほか、1891（明治 24）年からは炭鉱機械の製作・修繕も行うようになった。1891（明治 24）年に空知線（岩見沢～歌志内間）、翌 1902 年に室蘭線（岩見沢～室蘭間）が開通し、新たに岩見沢が鉄道の要衝となったことや、事業拡張により手宮工場が手狭になったことから、1899(明治 32)年に岩見沢に手宮の分工場として岩見沢製作所を設置し、手宮工場は手宮製作所となった。開設後の岩見沢製作所は、鍛冶場・機械場・仕立場・旋盤場などを漸次増築し、車両の組み立てや機械の製作修理にあたったが、当該建物は岩見沢製作所の開設時に建設されたものと考えられる。1903（明治 36）年には岩見沢が本工場（手宮は分工場）となり、1904 年には北炭本社の岩見沢移転でさらに拡張された。しかし、鉄道国有化後は、1906（明治 39）年に旭川工場の分工場となり、1908（明治 41）年には岩見沢工場として再度独立したが、1915（大正 4）年に苗穂工場岩見沢派出所となった後に廃止された。1945（昭和 20）年に、レールセンターの前身である岩見沢材修場が開設され、現在も北海道旅客鉄道(株)が使用している。建物壁面には北炭の社章（コバルト色の円の中に赤い星）が残っている。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』『北海道鉄道百年史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.85 上志文駅舎

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市上志文町	
建築年等	昭和 30（1955）年	
構造	木造モルタル造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1914（大正 3）年の万字線開通に伴い開駅。1955（昭和 30）年に現存する駅舎が建築された。1966（昭和 41）年に地元有志で設立された(株)ニュージャパンにより岩見沢萩の山市民スキー場が開業し、「日本で最も駅に近いスキー場」を売りにしたこともあって、地元学校のスキー授業参加者や札幌から直通運行された臨時スキー列車「上志文銀嶺号」「上志文スキー号」利用者によって、冬季は一定の賑わいを見せた。1970（昭和 45）年無人駅、1985（昭和 60）年万字線廃止に伴い廃駅。</p>	
参考情報	『鉄道とともに－国鉄万字線史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.86 岩見沢操車場跡

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市大和町 1 条 1 丁目～1 条 8 丁目、同 2 条 2 丁目・3 条 3 丁目・4 条 4 丁目・4 条 7 丁目	
建築年等	大正 11（1922）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>岩見沢操車場は、1922（大正 11）年に建設が始まった。1926（大正 15）年には、①岩見沢駅北側（函館本線下り仕訳線群） ②操車場中央の着発線群 ③同東側の操東ヤード（室蘭本線仕訳線群） ④同西側の操西ヤード（函館本線上り仕訳線群） ⑤同南側の操南ヤード着発線の 5 線群からなる操車場が完成し、平均 1,617 両/日（現車）を操車するに至った。</p> <p>1953（昭和 28）年～1957（昭和 32）年にかけて、駅北部にあたった函館本線下り仕訳線群を、操車場着発線の北側に移設し操北ヤードとする岩見沢駅改良工事が行われ、操車能力は 1,800 両/日に増強した。さらに、単線の室蘭本線志文～岩見沢間の線路容量不足と、室蘭本線の着発線群と操車線群が 2 方面に分かれているための混雑が顕著なため、1959（昭和 34）年～1962（昭和 37）年に志文～岩見沢間増線、操西ヤード増線を内容とする第 2 期改良工事が行われ、操車能力は 2,500 両/日に増強した。</p> <p>これら戦後 2 つの改良工事にあたっては、函館本線・室蘭本線の着発が平面で支障しないよう完全抱き込み式操車場とすべく計画されていたが、工事が進捗するにつれ貨物輸送量、特に石炭輸送が減少したため計画は未遂に終わった。1968（昭和 43）年の函館本線小樽～滝川間電化開業に合わせて、電気機関車基地が岩見沢に置かれることとなり、操西ヤード西側に岩見沢第二機関区が建設され、1968 年に一部供用を開始、1969（昭和 44）年に完成した。函館本線（小樽～旭川）・千歳線（苗穂～沼ノ端）・室蘭本線（岩見沢～室蘭）の 3 区間の電化完成後は 120 両程度の電気機関車配置が可能な配線計画とし、函館本線電化開業時点で 50 両対</p>	

	<p>応の設備が整備された。</p> <p>その後、石炭貨物輸送と電気機関車牽引列車の廃止により、岩見沢操車場（約30ha）は1980（昭和55）年に、岩見沢第二機関区を前身とする空知運転所が1994（平成6）年に廃止された。</p>
参考情報	『札幌工務局70年史』
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	

No.87 朝日炭鉱住宅群

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市朝日町	
建築年等	昭和 5（1930）～昭和 20（1940）年代	
構造	木造モルタル造	
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>朝日炭鉱の住宅は、1930 年代の幌向炭鉱時代に 80 戸が、1940 年代前半の日本硝子時代に 280 戸が建設された。1951（昭和 26）年の朝日大火で 86 戸を焼失した。1957（昭和 32）年に全戸の葺草屋根をトタン葺屋根に改修し、1970（昭和 45）～1971（昭和 46）年度に大幅な住宅改修を行い内便所方式に改修した。閉山時の炭住数は 293 戸（うち 20 戸岩見沢市営住宅）であった。</p>	
参考情報	「朝日炭鉱の概要」「炭砒案内」（朝日炭砒株）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.88 朝日駅舎

分類	構成文化財	写真	
炭/鉄/港区分	鉄道	 	
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	岩見沢市朝日町 176		
建築年等	大正 8（1919）年		
構造	木造		
現存状況	有		
見学可否	可（建物内は要事前連絡）		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	岩見沢市		
管理者	岩見沢市		
文化財登録/指定			
解説文	<p>地元住民の請願によって 1919（大正 8）年に開駅。1940（昭和 15）年に朝日炭鉱の鉱業権を日本硝子(株)が取得し本格開発を行うとともに、石炭積出駅としての性格を強めてゆく。1954（昭和 29）年に朝日炭鉱の経営権が製鉄原料輸送(株)に移り労使協調路線で再建に踏み出したことで出炭量が増加傾向となる。1955（昭和 30）年には選炭機増設工事が行われ、ホッパーも木造から鉄骨造になるなど出炭増加に備えた設備投資が行われたことに対応して、1956（昭和 31）年に駅舎を改修した。1974（昭和 49）年に朝日炭鉱が閉山し、1978（昭和 53）年に無人駅化、1985（昭和 60）年万字線廃止に伴い廃駅となった。1999（平成 11）年、駅舎周辺が万字線鉄道公園として整備され B20 形蒸気機関車が東山公園から移設された。</p>		
参考情報	『鉄路とともに－国鉄万字線史』		
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.89 北星炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	岩見沢市奈良町	
建築年等	昭和 21（1946）年以降	
構造		
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北星炭鉱は、1965（昭和 40）年に東幌内炭鉱と美流渡炭鉱が合併してできた炭鉱で、1969（昭和 44）年に閉山した。美流渡市街地北側、幌向川右岸の奈良町にあるズリ山は、北星炭鉱の前身である東幌内炭鉱のものであり、北星炭鉱となった後は旧美流渡炭鉱の選炭機を廃したため旧美流渡側の石炭から出たズリも積載された。ズリは選炭機横のズリポケットから 4t スキップによって運搬され、現在でもその輸車路の傾斜が明瞭に見て取れる。ズリポケットの標高 SL100m、ズリ山頂部標高は SL180m、その比高は 80m で、ズリ山の形状は比較的良く保たれたまま緑化が進行している。</p>	
参考情報	『北海道炭鉱史料総覧』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.90 北星炭鉱住宅群

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市栗沢町美流渡吉野町、栗沢町美流渡東栄町、奈良町	
建築年等		
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北星炭鉱の社宅群で、1965（昭和 40）年に合併するまで東幌内炭鉱の炭住であった。職員住宅は美流渡市街南側にある段丘上の吉野町に、鉱員住宅は美流渡市街地西側の幌向川兩岸の東栄町・奈良町にある。1962（昭和 37）年/2015（平成 27）の空中写真を比較すると、吉野町（職員）=45 棟/17 棟、東栄町（鉱員）=35 棟/19 棟、奈良町（鉱員）=125 棟/19 棟の炭鉱住宅が写真上から確認できる。</p> <p>近年は冬季の積雪で倒壊する空戸住宅が多くなっているが、木造炭住街の雰囲気を残す数少ない区画であり、同様に木造炭住が残る美唄市の南美唄地区（三井美唄炭鉱）・東明地区（三井美唄炭鉱・三菱美唄炭鉱）との比較で、区画・住棟配置などの大手・中小の違いを認識することができる。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.91 万字炭鉱選炭場跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	岩見沢市栗沢町万字西原町 3	
建築年等		
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	自由に見学可能（公園内）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>万字炭鉱は、1903(明治 36)年に朝吹英二から鉱区を譲り受け、同家の家紋である卍にちなんで万字鉱と命名された。1909(明治 42)年に夕張第一砦の派出所として出炭を開始し索道で夕張へ搬出された。1914（大正 3）年に万字線が開通し本格出炭体制が整ったことから万字炭鉱として独立し幌内鉱業所に編入された。鉄道開通に合わせてホッパーなど選炭搬出施設が整備されたと思われる。</p> <p>その後、1960(昭和 35)年に北炭から分離され万字炭鉱(株)となった。当初は水平坑道の水準上にあった切羽が次第に深部移行し、1975（昭和 50）年に入ると坑内湧水が増加し、湧水→採炭中止→揚水を繰り返していたが、同年 8 月の台風 6 号により主要ポンプが全て水没。再建計画を検討したが再開に至らず、1976(昭和 51)年 3 月に閉山した。現在は、ホッパーの基礎の一部と、万字炭山駅とホッパーとの間にある幌向川にあった鉄道橋梁の橋台の痕跡がわずかに残っている。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』	
アピールポイント	万字炭山森林公園として整備され、自然を感じられる憩いの場となっている。	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.92 万字炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	岩見沢市栗沢町万字西原町 3	
建築年等	昭和 50（1975）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	一般公開（万字炭山森林公園内）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	北海道	
管理者	岩見沢市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1954（昭和 29）年に従来からあった坑務所前ズリ山を廃して設置され、1971（昭和 51）年の閉山まで稼働していた。鉄道駅や炭鉱住宅街から見通せる幌向川・ポロボロムイ川の分岐東側にあったことから、炭鉱のランドマークとして目立つ存在であった。1998（平成 10）年に、道有林整備の一環として、比高 180m（選炭機標高 SL200m、頂上標高 SL380m）のズリ山を中心にした 21ha を万字炭山森林公園として整備。エゾヤマツツジ、エゾヤマハギ、カシワなどを植樹し、直線部 775 段を含む総段数 2,468 段の登山用階段を設置した。</p>	
参考情報		
アピールポイント	万字炭山森林公園として整備され、自然を感じられる憩いの場となっている。	
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.93 北炭送電線鉄塔

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	夕張市清水沢清栄町～岩見沢市万字二見町～岩見沢市毛陽町～三笠市幌内本沢町	
建築年等	昭和4（1929）年以降	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>北海道炭鉱汽船では、明治末期から各炭鉱に小規模発電所が設置され、動力の主体は蒸気・圧搾空気から次第に電気へと移行した。1908（明治42）年には、早くも夕張～万字間（5 km・3,300V）の送電を開始している。</p> <p>大正時代に入ると、採炭現場の深部化による新立坑の開発とともに電化が一気に加速。炭鉱の動力近代化の要請に対応して、大型発電所（1924年・滝ノ上水力発電所、1926年・清水沢火力発電所）が建設され、高圧送電線も1919（大正8）年に夕張～幌内間（20 km・22,000V）、1924（大正13）年には幌内～空知間（47 km・22,000V）と延伸を続け、大正時代に100 kmを超す自家用送電線網を完成させた。</p> <p>なかでも夕張炭鉱～幌内炭鉱間の高圧送電線（延長20 km）は、いち早く1919（大正8）年に開通。当初22,000V・1系統であったが、1929（昭和4）年には送電線路を木柱から鉄塔に改良した上で44,000Vに昇圧するとともに2系統化、1940（昭和15）年にはさらに2系統を増設、1950（昭和25）年には66,000Vに昇圧し3系統化（1940年建設2系統を昇圧、1929年建設44,000V送電線路2系統を66,000V1系統に改造）、北炭の長距離送電線網の中でも基幹的な地位を占めていた。</p> <p>この送電線は、1989（平成元）年の幌内炭閉山まで稼働していたことから、今でも沿線には炭鉱電力の遺構が残っている。なかでも道道38号と随所で交差していたため、かつての鉄塔を手がかりに炭鉱の操業を支えてきたエネルギーの道をたどることができる。</p>	

参考情報	『北炭 70 年史技術史稿本－機電編・電力編』『北炭 70 年史』
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	

No.94 万字変電所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市栗沢町万字錦町	
建築年等	大正 8（1919）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1909(明治 42)年の万字炭鉱出炭開始時から、夕張から万字へは 3,300V の送電線路により送電が行われていたが、1919（大正 8）年に夕張～幌内間の 22,000V 送電線路を敷設した際に、万字炭鉱への電力供給増強のため万字変電所が新設された。道道 38 号を挟んで山側にある万字開閉所も、万字変電所と同時に建設されたものと思われる。</p> <p>当初の能力は、一次電圧 22,000V・二次電圧 3,300V・容量 500KVA 変圧器 3 台、一次電圧 3,300V・二次電圧 550V・容量 100KVA 変圧器 2 台であった。その後、1929（昭和 4）年には 44,000V に昇圧したため、万字変電所も変圧能力を一次電圧 44,000～40,000V・二次電圧 3,450V・容量 1,000KVA 4 台（芝浦製作所製）に増強した。1975（昭和 50）年 8 月、台風 6 号による豪雨の中、万字変電所～主要扇風機間の送電が 35 時間にわたり停電。これにより坑内温度・湿度が上昇して、坑内揚水ポンプに絶縁不良が続出し、地表水流入もあって主要ポンプが全て水没し、閉山の原因となった。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史技術史稿本－機電編・電力編』『北海道炭鉱汽船株式会社職員組合の運動と組織力』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.95 旧英橋

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市栗沢町万字英町	
建築年等	昭和 12（1937）年	
構造	鉄筋コンクリート造（橋脚）、鉄骨造（主桁）	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>道道 38 号ボンネベツ川の橋梁で、1921（大正 10）年に初代の吊り橋（一説では延長 73m）が架橋された後、1937（昭和 12）年に二代目となる本橋が竣工した。橋長約 80m、道幅約 5m。プレートガーダー橋で、鉄筋コンクリート製の高いトレスル橋脚が特徴である。中央部の橋灯の土台には装飾も施され、万字地区自慢の橋だったという。主桁の厚さが桁ごとに異なっているが、この主桁は万字炭鉱の工作課で製作された。</p> <p>1969（昭和 44）年に現在の三代目英橋が竣工したため廃橋となったが、構造はそのまま残されており融雪期や晩秋には橋全体の形状をよく確認することができる。</p>	
参考情報	『閉山記念誌万字』『日本最古のアメリカ製鉄橋』関係者聞き取り	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.96 旧巴橋

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市万字巴町・万字睦町	
建築年等	昭和 24（1949）年以前	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>道道 38 号の万字睦町・万字巴町の境界にある左股の沢に架橋された鉄骨製の上路アーチ橋。1969（昭和 44）年に現在の巴橋が完成するまで使われていた。建設に関する詳細情報は存在しないが、松井岩吉所有の農地 1 町歩と道有林野 3 町 3 反を買収し 1949（昭和 24）年に巴地区炭住 64 戸が建設された直後に撮影された写真には橋梁が写っていること、デザイン性に優れていることから、二代目英橋とほぼ同時期頃に建設されたものと考えられる。</p>	
参考情報	「幌内鉱業所年表」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.97 万字駅舎

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	鉄道	 	
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	岩見沢市栗沢町万字仲町		
建築年等	昭和 54（1979）年		
構造	鉄骨コンクリートパネル造		
現存状況	有		
見学可否	可		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	岩見沢市		
管理者	岩見沢市		
文化財登録/指定			
解説文	<p>万字駅は、1914（大正 3）年の万字線開通に伴い開駅した。当初から万字駅より 1.5 km 上流部にある選炭機まで貨物専用線は延びていたが、1924（大正 13）年の万字炭山駅までは、万字駅が旅客・荷物営業上の終点であったため、駅前に市街地が形成された。転車台は、万字炭山駅に設置する空間を確保できなかったため万字駅に置かれ、ディーゼル化されるまで運転上の一定の役割を果たしてきた。線形上の勾配や運転取扱上の操車空間を確保する必要から幌向川右岸段丘上に駅構内が配置され、駅舎を設置する場所が同一面に確保できなかったものと思われる、6 m 上位面に建設された駅本屋とホームとは鉄骨（古レール使用）木造で覆われた階段で結ばれていた。</p> <p>1978（昭和 53）年に無人化し、1979（昭和 54）年に駅舎を新築、1985（昭和 60）年万字線廃止に伴い廃駅となった。廃駅後は、一時、廃止転換バスの待合所となっていたが、駅前広場の角地にあった万字仲町簡易郵便局が移転し現在も営業中である。</p>		
参考情報	『鉄路とともに－国鉄万字線史』		
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.98 一の沢水源地

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	明治 41（1908）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>道内の公営近代水道では函館に次ぐ 2 番目に敷設され、取水塔を有する方式では道内最初である。主取水塔は、岩見沢市指定の有形文化財となっている。北炭技師の古賀淳太郎が設計した。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.99 炭鉱の記憶マネジメントセンター石蔵

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	岩見沢市1条西4丁目3	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	市民団体が運営する「炭鉱の記憶」のセンター施設。地域情報のインフォメーションセンターでもあり、カフェコーナーやグッズ販売コーナーもある。1909（明治42）年建築の石蔵も併設。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(5) 美唄市

開拓使の鉱山担当になった榎本武揚は、「石炭山取調」を1873（明治6）年に提出、これをきっかけに開拓使は幌内炭山の開発に動きだしました。翌1874年、アメリカの地質学者ライマンがビバイ煤田を調査し「日本蝦夷地質要略之図」（1876年）で紹介したことにより、明治20年代以降、ビバイ煤田鉱区の探索が始まりました。1889（明治22）年、徳田與三郎が美唄川上流などの炭層を調査しました。明治後期から東美唄地区や南美唄地区などで小規模の開鉱が行われ、大正・昭和にかけては三菱や三井といった大手財閥による大規模採掘が始まりました。

石炭産業の発展とともに人口も増加し、1925（大正14）年に町制施行により沼貝町（翌年美唄町）となり、1950（昭和25）年には道内15番目の市となりました。炭鉱では石炭を大量輸送するために三菱美唄鉄道、三菱茶志内鉄道、三井では国鉄南美唄支線が敷設されました。しかし、1960年代の石炭産業の「斜陽化」によって1963（昭和38）年に三井美唄炭鉱が閉山、1972（昭和47）年に三菱美唄炭鉱が閉山し、美唄鉄道も廃線となりました。翌1973年に北菱我路炭鉱が閉山し、美唄市内の全炭鉱の抗回を閉ざすことになりました。

閉山後、1990（平成2）年、三菱美唄炭鉱堅櫓（上風口と下風口）が市に寄贈され、炭鉱メモリアル森林公園でその威容を示しています。また、東美唄地区の旧栄小学校周辺の敷地に、美唄出身の彫刻家・安田の作品を展示する芸術文化交流施設「アルテピアッツァ美唄」（平成28年に「安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄」に改名）が1992（平成4）年にオープンし、観光資源としても注目されています。

No.100 人民裁判の絵

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	美唄市西 2 条南 1 丁目 2-1（郷土資料館）	
建築年等	昭和 25（1950）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有（炭鉄港記載なし）	
刊行物掲載	有	
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>人民裁判は、1946(昭和 21)年 2 月、賃上げなど労働条件の向上を求める三菱美唄炭鉱労働組合員らが、市内宮ノ下会館などで合計 36 時間に渡り追求した「大衆団交」であった。絵は、同炭鉱美術サークルの鉱員 5 人が「裁判」から 3 年後に完成させた。国内最初の戦後の労働運動の象徴的な事件として知られるが、争議解決から 2 週間後、会社側が告訴し、刑事事件に発展し、労組側の幹部らが不法監禁などで逮捕され、有罪判決を受ける者も出るなどの結果に終わった。</p>	
参考情報	『そらち炭鉱遺産散歩』共同文化社、2003	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.101 美唄市郷土史料館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	美唄市西2条南1丁目2-1	
建築年等	昭和56(1981)年	
構造	RC造2階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	美唄の開拓の歴史や美唄の炭鉱の歴史、様子などを展示した史料館。三菱美唄炭鉱関係資料・三井美唄炭鉱関係資料・美唄鉄道関係資料の総合的な展示室であり、坑道と採炭現場の再現コーナー等を見学することができる。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.102 三菱美唄炭鉱立坑櫓

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東美唄町一ノ沢	
建築年等	大正 12（1923）年	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>道内で2番目に古いリベット打ちの中型立坑で、九州地区では多く見られる櫓。この地区の炭鉱開発は、美唄川上流の我路地区から一ノ沢、滝ノ沢に徐々に拡大し、立坑は第一次世界大戦後の不況時、生産費低減や能率向上を目指した合理化策の中心的事業として建設された。道道美唄富良野線を美唄ダム方面へ進むと右側2基見える。櫓の高さは20m、約170mの地下まで人や石炭などを運搬していた。鮮やかな紅色が美しい立坑で、この色は立坑が建てられた当初の色と言われている。</p> <p>美唄ダム側の立坑は上風坑と呼ばれ、主に坑内からの排気や人員搬入などに使われた。また、市街地側の立坑は下風坑と呼ばれ、坑内への入気や石炭・資材・ズリの搬出に使用された。1918（大正7）年には57万トンの出炭を記録し、夕張炭鉱に次ぐ石狩炭田第二の炭鉱に成長した。また、1944（昭和19）年には戦前最高の189万トンを記録したが、エネルギー革命の影響で1972（昭和47）年4月に閉山した。閉山後は、立坑を中心とした炭鉱メモリアル森林公園として利用されている。</p>	
参考情報	『そらち炭鉱遺産散歩』共同文化社、2003	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.103 三菱美唄炭鉱開閉所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東美唄町一ノ沢	
建築年等	大正 14（1925）年	
構造	R C 造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有（炭鉄港記載なし）	
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	三菱美唄炭鉱立坑巻揚櫓に隣接し、現在は炭鉱メモリアル森林公園の主要施設として整備されている。当時、この施設では地区内の炭鉱関連施設や設備機械類の主要電源が総合的に管理されていた。室内には、開閉器と呼ばれる機械が 10 台ほど置かれて、立坑櫓など 10 カ所に送電していた。楕形アーチの屋根の形状が見える妻側上部の多数の丸穴は、電線が繋がっていた痕跡。現在は、公園として整備され、建物の 1 階はガラス貼りのレストスペースとして地域住民に一般開放されている。	
参考情報	そらち炭鉱遺産散歩、炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.104 三菱美唄炭鉱原炭ポケット

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東美唄町一ノ沢	
建築年等	大正 14（1925）年	
構造	R C 造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>三菱美唄炭鉱立坑巻揚櫓に隣接し、現在は炭鉱メモリアル森林公園の主要施設として整備されている。原炭ポケットとは、坑内で採掘された石炭が、坑外に運搬され選炭されるまで貯蔵される施設。鉄筋コンクリートで造られた柱・梁などによって構成されたグリット（格子）が印象的で、建築意匠の美しく専門家からも評価されている。</p> <p>現在、道内で現存する原炭ポケットの中で最大規模のもので、貯蔵容量は約 1300 トンだが、下部の原炭排口は塞がれている。原炭ポケット上部を覆っていた建屋は、1972（昭和 47）年の閉山後撤去された。</p>	
参考情報	そらち炭鉱遺産散歩、炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.105 沼東中学校屋内体育館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東美唄町	
建築年等	昭和 42（1967）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ可能（冬期間は中も可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>沼東中学校は、三菱美唄炭鉱が閉山した翌年の 1973(昭和 48)年 3 月に廃校になった。現在、中学校の体育館は国設スキー場のレストハウスとして活用されている。この国設スキー場は、1920(大正 9)年に我が国で最初に夜間照明設備が付けられた「番町が丘スキー場」の跡。当時、沼東中学校のグラウンドがあった場所には、現在のファミリー公園がある。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.106 沼東小学校

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東美唄町	
建築年等	昭和 34（1959）年	
構造	R C造 3 階建	
現存状況	有	
見学可否	立入禁止（危険）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	鉄筋コンクリート造 3 階建ての円形校舎で、中央に螺旋階段があり、最上階にはトップライトがあり、デザインは秀逸と言われている。当初は同形で 58 年から 59 年にかけて 2 棟建設され、渡り廊下で結ばれていたため、めがね校舎とも呼ばれた。そのころ児童数もピークを迎え、29 学級、1570 人が在籍していた。1974(昭和 49)年 3 月に廃校しており、内部 1 階は床が落ち水没しており、廃墟化している。	
参考情報	そらち炭鉱遺産散歩、炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.107 三菱美唄記念館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	美唄市東美唄町	
建築年等	昭和 52 (1977) 年	
構造	鉄骨造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	三菱美唄炭鉱閉山後の 1977(昭和 52)年に記念館として、現在の三菱マテリアルが建設し、市に寄贈した。当時の炭鉱の歴史や坑内作業の用具、写真、文献など、三菱美唄炭鉱はもとより炭鉱の歴史や坑内作業の実状を知ることができる貴重な資料が保存されている。館内には、1925(大正 14)年の「三菱美唄礦業地及び我路市街之図」、「社宅台帳」、炭鉱最盛時の三菱美唄地区の地形模型など、かつての住民や街の様子を伝えるものばかりでなく、今後の炭住関連研究にとって貴重な文献資料が残されている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.108 我路郵便局（旧美唄炭山郵便局）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市我路町三条	
建築年等	昭和 31（1956）年	
構造	R C造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	鉄筋コンクリート構造 2 階建てで、窓下腰壁に煉瓦を使用。東美唄出張所と我路生活館と共に我路簡易郵便局として使用していたが、平成 26 年 8 月 31 日に閉鎖。現状は、閉鎖して間もないため、当時の状態を残している。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.109 元衆議院副議長岡田春夫の生家

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美幌市我路町一条	
建築年等	大正2（1913）年	
構造	木造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	元衆議院副議長であった岡田春夫氏の生家。造りはしっかりしていて保存状態も良く、我路地区のかつての賑わいの様子を現在に伝えている。ナラやスギ、カツラを使った柱や天井、応接間のシャンデリア、手の込んだ内壁の彫刻など、当時としてはかなりハイカラな造りの建物だった。建築面積 80 m ² 、和洋合わせて 5 室で構成。	
参考情報	http://www.sorachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/guidebibai2-1.pdf	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.110 炭鉱住宅（落合地区）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市落合町	
建築年等	昭和 26（1951）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	1963(昭和 38)年閉山の三井鉱山（新美唄鉱、第二坑時代）が所有していた鉱員の住宅。現在は、個人所有となっている。	
参考情報	「美唄で石炭が採掘されるまでの背景」佐藤甚之助、2011.12.5	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.111 旧栄小学校（安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市落合町栄町	
建築年等	昭和 25（1950）年	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	一般開放（火曜日閉館）	
現地看板	有（炭鉄港記載なし）	
刊行物掲載	有	
所有者	美唄市	
管理者	認定 NPO 法人アルテピアッツァびばい	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1981(昭和 56)年に廃校となった、主に炭鉱従業員の子弟が通学した小学校（栄小学校）校舎の一部の 1 階を市立幼稚園、2 階を市民ギャラリーとし、体育館と合わせて芸術文化交流施設として活用。世界的彫刻家の安田侃氏がデザインした彫刻作品が多数展示されている。イタリア語で芸術広場を意味する交流広場は、約 6 万㎡の広さがあり、木立が縁取る芝生広場には、赤い屋根が緑に映える旧屋内体育館や幼稚園舎（1 階部分）になった木造校舎がたたずみ、かつて、三菱美唄炭鉱の炭住街として栄えた地域の学舎の面影を留めている。</p> <p>1959(昭和 34)年には、30 学級、1,250 名もの児童が通った。校舎周辺の広場などには、イタリアから直輸入の大理石で創られた彫刻作品が配置され、校舎内部は美唄の子ども達や市内外の芸術家の作品展など幅広く活用されている。また、体育館にオブジェが置かれるなど、芸術文化の拠点として多くの人達に親しまれている。木造校舎の 2 階から見る緑の芝生と白い彫刻の取り合わせ、旧体育館との配置も絶妙。2007(平成 19)年にカフェと体験工房がオープンした。この取組は、廃校を保存活用し地域内外の住民が集う拠点として再生させたモデル地区としても注目されている。</p>	
参考情報	そらち炭鉱遺産散歩、炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.112 落合会館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市落合町	
建築年等	昭和 34（1959）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	<p>この建物は、地区の集会や映画観覧に使われ、収容規模は約 800 人あった。外観のデザインと色彩計画がとてもユニークな建物。内部は天井などの老朽化がかなり進んでいるものの、外観は当時のまま残っている。券売場、トイレなども当時のまま残っている。内部はかつてスクリーンがあったと思われるプロセニウム（額縁舞台）上部に三菱のマークが残っている。この映画館は完成と同時に、三菱美唄炭鉱滝ノ沢坑の廃止に伴う地区住民の転居により、短い期間で閉鎖された。現在は、民間企業が倉庫として使用している。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.113 美唄鉄道東明駅舎・4110形式十輪連結タンク機関車2号

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市東明五条2丁目	
建築年等	大正8（1919）年、昭和23（1948）年、	
構造	木造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ可能（内部は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>この地域は、第二次世界大戦以前は東明（しのめ）と呼ばれる畑作中心の農村地域だったが、戦後の炭鉱全盛期に三井・三菱両炭鉱の住宅街に変わり、1948(昭和23)年1月に東明（とうめい）駅（駅舎は三井鉱山から美唄鉄道に寄贈）が開業した。それを契機に地域一帯が「とうめい」と呼ばれるようになった。美唄鉄道の廃止により、常盤台・美唄炭山・我路・盤の沢の駅は撤去されたが、唯一残った東明駅舎が1972(昭和47)年6月16日に美唄鉄道関係資料と一緒に三菱鉱業（株）から市へ寄贈された。三菱美唄炭鉱の運炭鉄道である美唄鉄道（美鉄）の駅舎で、付近には美鉄使用の特注機関車4110形式SL1両、プラットフォームが残っている。線路跡は、現在、我路地区までのサイクリングロードになっている。駅舎は、外観保存・展示が行われている。この機関車は美唄鉄道が三菱造船(株)神戸造船所に特別注文して製造された十輪連結という急勾配用の機関車（国鉄の4110形と同形式）。急勾配と曲線に強く、降雪にも支障がないように設計されていた。製造費は、当時（1919（大正8）年）の価格で221,609円だった。原形は1922(大正元)年に国鉄がドイツから購入した4100型で、1972(昭和47)年5月の廃車まで半世紀にわたって活躍した。現在、国内に残されている蒸気機関車の中でも、この機関車の同型ものは、他に江別市に残されているだけである。</p>	
参考情報	炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.114 美唄鉄道線路跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	美唄市東明～我路間	
建築年等	大正3（1914）年以降	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可（冬期間除く）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	美唄市	
管理者	美唄市	
文化財登録/指定		
解説文	1914(大正3)年に美唄軽便鉄道として開業され、翌1915(大正4)年に美唄鉄道となった鉄道跡。当時は、美唄～常盤台間10.56kmを三菱美唄炭鉱から採掘した石炭を運搬する鉄道として活用された。終点駅の常磐台と我路間にある東美唄川や我路の沢川には、1907(明治40)年建設の米国製(アメリカン・ブリッジス社)の橋桁が残っている。現在、この鉄道跡の一部はサイクリングロードとして使用されている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.115 三井美唄炭鉱第2坑選炭場

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市盤の沢町本町	
建築年等	昭和 25（1950）年頃	
構造	RC 造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	道道美唄富良野線沿い、盤の沢（滝ノ沢）地区の山側（美唄ダムに向かって左側）に三井新美唄炭の選炭工場跡が残っている。じょうご型の三井型原炭ポケットで、これと同様のものが芦別市西芦別にも残っている。付近には、沈殿池や選炭機の土台も一部現存しており、引込線、貨車積込機などは撤去されているが、往時の産炭システムの一旦を伝えている。規模は大きくないが、造形的、景観的にも優れており、三井美唄炭鉱の当時の様子を伝える数少ない貴重な施設。	
参考情報	炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.116 三井美唄炭鉱第二坑原炭ポケット

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	昭和 26（1951）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井新美唄炭鉱は、1910（明治 43）年開鉱の徳田炭鉱を起源とし、1941（昭和 16）年に炭量枯渇したが、坑口・選炭施設の立地条件の良さから南部（奥部）に隣接する三井美唄炭鉱との一体開発に期待して三井鉱山が取得した。1951（昭和 26）年、三井美唄炭鉱での日本石油との採炭組合契約が満期解約された際に鉱業所体制が再編され、三井美唄炭鉱第二坑となった。現在残っている漏斗状の三井型原炭ポケットは、この再編時に設置されたものと思われ、造形的に優れ第二坑の様子を伝える数少ない貴重な施設である。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.117 三井美唄鉱業所事務所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町南町	
建築年等	昭和6（1931）年	
構造		
現存状況	有（事務所として使用）	
見学可否	外観のみ可能（内部は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>三井美唄炭鉱は、1928(昭和3)年に誕生したが、三井鉱山（株）美唄鉱業所の事務所は、その3年後に建設された。現在は民間企業の事務所として使用されている。建物については一部解体されているが、外観・内部は当時の面影を残している。設計資料や美唄鉱業所に関する資料は札幌支店が回収し、その後、三井文庫が保管しているようである。「一坑職員住宅平面図集」などの貴重な資料が残されている。また、付属屋としてコンクリートブロック造の書庫(1936年)も現存している。三井の炭鉱事務所建築の典型例とも言えるもので、かなり改造されている点が惜まれる。</p>	
参考情報	そらち炭鉱遺産散歩、炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.118 三井美唄炭鉱選炭場の跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	美唄市南美唄町	
建築年等		
構造	RC造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	三井美唄炭鉱の閉山は1963(昭和38)年と早く、その後一部を引き継いだ三美鉱業も小規模だったため、関連施設は早くに解体された。三井美唄炭鉱の中心的施設だった選炭工場は、道央自動車道の美唄ICに近いトンネルの出口付近の山側に一部分が残っている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.119 三井鉱山（株）美唄鉱業所の碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	美唄市南美唄町	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井鉱山（株）美唄鉱業所は、1928(昭和 3)年 8 月 1 日、日本石油から炭鉱の経営を引き継ぎ、操業を開始したが、1963(昭和 38)年 7 月 27 日に閉山となり、その後、この碑が建てられた。この碑を境に会社用地(最短区域)と一般市街地とに分かれ、当時は門衛が人の出入りをチェックしていた。1963(昭和 38)年の三井美唄炭鉱の閉山後も、子会社三美炭鉱が 1973(昭和 48)年 3 月まで操業していた。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.120 山神社の碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	美唄市南美唄町大通り 1 丁目	
建築年等	大正 8（1919）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間	
管理者	民間	
文化財登録/指定		
解説文	三井美唄炭鉱厚生館（労働会館）敷地の傍りに設置されている、三井美唄炭鉱の守護神。三井美唄炭鉱の前身である「錦旗炭鉱」のヤマの神を祭ったもの。錦旗炭鉱は 1917(大正 6)年小樽市に住む福永吉蔵氏が始めたと伝えられている。川石を利用したものと思われ、高さ 2m、幅 80cm ほどで、台石には炭鉱に関係のある人々の名前が刻まれていて、風雪を感じさせる碑である。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.121 三井美唄炭鉱の祭神祠

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	美唄市南美唄町大通り1丁目	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	氏子一同	
管理者	氏子一同	
文化財登録/指定		
解説文	山をつかさどる神の「大山祇神（おおやま つみのかみ）」を祀っている祠。祠の脇には、三井美唄炭鉱の前身である「宝田炭鉱」の碑がある。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.122 三井美唄炭鉱鉱員住宅群

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町	
建築年等	昭和初期	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>美唄では、若山炭鉱(1896(明治 29)年開鉱 1899(明治 32)年休止)、沼貝炭鉱(1915(大正 4)年開鉱)、光珠炭鉱(1922(大正 11)年開鉱)などが起業したが、次第に統合され 1928(昭和 3)年 8 月に三井美唄炭鉱が発足した。その後も、1938(昭和 13)年錦旗炭鉱(1917(大正 6)年開鉱、1922(大正 11)年閉山)が買収されている。鉱業所や住宅街はそれまで高い山の中腹にあったが、三井美唄炭鉱になってから、1931(昭和 6)年から 33(昭和 8)年にかけて、事務所、住宅の移転、娯楽館・病院などが現在の南美唄地域にまとめられ、国鉄支線も開通し 1938(昭和 13)年には出炭量も 90 万トンに達する日本有数の炭鉱となった。この炭鉱住宅街は平坦な丘陵地に広がる珍しいもので、中央の大通りを挟んで条丁目方式がとられていたので、整然としていた。1 棟 4 戸の住宅が多く、また、家の周囲は広くて、花畑や自家農園を作る人もいた。1950(昭和 25)年の三井美唄炭鉱地区住宅数は、約 3 千戸で人口は約 2 万人いたが、エネルギー革命の影響により 1963(昭和 38)年に炭鉱は閉山し、その一部を引き継いだ三美炭鉱も 1973(昭和 48)年 3 月に閉山したが、炭鉱住宅は残されていて、現在も個人住宅として使用されている。道内の炭鉱住宅は閉山後、急激に解体・更地化される場合が大半だが、その中でも南美唄地区の炭鉱住宅は周辺環境も良く、職員住宅・鉱員住宅も庭を含め、よく手入れされていて、旧鉱山都市の独特の雰囲気を残している。</p>	
参考情報	美唄で石炭が発掘されるまでの背景	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.123 三井美唄互楽館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町大通り1丁目	
建築年等	昭和30（1955）年	
構造	RC造3階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	<p>道内産炭地域に現存する最大の旧映画館。当時、2千人を収容した大規模な映画館で、中央（東京）の劇団・芸能人が多数招かれ、美唄市外からも観客を集めた。美唄の文化レベルの高さを誇る施設ともいる。当時、炭鉱では大規模かつ豪壮な会館・映画館が相次ぎ建設されたが、特にこの建物は活気と勢いのある炭鉱の文化を現在に伝える施設として貴重である。また、この映画館は北海道における封切館として位置づけられており、最新の映画が鑑賞できた。600坪の敷地に、延べ床面積299.97坪(991.7㎡)、1期213.36坪、2階49.37坪、3階37.24坪の建物が建設された。1階固定席590名、立見席544名、2階固定席120名、3階固定席96名、2・3階立見席127名、合計1477名収容の劇場だった。暖房は蒸気暖房で、1階椅子席下に通管し、足元を保温する工夫もなされた。デザインはシンプルですが存在感のある建物。現在は民間企業の倉庫として使用されているため、内部はかなり改変されている。</p>	
参考情報	炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.124 三井美唄消防署

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町	
建築年等	昭和 22（1947）年	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間	
管理者	民間	
文化財登録/指定		
解説文	望楼は失われているが、かつて多くの人々で賑わった大通りの様子を伝える建物の一つである。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.125 三井美唄炭鉱所長住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町仲町	
建築年等	昭和 10（1935）年	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1963(昭和 38)年の炭鉱閉山に伴って、生産施設は早期に撤去されたが、炭鉱住宅等は民間企業や個人に安価に払い下げられたため、現在もまともに残っている。南美唄市街地から延びる道路を境にして南北に鉱員住宅と職員住宅とに分かれている。職員住宅には、甲乙丙丁の 4 種類があって、職階級によって区分されていました。閉山時、甲種 2 棟、乙種 15 棟、丙種 42 棟及び丁種 103 棟があった。甲種は最大規模の独立住宅で、そのうちの所長住宅は木造 2 階建てで玄関脇には広いカーテンボックスを備えた洋風の格調高い応接間がある。</p>	
参考情報	炭鉱—盛衰の記憶	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.126 三井美唄炭鉱職員住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町仲町ほか	
建築年等	昭和初期	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1963(昭和 38)年の炭鉱閉山に伴って、生産施設は早期に撤去されたが、炭鉱住宅等は民間企業や個人に安価に払い下げられたため、現在もまともに残っている。南美唄市街地から延びる道路を境にして南北に鉱員住宅と職員住宅とに分かれている。職員住宅には、甲乙丙丁の 4 種類があって、職階級によって区分されていました。閉山時、甲種 2 棟、乙種 15 棟、丙種 42 棟及び丁種 103 棟があった。</p>	
参考情報	北海道の近代化遺産	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.127 甲号1戸建社宅（旧病院長宅）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	美唄市南美唄町南町	
建築年等	昭和12（1937）年	
構造	木造2階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>甲号社宅は、旧病院長宅で、所長住宅には及ばないが、職員社宅の中では規模の大きな戸建宿舎である。山の麓部分に等高線に対して直角に直線形に建てられている。前庭とともに広々と植栽された裏庭を有し、北側に大きな切妻屋根の玄関棟を突出し、高さの異なる切妻屋根が変化をつけている。防腐処理された黒い腰高部分の外壁と白い破風板、水平帯、額縁、出窓ブラケットなどとのコントラストが秀逸である居室は1階が10畳+8畳3室+4.5畳、2階が6畳一間の合計6室で構成されている。創建時の姿を継承しつつ、上手に維持活用されている事例である。</p>	
参考情報	枝朋彦『三井美唄炭鉱の社宅街の変遷について』北大卒論2000年	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(6) 芦別市

芦別は 1893（明治 26）年に開拓が始まり、1897（明治 30）年より掘りはじめられた石炭は、1913（大正 2）年に滝川～富良野間に鉄道が開通したことから三菱鉱業が本格的に開鉱したのを契機に徐々に拡大していきます。1938（昭和 13）年に高根鉱業所が開鉱、翌年に三井鉱業所一抗が開鉱。1940（昭和 15）年には炭鉱の専用線として三井鉱山芦別専用鉄道ができました。1944（昭和 19）年には明治鉱業が東芦別炭鉱を買収して開業し、1947（昭和 22）年に油谷炭鉱が開鉱と「芦別五山」と言われる大手の 5 社が次々と開鉱し、人口も 1959（昭和 34）年に最高 7 万 5 千人余りに達するなど「炭鉱のまち芦別」を築きました。しかし 1960 年代、石油へのエネルギー転換により多くの炭鉱が閉山、1992（平成 4）年に三井芦別炭鉱が閉山したことで抗内掘りの炭鉱は芦別から無くなりました。

また基幹産業が厳しい状況に置かれた中で、市はまちを再活性化させるために企業誘致や観光開発に力を入れてきました。近年では旧頼城小学校がイベント時に公開され、旧三井芦別鉄道炭山川橋梁では展望広場や、見学用駐車帯も整備されるなど、今も残る炭鉱遺産を美しい自然環境や特産品と共に地域の魅力として捉え、観光資源のひとつとして活用されていくことが期待されています。

No.128 三池8トン有線電車

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	芦別市本町 17（市立図書館前庭）	
建築年等	昭和 28（1953）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可（冬期間除く）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	芦別市	
管理者	芦別市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1953（昭和 28）年 4 月福岡県の三井三池製作所で製造、約 30 年間に渡り三井芦別炭鉱の坑内で使用された坑内電車。90 馬力の牽引力で炭車を 30 両以上牽引できた。最盛期には三井芦別炭鉱で 37 台使用されていたが、採掘区域が深くなるにつれて、バッテリー電車やベルトコンベヤーに移った。1992（平成 4）年 9 月三井芦別炭鉱の閉山後、芦別ではこの 1 台のみとなった。</p>	
参考情報	「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.129 星の降る里百年記念館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	芦別市北4条東1丁目1	
建築年等	平成5(1993)年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	芦別市	
管理者	芦別市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1993(平成5)年10月8日開館。芦別市100周年を記念して建設。教育、学術文化の振興と地域の活性化に寄与する博物館施設として、道の駅「スタープラザ芦別」の敷地内に立地。常設展示室は、自然、歴史、文学のコーナーに分けて展示・解説。芦別の星空を体感できるスタードーム、高山植物の咲く岨山のジオラマ、滝里遺跡群の出土遺物、芦別ゆかりの小説家葛西善蔵文学資料、歌人と謝野寛・晶子夫妻の愛弟子西村一平が収集した短歌資料群(西村一平コレクション)があり、芦別の炭鉱に関する資料も多数展示・収蔵。マジックビジョン小劇場では、1953(昭和28)年の炭鉱長屋の暮らしぶりを見ることができる。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『年報』星の降る里百年記念館、『新芦別市史 第三巻』(芦別,2015)</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	<p>炭鉱に特化した資料館ではないが、郷土資料館として様々な炭鉱資料も収蔵している。</p>	

No.130 ディーゼル機関車、貨車

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	芦別市西芦別町～中の丘町（炭山川橋梁上）	
建築年等	昭和 39（1964）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	芦別市	
管理者	芦別市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井芦別鉄道で最後まで使われたディーゼル機関車（50T ディーゼル機関車。DD501 号）。富士重工宇都宮工場で製造され、1000 馬力の牽引力を有した。石炭の増産に伴って 1964（昭和 39）年に導入され、1989（平成元）年に営業廃止になるまで活躍した。廃止と同時に市に寄贈され、現在、石炭専用貨物セキ車 3820 と共に、通年で炭山川橋梁上に展示。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『耀風』（解散記念誌編纂委員会,1993）、『運転屋が見てきた三井芦別鉄道』（安平鉄雄,2003）、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.131 旧三井芦別鉄道 炭山川橋梁

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	芦別市西芦別町～中の丘町	
建築年等	昭和 20（1945）年	
構造	プレートガーター	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	芦別市	
管理者	芦別市	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>1945（昭和 20）年 12 月に竣工した、芦別川支流の炭山川上に架かる三井鉱山（株）専用鉄道の橋梁で、芦別が炭都だった時代の象徴的な建造物。構造は、単線仕様、橋長 94m、鋼製 6 連プレートガーター桁橋とコンクリート造 2 連アーチからなり、線形は緩やかな曲線を描く。炭山川の深い渓谷に高さ 30m、最大直径 7m のコンクリート製橋脚 5 本が並び立っている。鉄橋の上には 1989（平成元）年に市に寄贈されたディーゼル機関車（50T ディーゼル機関車。DD501 号）と石炭専用貨車セキ 3820 が展示されている。2009（平成 21）年 1 月 8 日付で、橋梁本体が 国の登録有形文化財に登録。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『年報』vol.21,平成 25 年度版,星の降る里百年記念館、『運転屋が見てきた三井芦別鉄道』（安平鉄雄,2003）、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.132 旧三井芦別鉄道 三井芦別駅舎

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	芦別市西芦別町 1	
建築年等	昭和 15（1940）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ可能（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	(有)芦別資源商	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井芦別鉄道は、1939（昭和 14）年に三井鉱山専用鉄道として敷設免許申請、同 15 年 11 月運輸営業開始。当初は開発資材や桂沢坑炭を輸送したが、1941（昭和 16）年 5 月、第一坑の営業出炭開始と選炭工場の完成により本格的輸送を開始。1989（平成元）年 3 月、49 年間の営業を廃止。1940（昭和 15）年に開業した三井芦別鉄道の拠点駅。1942（昭和 17）年には地域の要望に応じて小型客車による旅客輸送を開始。1972（昭和 47）年旅客営業廃止。現在は周辺の関連施設やプラットホームなどは撤去されたものの、外観の面影を残す形で工場として使用。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『耀風』（解散記念誌編纂委員会,1993）、『運転屋が見てきた三井芦別鉄道』（安平鉄雄,2003）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.133 新坑夫の像

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	芦別市頼城町	
建築年等	平成 9（1997）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	芦別市	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1997（平成 9）年 5 月、複製である石像「新坑夫の像」が国道 452 号沿いの頼城郵便局隣に建立された。原像「坑夫の像」は炭鉱労働者の士気高揚を目的に、1945(昭和 20 年)7 月に軍需省の組織した軍需生産美術推進隊の彫刻家古賀忠雄氏、圓鏝勝三氏、中川為延氏によって、西芦別町西区 4 丁目の三井芦別鉱業所外勤詰所前に建立された。</p> <p>コンクリート製で長い間風雪にさらされ崩壊の恐れがあったため、頼城町の有志を中心とする元炭鉱マンたちが「ヤマのシンボルを残そう」と「坑夫の像保存会」を結成して寄付金を募り、現在の新坑夫の像を建てて旧像を解体した。現在は原像の右腕部分のみ、星の降る里百年記念館に保存されている。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『耀風』（解散記念誌編纂委員会,1993）、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.134 旧頼城小学校（星槎大学）校舎及び体育館

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	芦別市緑泉町 5	
建築年等	昭和 29（1954）年	
構造	レンガ造・木造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ可能（敷地内は要許可）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	学校法人国際学園	
管理者	星槎大学	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>1910（明治 43）年頼城教育所として設置。1917（大正 6）年に頼城小学校と名前が変わった後、増改築・移転。1953（昭和 28）年に火災で全焼。現在の校舎は 1954（昭和 29）年に新築された。総工費 5200 万円全額を三井鉱山(株)が負担。建物は、レンガ造（約 70 万個）、一部鉄筋コンクリート造、鉄板葺、二階建てで、建築面積 2232 m²・延床面積 4187 m²、教室 36 室・職員室等 3 室をもち、一線校舎の外壁（直線廊下）の長さ 106m と国内でも稀な規模のレンガ建築物。</p> <p>体育館も同年の建築で、木造平屋建て、面積 757 m²。2002（平成 14）年 3 月に頼城小学校が閉校し、2004（平成 16）年 4 月 24 日に開校した星槎大学が校舎として使用している。2008（平成 20）年 3 月 7 日、校舎と体育館が国の登録有形文化財に登録。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『年報』vol.21,平成 25 年度版,星の降る里百年記念館、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.135 三菱・北菱記念碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	芦別市上芦別町 30（啓南公園内）	
建築年等	昭和 55（1980）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	不詳	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>三菱鉱業(株)芦別鉱業所・北菱産業(株)芦別炭鉱の記念碑。三菱・北菱芦別炭鉱を偲ぶ会により設置。三菱系の北菱芦別炭鉱は、美唄、夕張、平岸、青木沢などいわゆる北菱五山の一炭鉱。1956（昭和 31）年 6 月、奥六線沢縦入坑において採掘を開始。1963（昭和 38）年三菱鉱業から鉱区の譲渡を受け、年産 12 万トンを出炭した。その後、地質調査の不備が原因で予期せぬ断層にぶつかり、1970（昭和 45）年 9 月道炭労調査団の調査結果に基づき、同年 11 月に約 15 年にわたる操業を終えた。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『やまびこ 三菱 北菱 あしべつ炭鉱を偲ぶ会記念誌』（三菱 北菱 あしべつ炭鉱を偲ぶ会準備委員会,1980）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.136 高根炭鉱殉職者慰霊碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	芦別市高根町	
建築年等	昭和 40（1965）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	不詳	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>「南無妙法蓮華経」碑と殉職者氏名を刻んだ碑。高根炭鉱は、1945（昭和 20）年開坑、1967（昭和 42）年閉山。芦別炭礦株式会社が高根町で 1938（昭和 13）年 4 月に熊ノ沢坑を開坑、高根第一炭礦と称した。その後、会社名を芦別高根炭礦株式会社、芦別高根炭礦に変更するなど変遷を重ねたが、石炭不況で 1967（昭和 42）年に閉山。旧高根神社境内に 1965（昭和 40）年 8 月に建立された高根炭業所殉難慰霊碑があり、その奥にかつての貯水池のコンクリート堰が残る。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）、『やまは今日も緑なり』（高根礦業所と高根小中学校の記録刊行の会編,1979）、『炭礦概況』（芦別高根炭礦株式会社）、『開礦 20 年』（芦別高根炭礦株式会社）、『開礦 20 年の思い出』（芦別高根炭礦株式会社）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.137 殉職者之碑、油谷晨介之碑、胸像台座

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	芦別市旭町油谷	
建築年等	昭和 48（1973）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	不詳	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>殉職者之碑、油谷晨介之碑（油谷鉱業(株)の創業者）、胸像台座がある。胸像台座の上にあった油谷晨介の胸像は建立後間もなく盗まれ、現在はない。1947（昭和22）年油谷鉱業(株)が旭町で露天掘り炭鉱を開坑。最盛期の1953（昭和28）年には油谷の炭住街に約5000人が居住も、石炭不況に勝てず1965（昭和40）年3月閉山。その他、B&G 海洋センター右手奥の鏡沢川左岸側に旧二坑選炭施設群のコンクリート基礎や杵柱、貯水池跡、ズリ山などが残る。</p>	
参考情報	<p>「星の降る里百年記念館」が収集した資料、『新芦別市史 第三巻』（芦別市,2015）、『十年のあゆみ』（油谷鉱業株式会社,1957）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(7) 江別市

江別の歴史は、1871（明治4）年に宮城県涌谷領から移り住んだ21戸76人の農民によって始まりました。その後、各地から屯田兵が入植し、計画的な開拓が進められました。

江別の主要産業であるれんが生産は、1891（明治24）年に現在の江別市東光町で創業した江別太煉瓦石工場が始まりだとされています。その後、原料となる粘土層が野幌に多く分布していたことなどから、窯業の中心は野幌へと移り、1898（明治31）年には北海道炭礦鉄道(株)野幌煉化工場が創業しました。

野幌のれんがは、北海道庁をはじめ、日本製鋼所旧火力発電所や旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場など、炭鉄港地域の主要な拠点でも使用されていました。れんが生産は、産業として市民の暮らしを支えるとともに、文化的にも大きな影響を与えました。現在も全国に流通する一大産地となっており、「江別のれんが」は北海道遺産に認定されています。市内には、学校、サイロ、民家、倉庫など、多くのれんが建造物が現存しています。

このれんが文化を街づくりに活かすため、官民の活動も活発化しています。1998（平成10）年に廃業した窯業会社「株式会社ヒダ」の工場跡は、その文化的価値を活かしながら地域経済の活性化を図る施設として改修され、2016（平成28）年に商業施設「EBRI（エブリ）」としてグランドオープンしました。

No.138 江別市ガラス工芸館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	江別市野幌代々木町 53	
建築年等	昭和 20 (1945) 年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市	
管理者	江別市	
文化財登録/指定		
解説文	れんが産業に長い歴史を持つ江別の象徴として、煉瓦造りの建物を保存し、ガラス工芸作家の工房として活用するため、平成 6 年 4 月 21 日に開館した。ガラス工芸館では、ガラス工芸作家・柿崎均氏の作品制作の様子を見学できるほか、柿崎氏の作品の鑑賞や購入、作品づくり体験ができる。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.139 火薬庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	江別市萩ヶ岡 19	
建築年等	明治 20（1887）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市	
管理者	江別市	
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	<p>屯田兵第三大隊本部跡。屯田兵が最初に江別に入地したのは明治 11 年であるが、当初は江別分隊と呼ばれ、札幌に置かれた第一大隊に編入されていた。明治 18 年から 19 年にかけて野幌に 225 戸が入地し、江別への屯田兵の配置が完了した。明治 20 年には、江別・野幌の両中隊が第一大隊から分割され、新たに第三大隊として編成された。この大隊本部は、現在の江別小学校のある萩ヶ岡に置かれた。屯田兵の解散後、建物は他の施設に利用されていたが、昭和 9 年 1 月の失火により焼失し、現在はこの火薬庫のみが残っている。火薬庫は煉瓦造平屋建てで、建築面積は 15.75 平方メートル、屋根は江別では珍しい瓦葺である。使用された煉瓦は、S の字の刻印から白石の鈴木煉瓦製と推測される。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.140 ĘBRI

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	江別市東野幌町 3-3	
建築年等	昭和 17（1942）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市、民有地	
管理者	江別市	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>旧ヒダ工場は、平成 10 年に廃業した窯業会社「株式会社ヒダ」の工場跡である。当時、江別市内に残されていた古くからある窯業工場のひとつであった。建物の構造にはれんがが使用されており、JR 線に面し車窓からも見えることから、江別らしい建物として市民に愛されてきた。市は、窯業の歴史と歴史的れんが建造物を保存するため、平成 12 年 10 月にこの工場跡を取得し、「江別グレシャムアンテナショップ」として一部活用を図りながら、保存事業を続けてきた。</p> <p>平成 26 年 8 月には、民間のアイデアと力を活用し、優れた文化的価値を生かしつつ魅力ある施設として再生・利活用を図るため、保存活用に関する事業者を公募し、選定事業者と 20 年間の土地建物の使用賃借契約を締結した。その後、旧ヒダ工場の文化的価値を活かしつつ地域経済の活性化をもたらす施設として活用するため、改修工事を実施し、平成 28 年 3 月に商業施設「ĘBRI（エブリ）」としてグランドオープンした。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.141 江別市セラミックアートセンター

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	江別市西野幌 114-5	
建築年等	平成 6 (1994) 年	
構造	RC 造、レンガ積	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市	
管理者	江別市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>緑豊かな野幌原始林に隣接するセラミックアートセンターは、四季折々の顔を見せる自然を背景に、陶芸作品とれんがの展示室、陶芸教室などを開講する工房、やきものに関する書籍を閲覧できる図書室などを設けている。「観る」「創る」「集う」をコンセプトに、北海道のやきもの文化を創造していこうとする施設である。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.142 米澤煉瓦工場

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	江別市元野幌 227	
建築年等	昭和 14（1939）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	米澤煉瓦（株）	
管理者	米澤煉瓦（株）	
文化財登録/指定		
解説文	1939 年に設立され、操業中のれんが工場では道内最古。工場のシンボルである煙突は、石炭焼き時代から現在まで使われており、基部を間近に見学可能。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.143 王子エフテックス江別工場 れんが倉庫群

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	江別市王子 2-3-1	
建築年等	明治 42（1909）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	王子エフテックス（株）	
管理者	王子エフテックス（株）	
文化財登録/指定		
解説文	1909 年に野幌れんがで建築された市内最古の倉庫をはじめ、れんが倉庫が立ち並ぶ。前身の富士製紙の進出は江別の近代化に大きく寄与し、石炭運搬用の専用線も敷かれた。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

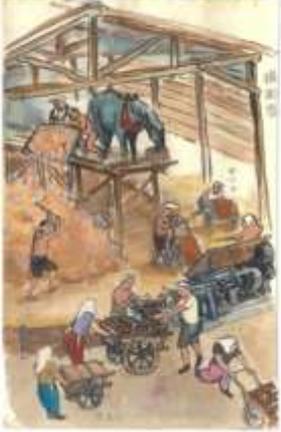
No.144 北海道炭礦鉄道野幌煉化工場のれんが

分類	構成文化財	写真	
炭/鉄/港区分	炭鉱		
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）		
所在地	江別市西野幌 114-5		
建築年等	明治 32（1899）年～明治 43（1910）年		
構造			
現存状況	有		
見学可否	可		
現地看板	有		
刊行物掲載	有		
所有者	江別市		
管理者	江別市		
文化財登録/指定			
解説文	北炭が 1898 年に設置した野幌煉化工場で製造され、日本製鋼所旧火力発電所や旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場で使われた野幌れんが。		
参考情報			
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

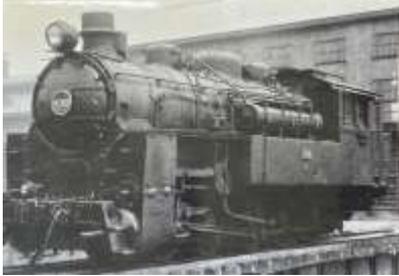
No.145 北海道炭鉱鉄道（株）野幌煉化工場登り窯ジオラマ

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示資料	
所在地	江別市西野幌 114-5	
建築年等	平成 6 (1994) 年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市	
管理者	江別市	
文化財登録/指定		
解説文	1898 (明治 31) 年に創業した北海道炭礦鉄道(株)野幌煉化工場の”れんが場”の様子を今に伝えるジオラマ。両登り窯が忠実に再現され職人たちの働く様子も見て取れ、彼らの息づかいが聞こえそうである。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.146 輪環窯時代のれんが工場の人々

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分		
所在地	江別市西野幌 114-5	
建築年等	1940 年代	
構造		
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	江別市	
管理者	江別市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>実際に輪環窯で働いていた、酒井恒雄氏による絵画。輪環窯時代のれんが製造の工程が詳細に描かれているほか、れんが場で苦楽を共にした職人、家族の暮らしぶりも生き生きと描かれている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.147 炭鉱鉄道遺産群（山田コレクション）

分類	構成文化財	写真	
炭/鉄/港区分	鉄道		
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）		
所在地	江別市		
建築年等	明治 38（1905）年～昭和 19（1944）年		
構造			
現存状況	有		
見学可否	不可		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	日本鉄道保存協会		
管理者	日本鉄道保存協会		
文化財登録/指定			
解説文	北炭夕張鉄道、三菱美唄鉄道、三菱大夕張鉄道など、炭鉱の鉄道で使われた希少な蒸気機関車や貨車などのほか、それらの鉄道関連物品が保存されている。現在は民間団体が保存。		
参考情報			
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

(8) 赤平市

赤平の石炭の歴史は、1857（安政4）年、北海道の名付け親として知られる松浦武四郎が空知川の沿岸で石炭を発見したことから始まります。その後は輸送する手段が無かったため開発が進みませんでした。1913（大正2）年に滝川ー下富良野間に鉄道が開通したことで多くの炭鉱が開坑していきます。1918（大正7）年に赤平で最初の大型炭鉱として茂尻炭礦が開坑、1937（昭和12）年に豊里炭鉱、1938（昭和13）年に赤間炭鉱と住友赤平炭鉱と大手の炭鉱が次々と開坑し、中小炭鉱も全て合わせると77もの炭鉱が赤平にはありました。

多くの炭鉱が稼働する中で人口は増加し、1954（昭和29）年に道内18番目の市となりました。1960（昭和35）年には、人口もピークの59,430人を数え、赤平駅の1年間の貨物取扱量が大阪・梅田駅を抜いて日本一を記録するなど、地域の発展を支えました。しかし、昭和30年代後半から石炭産業の衰退を余儀なくされ、平成6年には最後の一山が閉山し、赤平の「石炭の歴史」に幕を下ろしました。その後赤平は鉱業都市から工業都市へと産業構造の転換を図り、炭鉱で培った技術などを活かしたものづくり企業の誘致を積極的に行ってきました。そんな中2003（平成15）年に第6回国際鉱山ヒストリー会議が行われたことがきっかけで炭鉱遺産保存への機運が高まります。2016（平成28）年に旧住友赤平炭鉱の施設を住石マテリアルズから赤平市が無償譲渡を受け2018（平成30）年に赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設がオープンし、赤平の石炭の歴史を今に伝える役割を担っています。

No.148 北炭赤間炭鉱選炭工場跡（原炭ポケット）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	赤平市字赤平 693-1	
建築年等	昭和 16（1941）年	
構造	RC 造	
現存状況	有（原炭ポケットのみ）	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	赤平市	
管理者	赤平市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>JR 赤平駅裏、777 段のズリ山（「日本一のズリ山階段」）登り口横にある。登山道の左右に点在して、左側に精炭、3 列の積込機、原炭ポケットがあり、右側（駐車場奥）には選炭工場があったが、現在は原炭ポケットのみ残る。1941（昭和 16）年、北炭赤間炭の選炭工場として、赤間橋とセットで作られた。北炭赤間炭の出炭量は住友赤平炭の 3 分の 1 だったため、1973（昭和 48）年に閉山。鉱員は空知炭礦（歌志内市）に集約された。</p> <p>積込機ピットは、道内外の炭鉱写真家のオブジェとして人気があり、保存運動・マスコミ報道も盛んだったが、1999（平成 11）年 5 月に解体。2013（平成 25）年には、「ズリ山展望広場」の中に駐車場やトイレなどの周辺整備がなされ、その一面に原炭ポケットが立地。</p>	
参考情報	<p>赤平写真映像資料収集会からの聞き取り、『赤間炭鉱思い出日記』（DVD）、「そらち・炭鉱の記憶一覧」（平成 12 年版）、『そらち炭鉱遺産散歩』（北海道新聞空知「炭鉱」取材班編著,2003）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	炭鉄港×AR アプリ対応	

No.149 北炭赤間炭鉱ズリ山

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市字赤平 693-1	
建築年等	平成 2（1990）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	赤平市/北海道	
管理者	赤平市/北海道	
文化財登録/指定		
解説文	<p>赤平の中心市街地にある北炭赤間炭鉱のズリ山。1990（平成 2）年に階段と火文字を設置。火文字は、夏のあかびら火まつりのクライマックスとして点火される（現在の点火位置はズリ山階段の横側に移動）。ズリ山階段としては、長崎県佐世保市世知原町の 555 段や北海道岩見沢市栗沢町の万字炭山森林公園（階段の直線部 775 段）を抜いて日本一の階段数（直線部分 777 段）で、頂上の展望広場からは赤平市街が一望できる。</p>	
参考情報	<p>「そらち・炭鉱の記憶一覧」（平成 12 年版）、空知総合振興局「そらち 炭鉱の記憶をめぐる」ウェブサイト、市内看板</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.150 住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	赤平市字赤平 485	
建築年等	昭和 38（1963）年	
構造	鉄骨造（立坑）	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（内部は有料のガイドツアーのみ）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	赤平市	
管理者	赤平市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1963（昭和 38）年に、-350L 以深の深部開発（採掘）のため総費用約 20 億円をかけて建設。1994（平成 6）年の閉山時まで使用。人員と炭車を大量に昇降させ、石炭生産コストを飛躍的に削減。「合理化の優等生」ともいえる立坑。完成当時は「東洋一」の立坑と評された。建屋や各種機械、電気系統設備などが閉山当時のまま残されている。</p> <p>内径:6.6m、深さ 650m、プラットフォーム-350L・-550L。立坑櫓:GHH 式 H 型、高さ 43.8m。</p> <p>巻上機:三菱-GHH ケーベ巻上機、広幅 2 本索ケーベ式、グランドマシン 2 セット、ケーベプーリおよびヘッドシーブ直径 5.5m、巻上速度秒速 12m(時速 43km)、モーター1,600kw（直流）</p> <p>巻上能力:-350L 130 車/時、-550L 120 車/時</p> <p>ケージ:4 段デッキ、中心吊り</p> <p>人員:72 名積載可能（18 名×4 段）</p> <p>炭車(2 m³):4 車積載可能（4 段）</p> <p>ロープ:メインロープ径 52mm（2 本）、テールロープ幅 140mm×厚 27.4mm（2 本）</p> <p>年間揚炭能力:140 万トン</p> <p>工期:1959（昭和 34）年 9 月着工、1963（昭和 38）年 2 月完成</p> <p>市の中心部に位置し「赤平市のシンボル」として今も市民から愛される。1999（平成 11）年公開の映画「鉄道員（ぽっぽや）」の舞台の炭鉱の立坑として登場。2000（平成 12）年 2 月 11 日、12 日の両日「炭鉱（やま）の歴史を保存・継承する市</p>	

	<p>民会議」が主体となり、立坑ネオンの再点灯・ライトアップが閉山後6年ぶりに行われた。また、「赤平コミュニティガイドクラブ TANtan」主催のイベント「TANtanまつり 炭鉱灯（やまあかり）」によって、2011（平成23）年度から毎年秋に立坑のライトアップが行われている。内部の見学は有料ガイドツアー参加の必要あり。</p>
参考情報	<p>『住友赤平開坑三十年』（住友赤平三十年史編纂委員会編,1968）、『わが社のあゆみ』（住友石炭鉱業株式会社社史編纂委員会編,1990）、『立坑概況』（住友石炭鉱業株式会社赤平鉱業所,1963）、『概況』（住友石炭鉱業株式会社赤平鉱業所,1967）、『会社あんない』（住友石炭鉱業株式会社赤平鉱業所）、『赤平炭鉱概況 平成5年度』（住友石炭赤平炭鉱株式会社,1993）、『住友赤平思い出日記』（DVD）、赤平写真映像資料収集会からの聞き取り、市内看板など</p>
アピールポイント	
権利/安全上の注意	
その他特記事項	

No.151 住友赤平炭鉱関連採炭用具等（赤平市炭鉱歴史資料館）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	赤平市字赤平 668	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	赤平市	
管理者	赤平市	
文化財登録/指定		
解説文	住友赤平小学校内（2014（平成 26）年 3 月閉校）の空き教室を 7 室ほど使い、住友赤平炭鉱から寄贈された採炭用具、図面・写真、生活・文化資料、書籍などを収蔵。2018（平成 30）年 7 月、赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設の開館に伴い、資料約 200 点を厳選して同施設へ移設・展示した。	
参考情報	『そらち炭鉱遺産散歩』（北海道新聞空知「炭鉱」取材班編著,2003）、赤平市炭鉱歴史資料館パンフレット、赤平写真映像資料収集会からの聞き取り	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.152 住友赤平炭鉱等関連資料

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	赤平市泉町 2 丁目 2-1 赤平コミュニティセンター別館内	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	赤平市	
管理者	赤平市	
文化財登録/指定		
解説文	住友赤平炭鉱に関する文書、書籍、写真、図面等の資料。一部、北炭赤間炭鉱関係資料、茂尻炭鉱関係資料、豊里炭鉱関係資料、一部の中小炭鉱関係資料もある。これらの資料は、『赤平市史』（2001）編纂に際して参照された。	
参考情報	赤平写真映像資料収集会からの聞き取り	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.153 空知川露頭炭層

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（天然記念物）	
所在地	赤平市字赤平	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可（遠望・冬期間除く）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	国	
管理者	国	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1857（安政4）年に松浦武四郎が発見し、その後の空知炭田開発の端緒となったとされる露頭炭。1873（明治6）年、開拓使の榎本武揚らは幌内・三笠一帯の炭層を調査した後、石狩川本流を遡って空知太に達し、さらに空知川を遡上しながら沿岸一帯を調査し、赤平付近で石炭脈を発見し分析のために石炭を持ち帰った。1874（明治7）年、開拓使に雇われた米国人地質鉱山学者ライマンらは空知川を遡って地質調査をし、赤平周辺で石炭の大露頭を確認した。</p>	
参考情報	<p>「そらち炭鉱のまちガイドマップ」（空知総合振興局）、『赤平市史 上巻』（赤平市史編纂委員会編,2001）、『そらち炭鉱遺産散歩』（北海道新聞空知「炭鉱」取材班編著,2003）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.154 住友赤平炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市字赤平 485	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間企業	
管理者	民間企業	
文化財登録/指定		
解説文	<p>住友赤平炭鉱のズリ山。選炭の過程で生じる岩石や低品位炭など石炭として利用できないものをズリという（九州ではボタ）。廃棄されたズリが長年にわたって積み上がることによってズリ山が形成される。立坑に隣接した選炭施設から、南方向にまっすぐズリ捨て線が延びていた。斜面に位置するため、ズリ山の特徴的な形状はわかりにくい。</p>	
参考情報	赤平写真映像資料収集会からの聞き取り	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.155 赤間炭鉱の碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市字豊里	
建築年等	平成 14（2002）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	不明	
管理者	不明	
文化財登録/指定		
解説文	<p>赤間炭鉱は 1938（昭和 13）年 12 月開坑。1960（昭和 35）年 11 月 25 日、合理化により万字炭鉱、美流渡炭鉱とともに北炭から分離（三山分離闘争）。1965（昭和 40）年 7 月に歌志内の空知炭礦と合併、空知炭礦株式会社空知礦業所赤間鉱となった。両鉱を地下で結ぶ空・赤連絡坑道は、1965（昭和 40）年 7 月着工、1972（昭和 47）年 1 月 22 日に貫通。</p> <p>しかし、1972（昭和 47）年 7 月 28 日に起きたガス爆発事故が引き金になり 1973（昭和 48）年 2 月 27 日に閉山。2002（平成 14）年 8 月、赤間炭鉱閉山 30 周年にあたり、赤間炭鉱出身者が浄財を募り空知川のほとり虹かけ橋のたもとに「赤間炭鉱の碑」を建立した。</p>	
参考情報	『赤平市史 下巻』（赤平市史編纂委員会編,2001）、『赤間炭鉱思い出日記』（DVD）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.156 茂尻炭鉱炭鉱住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	赤平市茂尻栄町など	
建築年等	昭和初期	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>茂尻炭鉱の炭鉱住宅。茂尻炭鉱は、1918（大正7）年7月13日開坑、1969（昭和44）年5月30日閉坑。1969（昭和44）年4月2日に起きたガス爆発事故が引き金となり閉山。JR茂尻駅周辺から裏手に広がる丘に点在し、多くは1棟2戸建ての平屋（6畳2間と4畳1間）。炭鉱が盛んだった当事、水道は屋外の共用で、各町内に共同浴場と集会場があった。</p>	
参考情報	<p>『そらち・炭鉱の記憶集』（北海道空知支庁,2004）、『赤平市史 下巻』（赤平市史編纂委員会編,2001）、『茂尻炭礦五十年史』（茂尻炭礦五十年史編纂委員会編,1967）、『茂尻炭鉱思い出日記』（DVD）、『そらち炭鉱遺産散歩』（北海道新聞空知「炭鉱」取材班編著,2003）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.157 茂尻炭鉱の碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市茂尻旭町1丁目	
建築年等	昭和49（1974）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>茂尻炭鉱は、大倉鉱業株式会社により1918（大正7）年開坑、赤平初の大型炭鉱であった。当時はまだ歌志内村で、1922（大正11）年に歌志内村から分村して赤平村となる。1967（昭和42）年、20億円あまりを投入して立坑が建設され操業を開始。しかし、1969（昭和44）年4月2日に発生した坑内ガス爆発事故が引き金となって、同年5月30日に閉山した。茂尻炭鉱では、1950（昭和25）年や1951（昭和26）年など、ガス爆発事故がおきている。</p>	
参考情報	<p>『茂尻炭鉱思い出日記』（DVD）、『赤平市史 下巻』（赤平市史編纂委員会編、2001）、『茂尻炭鉱五十年史』（茂尻炭鉱五十年史編纂委員会、1967）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.158 豊里記念の丘公園

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市宮下町3丁目	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	赤平市	
管理者	赤平市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>豊里炭鉱は1937（昭和12）年7月1日開坑、1967（昭和42）年3月31日閉山。豊里炭鉱の跡地に豊里記念の丘公園が整備された。公園に隣接して、豊里ふるさと会館や豊里炭鉱の碑がある。公園内には、ヘルメットとキャップランプをかたどったモニュメントがある。豊里ふるさと会館には、精巧なジオラマ「豊里炭鉱全景パノラマ」（縮尺650:1、ナレーション音声付き）や採炭器具、生活用具などが展示されている。</p>	
参考情報	『赤平市史 下巻』（赤平市史編纂委員会編、2001）、『豊里炭鉱思い出日記』（DVD）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.159 豊里炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市宮下町3丁目	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>豊里炭鉱のズリ山。選炭の過程で生じる岩石や低品位炭など石炭として利用できないものをズリという（九州ではボタ）。廃棄されたズリが長年にわたって積み上がることによってズリ山が形成される。閉山から時が経って木々が生い茂っているが、豊里炭鉱のズリ山は特徴的な形状を残しており、比較的わかりやすい。大小2つのズリ山があった。閉山時、ズリ山の安定化や植生回復に適した樹種が検討され、シラカバが植えられたという。</p>	
参考情報	豊里炭鉱 OB からの聞き取り、『豊里炭鉱思い出日記』（DVD）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.160 豊里炭鉱の碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	赤平市宮下町3丁目	
建築年等	昭和61（1986）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	町内会	
管理者	町内会	
文化財登録/指定		
解説文	<p>豊里炭鉱は、1937（昭和12）年7月1日、昭和電工(株)の炭山として開坑。1950（昭和25）年11月昭和電工(株)は東海産業(株)に譲渡。1954（昭和29）年5月7日、豊里炭業(株)と社名変更し、同年11月1日に整理会社となる。1956（昭和31）年10月1日、明治炭業(株)の系列下に入る。1967（昭和42）年3月31日、閉山。閉山反対の気運の中、当時豊里小学校6年生の香河菊枝さんが佐藤栄作首相宛てに出した「炭鉱をつぶさないで」という手紙に対して、1966（昭和41）年8月18日、佐藤首相から「炭鉱は決して見捨てない」との返事があったことが世間の耳目を集めた。しかし、その半年後に閉山を迎えた。</p>	
参考情報	<p>『赤平市史 下巻』（赤平市史編纂委員会編,2001）、『豊里炭鉱思い出日記』（DVD）、『豊里炭鉱労働者の記録』（1968）</p>	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(9) 三笠市

三笠市は北海道の近代炭鉱と鉄道発祥の地です。1868（明治元）年に、幌内で「石炭」が発見され、1879（明治12）年に官営の炭鉱として幌内炭鉱が設置されました。1882（明治15）年、北海道開拓と炭鉱での労働力の確保を目的として空知集治監（現在の刑務所）が市来知（いちきしり）に設置され、同年には幌内炭鉱から掘り出された石炭を輸送するための鉄道が幌内と手宮（小樽）間に北海道で最初に開通しました。

それから幾春別炭鉱、奔別炭鉱など多くの炭鉱が開鉱し、昭和になると機械化が進み大規模に石炭が採掘されるようになりました。それに伴って三笠の人口は徐々に増加し、1959（昭和34）年には、62,781人に達しました。しかし、エネルギー政策の転換の影響や炭鉱での事故なども重なり、幾春別炭鉱は1957（昭和32）年、奔別炭鉱は1971（昭和46）年、幌内炭鉱は1989（平成元）年に閉山しました。

残された炭鉱遺産を活用するため1987（昭和62）年に三笠鉄道記念館がオープン、1990（平成2）年には幌内駅舎などを残したクロフォード公園もできました。また、これらの貴重な炭鉱遺産を大地の遺産である石炭によるストーリーでつなげ活用する目的で、2013（平成25）年に三笠ジオパークに認定されました。ジオパークを軸として炭鉱遺産を活用し、市内外の方に楽しんでいただける炭鉄港の歴史を踏まえたツアーなどを実施し、まちづくりを進めています。

No.161 北炭幌内鉱業所長宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市本町 221-2	
建築年等	昭和 30（1955）年	
構造	木造モルタル	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1955（昭和 30）年に、北炭幌内鉱業所長住宅として建設された役員社宅で、木造平屋建て 218 m²。建屋西側には公宅としての機能（取り次ぎの間、客用トイレ、座敷など）、東側にはプライベートな居住機能（寝室、子ども部屋、女中部屋、台所、風呂、家族用トイレ、裏玄関）が配置されている。建設当時としては珍しい集中暖房や水洗トイレ、各室から台所にいる使用人を呼び出すブザー設備、酒などを貯蔵する広い地下室など、設備の充実が特徴的である。1992（平成 4）年に三笠市文化人招致事業で移住した芸術家が住み、ギャラリーを開設して今日に至っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	居住者がいるため確認のうえ見学	
その他特記事項		

No.162 空知集治監典獄官舎レンガ煙突

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市本郷町 705-23	
建築年等	明治 23（1890）年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>1892（明治 15）年に設置された空知集治監の典獄（所長）官舎のレンガ煙突。1890（明治 23）年に典獄官舎が新築された際に建設されたもの。レンガは空知集治監で自製したもの。なお幌内炭鉱では、官営時代の 1883（明治 16）年から北炭時代の 1894（明治 27）年まで、空知集治監の囚人の使役による採炭がおこなわれていた。集治監は、1901（明治 34）年に廃監となった。</p>	
参考情報	三笠市炭鉱遺産学術調査（非公開）、炭鉱の記憶一覧（H12）等	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11月上旬から4月頃まで）	
その他特記事項		

No.163 北炭幌内炭鉱音羽坑

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内本沢町	
建築年等	明治 22（1889）年	
構造	コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	無主物	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1879（明治 12）年、幌内炭鉱で最初に開削された坑道。延長約 700m で、当初は「大坑道」と称する採炭坑道であったが、1896（明治 29）年以降は排気坑に転用。大正～昭和初期になって稼行区域が次第に北側へ深部化するにつれて無能化した。坑口は密閉されないまま存置されていた。1989（平成元）年の閉山の際にコンクリートブロックで密閉工事が行われた。</p> <p>現存する坑門には開鉱当初の面影はなく、歴史的な正統性や意匠性での価値は高くないが、北海道での近代炭鉱の端緒となった場所としての価値は高い。坑口手前には、明治後期に建設されたと推定されるレンガ造の「安全灯庫」がある。屋根は崩落しているものの、音羽坑の歴史性を示唆するものとして貴重である。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』『三笠市史』幌内炭鉱坑内図	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで）	
その他特記事項		

No.164 北炭新幌内炭鉱ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市幌内中央町、幌内月光町	
建築年等	昭和 45（1970）年代～平成元（1989）年	
構造	石炭又は亜炭に係る捨石が集積されてできた山	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	三笠市（一部民有）	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>選炭工程で除去された岩石（ズリ）を堆積した人工の山(九州ではボタ山と呼称)。ズリには微粉炭が混入しており、特に幌内鉱は石炭熱量が高く着火性に優れていることから、太陽光で 10～15 年間自然発火していたが、現在は燃焼が終息し徐々に植物が繁茂しつつある。燃焼で赤変したズリを赤盤・赤研と言い、古くから路盤材として活用されてきた。ズリ山は、堆積→発火→採掘を繰り返し 2005 年頃まで採掘が行われていたため、改変を繰り返しながら移動してきた。</p> <p>現在は 1970 年代以降に築かれた 4 つのズリ山が残っており、一番西側にある最後に築かれたものが最大で標高 230m、その他は 170～210m の標高がある。谷をせき止めて築くことから、ズリ山の裏側には一種のせき止め湖（通称「ターザン沼」）ができる。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	一般人の見学不可	

No.165 北炭新幌内炭鉱選炭機

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内本沢町	
建築年等	明治 12（1879）年～昭和 30（1950）年 代頃	
構造	残存物は主として鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	無主物	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1879（明治 12）年の開坑から 1989（平成元）年の閉山まで、一貫して選炭施設があった場所には、現在も遺構が残っている。選炭機は、出炭量の増加によって次第に規模を拡大してきたが、1952（昭和 27）年の常磐坑ベルト斜坑転換、1964（昭和 39）年の幌内・新幌内砦の揚炭一本化は、施設拡大の大きな転機となった。円形のシクナー（沈降濃縮装置：4 基、直径 14.7m～30.0m）、原炭ポケット（容量 1,000t）、貯炭ベルト分岐栈橋コンクリート基礎、選炭工場建屋基礎（重選機室付近）などが、主としてコンクリート構造物が残っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	<p>冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで） ※一部整備を行っていないことから立入禁止</p>	
その他特記事項		

No.166 北炭幌内炭鉱常磐坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内本沢町	
建築年等	昭和 16（1941）年開坑	
構造	コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	無主物	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1941（昭和 16）年に開削された常磐坑は、1950（昭和 25）年に採炭を中止してベルト斜坑転換に着手し、1952（昭和 27）年に完成した。全長 3,220m・揚高 690m の 2 段折り返しベルト運搬となり、養老・布引の両坑の原炭を集約揚炭され、運搬能力は毎時 540t に向上した。その後、採炭切羽の深部化に伴いベルト斜坑は逐次延長され、1984 年の主要ベルト総延長は 9,000m に達した。</p> <p>坑口に向かい左側がベルト斜坑（本卸）、右側が人車斜坑（連卸）で、閉山まで稼働した。本・連卸の間に坑口神社の建屋（木造）と鳥居（鉄管製）が、連卸で人員や機材輸送のための 300 馬力斜坑捲上機を載せていた台座（1941 年建造=推定）が幌内川の崖面に突き出すように残っている。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』 「幌内炭鉱概況」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで）	
その他特記事項		

No.167 北炭幌内炭鉱布引排気風洞

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内本沢町	
建築年等	昭和 42（1967）年頃	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	実態なし（底地は道有地）	
管理者	（なし）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>坑内の排気を大気拡散するための風洞で、先端部に扇風機が設置されていた。1967 年に入気の幌内立坑が完成時に、通気経路変更に伴い風洞が整備されたと推察される。当初は旧新幌内砦の第二風井（出力 600KW 扇風機）と対偶式通気の排気を、1974 年からは幌内排気立坑（出力 1,600KW 扇風機）の中央式通気を補完する拠点であった。</p> <p>布引排気立坑と最奥部の 4 片添風洞（4 号風洞：海拔 127m にある坑口から SL-164m の坑底まで続く斜坑、平行して 4 片添風洞のメンテナンスのためにもう一本の斜坑が存在）から地上に出て、コンクリート造の風洞トンネルを通り、その末端部に設置されていた 600KW 扇風機（軸流直結形式、風量 9,000 m³/分）により放出された。1983（昭和 58）年に 5 片（SL-860m）以浅の坑道が廃棄されたのを契機に、幌内立坑・幌内排気立坑の中央通気式に集約され役割を終えた。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』『三笠市史』『幌内炭鉱概況』幌内炭鉱坑内図	
アピールポイント	近くには近代化産業遺産群に認定されている幌内炭鉱布引立坑槽跡がある。	
権利/安全上の注意	道有林のため原則立入禁止。また、ヒグマの生息地のため対策が必要。	
その他特記事項		

No.168 幌内変電所

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内本沢町	
建築年等	大正8（1919）年	
構造	鉄筋コンクリート造（構造柱・陸屋根） およびレンガ造（壁面）	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	所有者不明 底地は道有地（保安林）	
管理者	民間（無主物と見なし利用）	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>北炭の夕張～歌志内間約 100 km の自家発送電線網の中間に位置した変電所で、1989（平成元）年の幌内炭鉱閉山まで稼働し、夕張から送られた電力を 3,600V に変圧していた。1919（大正8）年に 22,000V で夕張変電所～幌内変電所間が開通、1926（大正15）年に幌内変電所～幾春別変電所、幌内変電所～神威変電所間が延長された。1929（昭和4）年に 44,000V へ昇圧、1950（昭和25）年には 66,000V に昇圧された。</p> <p>変電所建屋は2階建てで延床面積 188 m²。長距離送電黎明期の数少ない施設として、特に2階の鍵電盤（東京芝浦電気製）や、電力線搬送電話装置（大井電気製）が貴重である。散宿所（電力線保守担当の鉱員が家族ぐるみ駐在、他に美流渡・美唄・砂川）も置かれていた。</p>	
参考情報	『北炭70年史技術史稿本－機電編・電力編』『幌内炭鉱概況』	
アピールポイント	年に数回施設内の一般開放あり。	
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11月上旬から5月頃まで）	
その他特記事項		

No.169 幌内砒水道施設（奔幌内水源地ダム）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幌内奔幌内町	
建築年等	昭和 10（1935）～昭和 19（1944）年頃	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭が設置・管理していた幌内砒簡易水道の水源確保のため、奔幌内左の沢に 1935～1944 年頃（昭和 10 年代）に建設されたダム。1916（大正 5）年に築造された本沢水源地築堤（幌内本沢町）に次ぐもので、1947（昭和 22）年に建設されたダム式の七十号の沢水源地（幌内北星町）とともに水源を担った。本沢・奔幌内水源地の水は中央浄水場（幌内中央町）、七十号の沢水源地の水は直下の同浄水場で処理され炭住へ上水を供給していた。桂沢ダムの完成によって豊富な水源を得た三笠町では、1955（昭和 30）年から上水道事業に着手し、1964（昭和 39）年に全施設を三笠市に譲渡し、炭鉱水道としての水源地の役割を終えた。</p>	
参考情報	『三笠市史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	道有林のため原則立入禁止。また、ヒグマの生息地のため対策が必要。	
その他特記事項	一般人の見学は困難	

No.170 招魂碑、哀悼之碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市幌内町1丁目	
建築年等	明治36（1903）年、明治39（1906）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	無主物（地元住民が管理）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>「招魂碑」は、1903（明治36）年、飯場主や請負関係者などが発起人や世話人となり、幌内神社の境内に建立された、1920（大正9）年に現位置に移設された。北炭慰霊碑である「哀悼之碑」は、北炭が1906（明治39）年に幌内神社境内に建立し、1948（昭和23）年に招魂碑と同様に移設した。</p> <p>裏面にある碑文は、建立当時の北海道炭礦汽船(株)専務取締役であった井上角五郎の選によるもので貴重。労働者が建立した碑が、会社が建立した碑より高いところにおかれていることに特異性がある。幌内炭鉱閉山後は草の中に埋もれた存在であったが、幌内歩こう会（2001年から開始）でクローズアップされたことを契機に、地元住民の手によって2007年に改修工事が行われ整備された。</p>	
参考情報	『三笠市史』、三笠の石碑（三笠市立博物館：1989）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.171 幌内線線路

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市本町、幌内住吉町、幌内北星町、幌内金谷町、幌内町 3 丁目、幌内町 2 丁目	
建築年等	明治 15（1882）年	
構造	レール＝鉄製 枕木＝木製	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>国鉄幌内線三笠駅～幌内駅（延長 2.7 km）は、1882（明治 15）年に開通した幌内鉄道開通当時の路線を継承したもので、J41 の廃止後も、ほぼ全線にわたり線路が残っている。三笠駅を出発後すぐに 25%急勾配の S 字カーブとなり、旧幌内住吉駅付近の短区間でやや緩勾配となるものの、幌内駅まで 25%が連続するという運転の難しい区間であった。幌内駅場内信号機手前の直線区間は、沿線にあった小池商店から「小池の坂」と呼ばれ、最後の難関区間であった。線路の途中には、三笠駅場内信号中継信号機や、幌内住吉駅ホームの一部が残っている。2010（平成 22）年からは、トロッコ（内燃機関駆動）が運行されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	現在もトロッコ鉄道のコースになっていることから線路内へは立入禁止。	
その他特記事項		

No.172 三笠鉄道村（三笠鉄道記念館）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	展示施設	
所在地	三笠市幌内町 2 丁目	
建築年等	昭和 62（1987）年	
構造	鉄筋コンクリート造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	可（冬期間除く）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市（指定管理者：三笠振興開発株式会社）	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群	
解説文	<p>1987 年に開設された国鉄幌内線幌内駅構内を活用した鉄道博物館。クロフォード公園の「三笠ゾーン」（幌内太駅→三笠駅）とともに、「幌内ゾーン」として三笠鉄道村を構成している。小樽市総合博物館本館（小樽市手宮 1 丁目、旧小樽交通記念館）とともに、官営幌内鉄道の両端に鉄道博物館が置かれている形となっている。</p> <p>記念館内には、幌内鉄道の開通から未来の鉄道までを、実物・史料・模型などで展示している。機関車庫内に機関車 4 両、屋外に機関車 5 両・客車気動車 10 両、貨車事業用車 13 両が展示されている。蒸気機関車と貨車 2 両の動態展示も行われていて、国内で唯一、蒸気機関車の実車運転体験ができる。</p>	
参考情報	三笠鉄道村 Web	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	10 月中旬から 4 月中旬まで冬季閉館	
その他特記事項		

No.173 北炭新幌内砦坑口

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市唐松緑町	
建築年等	大正 14（1925）年	
構造	鉄筋コンクリート造、一部擁壁はレンガ造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>北炭新幌内砦は、1925（大正 14）年に日支炭鉱汽船(株)により試錐開始、1931（昭和 6）年に昭和炭業(株)に引き継がれた。三度のガス爆発にあいながら 1934（昭和 9）年に出炭を開始、その後 4 年で年産 45 万 t の大炭鉱に成長したが、資金や鉱区の制約から 1941（昭和 16）年に北炭に吸収合併された。昭和炭業時代の坑口（本卸・連卸）や、斜坑巻原動機が置かれていた基礎が残っている。</p> <p>この坑口は、1967（昭和 42）年の幌内砦との統合まで新幌内砦の主力坑口だった。幌新統合後は、北炭系列の北斗興業(株)が北炭から鉱区を譲り受けて新三笠炭鉱として二次利用していたため、1973（昭和 48）年閉山にあたって密閉坑口には「新三笠炭鉱」と表記された。</p>	
参考情報	『北炭 50 年史』『石炭政策史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで） 敷地外からの見学のみ可能	
その他特記事項		

No.174 北炭新幌内砒選炭機

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市唐松町1丁目	
建築年等	大正14（1925）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>新幌内砒選炭機のホッパー部分のコンクリート土台・擁壁が幾春別川河岸段丘の崖面に残っている。1934（昭和9）年に出炭開始した昭和鉱業時代から使用されていたもので、1964（昭和39）年に幌新連絡坑道で新幌内・幌内の両砒が連結され揚炭系統が幌内砒に一本化されるまで稼働、その後は新三笠炭鉱（北炭系租鉱）が1967（昭和42）～1973（昭和48）年まで再利用していたと思われる。</p> <p>唐松駅からは、スイッチバックによって引き込まれた専用線は、ホッパーを超えて東側に延び、インクラインによって機材や木材を坑口のある段丘上に搬入したルートの際跡も残っている。また付近には、新幌内変電所建屋などが残っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	敷地内立入禁止	
その他特記事項	一般人の見学は困難	

No.175 北炭幌内炭鉱立坑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市唐松青山町	
建築年等	昭和 42（1967）年	
構造	立坑＝鉄骨造、坑口＝コンクリート造（密閉）	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	民間企業	
管理者	（なし）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>内径 6.5m、捲上機出力 700kw、捲上速度秒速 10m、立坑櫓高さ 39.2m、ケージは 2 段デッキ定員 50 名。入気立坑。建設当初は SL-720m だったが、1974 年に SL-860m、1982 年には SL-1,000m まで追削された。坑口は SL+55m で、最深連接部から坑底までのサンブ部 25m があり立坑深度は最終的に 1,080m。深部化対応と幌内・新幌内両砦の統合による能率向上のため、戦後に一時掘削され中止となった三笠山立坑の位置に新たな立坑を建設し、1967（昭和 42）年から稼働を開始した。</p> <p>1989（平成元）年に閉山し坑口は密閉されたが、立坑西側に隣接して捲上機と建屋が 2004（平成 16）年まで残っていた。立坑櫓後方には、立坑で搬出された岩石（主として掘進ズリ）によるズリ山も残っている。現存する日本最深の立坑。</p>	
参考情報	「ほくたん」	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	民有地のため立入禁止	
その他特記事項		

No.176 唐松駅舎

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市唐松町1丁目	
建築年等	昭和4（1929）年	
構造	木造二階建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ（敷地内は要許可）	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	民間（地元住民有志）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>唐松駅は、1929（昭和4）年に住友唐松炭鉱の石炭を搬出するための貨物駅として開駅、1930（昭和5）年に一般運輸営業を開始したが、当時の駅舎建築面積は66㎡（うち待合室は30㎡）であった。1934（昭和9）年の新幌内砒出炭開始によって、貨物や駅勢圏住民が急増したことから、1937（昭和12）年に駅舎増築を請願し、1941（昭和16）年に増築が実現した。</p> <p>その後、1957（昭和32）年に、さらに増築された。ギャンブルル屋根（二面切妻の二段勾配屋根）2棟（待合室部分と駅事務室部分）が直交し組み合わせられた独特な形態が特徴的である。駅舎に隣接してホームと便所、構内跡地には住友唐松炭鉱のホッパーの基礎であったコンクリートが残っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11月上旬から5月頃まで）	
その他特記事項		

No.177 住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市奔別町	
建築年等	昭和 35（1960）年	
構造	立坑＝鉄骨造、巻室建屋＝鉄骨コンクリート造、坑口＝コンクリート造（密閉）	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	民間企業	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>内径 6.4m、捲上深度 650m、掘削深度 735m、立坑櫓高さ 50.52m。原炭をバケット輸送するためのスキップ（2,700kw：ジーマンス社製、ケーベ式二本索方式、有効荷量 10t、捲上速度毎秒 12m、運搬能力毎時 430t）と、人員・炭車輸送用のケージ（1,540kw：富士電機製、両懸ケーベ式二本索四段ゲージ乗員 64 名、有効荷量 12 トン、昇降速度毎秒 12m、人員=1,800 人/時、石炭=246t/時）の各々 1 対ずつ。一つの立坑シャフトの中に、スキップとケージが一對ずつ入る特異な形式で、巻室は東西に左右対称に配置され、スキップは立坑東側、ケージは立坑西側となっていた。1960（昭和 35）年に深部区域を総合開発するため、ドイツ GHH 社から技術導入して三菱造船(株)により製造した立坑が建設され、弥生鉱との統合や、重装備機械採炭の導入によって出炭量は増大した。立坑開発は急激な深部移行をもたらし、坑内労働条件の悪化で従業員が続々と退職する事態となった。これを分社化によって乗り切ろうとしたが、僚山の住友歌志内鉱で大規模災害が発生し、住友赤平鉱への集中化する経営判断から、立坑開発から 11 年後の 1971（昭和 46）年に閉山した。密閉作業時に爆発事故が発生した（死者 5 名）。</p>	
参考情報	『三笠市史』『新三笠市史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	ツアー・イベント時以外は立入禁止	
その他特記事項		

No.178 殉職者之靈碑

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市奔別川端町	
建築年等	昭和 15（1940）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	民間企業	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	1940(昭和 15)年に住友石炭鉱業(株)によって建立され、その後 1956（昭和 31）年に唐松炭鉱の殉職者も合祀された。碑の右側には、1951(昭和 26)年に戦没者を追悼するため三笠町遺族会奔別支部が建立した「顕徳碑」がある。	
参考情報	『新三笠市史』、三笠の石碑（三笠市立博物館：1989）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.179 森林鉄道跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	 
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市幾春別錦町 1 丁目、幾春別山手町、西桂沢	
建築年等	昭和 13（1938）年	
構造	アスファルト舗装	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	底地は河川用地	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>森林鉄道は、桂沢地区で切り出された木材を搬出するため 1938（昭和 13）年に敷設され、ダムが建設される 1956（昭和 31）年まで運行していた。廃止後の軌道敷約 1.2 km を利用して、動植物や地層の観察ができる野外博物館として整備された。ジオパーク指定後は、解説版も整備されている。</p> <p>主な見学サイトは、下流から順に、森林鉄道（橋台）、幾春別層、錦立坑、錦坑口、石炭層、狸掘り跡、ひとまたぎ 5 千万年（ひとまたぎ覆道）、神泉隧道、桂沢神居古潭などがある。地形地質だけではなく、石炭と林業で栄えた幾春別地区の歴史を現地に残る様々な産業遺産を通して理解することが出来る貴重な学習エリアとなっている。</p>	
参考情報	三笠ジオパーク推進協議会 Web 三笠市立博物館 Web	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで）	
その他特記事項		

No.180 三笠市立博物館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	展示施設	
所在地	三笠市幾春別錦町1丁目212-1	
建築年等	昭和54(1979)年	
構造	鉄筋コンクリート造2階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>北海道から発見されたアンモナイトを中心にした約1,000点の化石展示で有名な博物館であるが、三笠市内にあった炭鉱の史料も展示している。展示室5「炭鉱と人々の暮らし」では、昭和の終わり頃に炭鉱で使用されていた機械・道具類を中心に、「友子」の免状(証紙)、明治期の炭鉱住宅の復元家屋や模型など。展示室4「北海道の開拓と囚人」では、集治監があった当時の建物配置を示したジオラマ、図面、建物に使われていた鬼瓦の一部とレンガ、三笠市文化財となっている初代典獄渡辺惟精日記など。</p>	
参考情報	三笠市立博物館 Web	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	年末年始、月曜休館	
その他特記事項		

No.181 住友弥生炭鉱坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市弥生橋町	
建築年等	昭和 10（1935）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	三笠市	
管理者	無主物	
文化財登録/指定		
解説文	<p>弥生鉱は、1906（明治 39）年の吉備炭鉱をスタートに個人経営による操業が続いていたが、1920（大正 9）年に東邦炭礦(株)の経営に移ると規模を拡大した。現在残っているコンクリートの遺構は、1935（昭和 10）年に開削された本坑・人道斜坑の巻室の台座であると思われる。</p> <p>捲上機は、本卸に 600 馬力（450kw）、副卸に 500 馬力（370kw）が設置され、地上と SL-175m が結ばれ、年産 50 万 t 体制を目指す環境が整えられた。1945（昭和 20）年に住友鉱業(株)に併合され、1960（昭和 35）年に奔別立坑が完成以後は、採掘区域西翼への通気・運搬を担う経路として 1971（昭和 46）年の閉山まで機能は維持されていた。</p>	
参考情報	『三笠市史』『新三笠市史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	立入禁止。道路からの見学のみ	
その他特記事項		

No.182 狸掘り跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市幾春別山手町	
建築年等	明治 18（1885）年頃	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	底地は河川用地	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>森林鉄道の廃線跡を活用した野外博物館の順路途中には、炭層（幾春別層 1～4 番層）が立層で露出している。その一角に、1885（明治 18）年、幾春別炭鉱で採炭が始まったころに用いられていた「たぬき掘り」という原始的な採掘方法の現場跡が残っている。開坑時に採掘された説と、戦後に形成された説の双方があり、詳細は明らかになっていない。幾春別鉱の閉山以降も、近隣住民が自然発生的に石炭を採掘する例が多々発生し、閉山後に幾春別鉱の残存資産を引き継いだ新幌内砦職員が禁柵を張り時々巡回していたことからすると、後者の説が有力ではないかと思われる。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11月上旬から5月頃まで）	
その他特記事項		

No.183 北炭幾春別炭鉱錦坑口

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	炭鉱		
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	三笠市西桂沢		
建築年等	大正8（1919）年		
構造	レンガ造		
現存状況	有		
見学可否	可		
現地看板	有		
刊行物掲載	有		
所有者	底地は河川敷地		
管理者	三笠市		
文化財登録/指定	近代化産業遺産群 2013選奨土木遺産		
解説文	<p>錦立坑へのアプローチのため掘削された水平坑の坑口。通常、立坑は高い櫓を組み地表面にアプローチ部を設けるが、錦立坑は地形の制約から幾春別川左岸河岸段丘上の SL+105.6m に坑口を建設、石炭搬出先の選炭機は幾春別川右岸氾濫原の SL+80m 付近にあるため幾春別川左岸の崖を利用して、SL+87.6m で立坑に連絡する水平坑を掘削し、地中にアプローチ部を設けた。スキップ巻で揚炭された原炭は地中でスキップから降ろされ、錦坑から幾春別川を横断する橋梁を経て選炭機へ運ばれた。地中にアプローチ部を持つという珍しい形態の立坑を証する貴重な手がかりである。坑門は建設当時のままのレンガ巻で、ポータル坑名表示もオリジナルであり、真実性・完全性ともに具備している。</p>		
参考情報	『北炭 50 年史』『北炭 70 年史』『幌内鉱業所概況』		
アピールポイント			
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで）		
その他特記事項			

No.184 北炭幾春別炭鉱資材倉庫

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幾春別錦町1丁目209	
建築年等		
構造	レンガ造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	(実態なし)	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	幾春別駅から伸びてきた専用線の脇に建設された倉庫。明治期のものと思われるが、建設経緯や利用状況は不明。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	道路からの見学のみ	
その他特記事項		

No.185 北炭幾春別炭鉱錦立坑櫓

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幾春別山手町	
建築年等	大正 8（1919）年	
構造	立坑＝鉄骨造、巻室建屋＝鉄筋コンクリート造（構造柱・陸屋根）およびレンガ造（壁面）平屋建、坑口＝コンクリート造（密閉）	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	実態なし（底地は道有地）	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定	近代化産業遺産群 2013選奨土木遺産	
解説文	<p>1885（明治 18）年に開鉱した北炭幾春別炭鉱は、坑道の深部化により坑口を集約し効率化を図るため 1933（大正 8）年に錦立坑を掘削した。立坑深度 214m、内径 4.9m、立坑櫓高さ約 10m で、現存する立坑としては道内最古。1953（昭和 28）年に上流の桂沢ダム建設を機に保坑となり、1954（昭和 29）年には自然発火で坑道水封 1957（昭和 32）年に正式に閉山した。</p> <p>立坑と同時に建設された巻室には、捲上機は 300 馬力ケーベ式捲上機が設置されていた。建設当初は自社の幾春別発電所（1916 年稼働開始）から電力供給を受けたが、1926（大正 15）年に幌内～幾春別変電所間の高圧送電線開通により受電に切り替えられ、巻室に隣接して幾春別変電所が建設された。巻室・変電所とも、同時期に建設された幌内変電所、布引立坑巻室と同様の構造・意匠である。</p>	
参考情報	『北炭 50 年史』『北炭 70 年史』	
アピールポイント	現存する立坑櫓では道内最古	
権利/安全上の注意	冬季閉鎖（11 月上旬から 5 月頃まで）	
その他特記事項		

No.186 住友弥生炭鉱住宅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市弥生柳町、三笠市弥生花園町	
建築年等	昭和 35（1960）年頃	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	民間企業	
管理者	三笠市（株）三笠振興公社	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1960 年代に建築された鉱員住宅で、1 棟 6 戸建て三角屋根の棟続きの炭住。弥生柳町に 6 棟、弥生花園町に 3 棟が残っている。間取りは、1 階が 6 畳・6 畳・台所・トイレ、2 階が 7.5 畳。風呂はついていない。炭鉱の三交代勤務で、三番方が日中に安眠できるよう、2 階に部屋が設けられている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	<p>道路からの見学のみ 居住者がいるため、見学は注意。</p>	
その他特記事項		

No.187 三笠市民会館緞帳

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	三笠市萱野	
建築年等	昭和 44（1969）年	
構造	布製	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	民間	
管理者	民間	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1969（昭和 44）年に三笠市民会館が建設された際に、大ホールの緞帳として制作された。縦 6 m×横 15m、重さ約 300 kg。上手側の下部には「北海道炭礦汽船株式会社幌内鉱業所」、下手側の下部には「住友石炭鉱業株式会社奔別礦業所」という字が社章とともに織り込まれ、両社のスポンサーで制作されたと思われる。</p> <p>立坑や炭鉱マンが躍動的に入れ込まれたデザインは、三笠美術協会によるもので、開館の 8 カ月前に描かれた原画が市民会館倉庫から発見されている。2015（平成 27）年に新緞帳に取替のため廃棄される予定であったが、市内に住む社員に公募により無償譲され、三笠市萱野の旧農協倉庫を活用したライブハウスの壁面で保存されている。</p>	
参考情報	北海道新聞記事 毎日新聞記事	
アピールポイント		
権利/安全上の注意	個人所有のため、閲覧は連絡が必要	
その他特記事項		

No.188 萱野駅駅舎

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市萱野	
建築年等	大正2（1913）年	
構造	木造平屋建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	民間	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1913（大正2）年に地元住民の請願によって設置された萱野駅の駅舎で、開駅同時に建設されたもの。建築面積 82 m²。三笠～岩見沢間で列車交換できる唯一の駅であり、周辺は農業地帯であるため農作物の発送や農業資材の到着で役割を担った。また田植えや収穫期には、出面（アルバイト）にきた市内炭鉱マンの妻たちで賑わいを見せた。</p> <p>1987（昭和 62）年に幌内線が廃止された後は、三笠市の所有となり閉鎖されていたが、地域住民が屋根の雪下ろしなど保全活動が続けてきた。2001 年に萱野連合町内会が資金拠出、地元建設会社が資材・労力を提供して、駅舎やホームなどを整備し、以降、ライダーハウスとして開放されている。</p>	
参考情報	北海道新聞記事	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.189 三笠市役所庁舎

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	三笠市幸町 2-2	
建築年等	昭和 31（1956）年	
構造	鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	三笠市	
管理者	三笠市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1954（昭和 29）年着工、1956（昭和 31）年竣工の市役所庁舎で、Y 字型の形状をした鉄筋コンクリート造・2 階建・延床面積 2,585 m²。中心部には展望室塔屋が、各頂点には議場（現存）・消防署（移転）が配置された。</p> <p>東京厚生年金病院（設計=山田守、1953 年竣工）と形状が似ており、建設場所が放射状街路の特徴を有する区画整理事業で整備された敷地であること、市制施行を目前に控えていたことなどから、設計担当の市建築主事が意欲的に取り組んだと見られる。その後、造築され、現在は 3 階建・延床面積 4,418 m²となっている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意	土・日・祝日閉庁	
その他特記事項		

No.190 友子の墓（弥生墓地）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	三笠市弥生桜木町 53-18	
建築年等	明治 36（1903）年～昭和 21（1946）年	
構造	石造	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	民間（墓地管理は三笠市）	
管理者	民間	
文化財登録/指定		
解説文	<p>三笠市にあった炭鉱では、明治から昭和初期にかけて、炭鉱労働者の自治的な共済団体となる「友子」の制度があった。弥生墓地は、明治中期に幾春別墓地として開設され、周辺にあった北炭幾春別炭鉱、住友奔別炭鉱など、地域住民の集合墓地となっていた。この墓地の特色は、多くの友子の墓が遺され、時代別に変遷する友子の仏参の意識変化を見ることが出来る。友子の墓は、北海道における炭鉱の開発、ひいては日本の工業化を担った友子制度の象徴であり、地域の文化歴史遺産として位置づけされる。</p>	
参考情報	『三笠市史』、『友子の墓ガイドマップ』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	現在も使用されている墓のため、見学時は迷惑のかからぬよう注意が必要。	

(10) 歌志内市

明治時代初期に空知地方の地質調査を行ったライマンとその助手の記録によると、オタウシナイ（現在の歌志内）周辺の石炭は、質・量ともに最良のものではないかと明治政府に報告されています。

1890（明治23）年に北海道炭礦鉄道空知採炭所が設置され、採炭が開始されると、翌1891（明治24）年には、幌内鉄道に次ぐ道内2番目の鉄道（後の歌志内線）が開通しました。

石炭の採掘が活況を迎えるにつれ、まちの規模も拡大を続け、1948（昭和23）年のピーク時には46,000人を超える人口を記録しました。1953（昭和28）年には、旧住友上歌志内鉱の職員厚生施設として旧上歌会館（悲別ロマン座）がオープンし、一流歌手のショーなどが催されるなど、多くの市民で賑わい、文化・芸能の最先端をいくまちとなりました。

しかし、石炭産業の衰退とともに、採炭量・人口ともに減少に転じ、1995（平成7）年に閉山した空知炭鉱は、空知において最後まで採炭を続けた炭鉱となりました。

また、歌志内市の郷土料理として知られる「なんこ料理」は、代表的な炭鉱めしのひとつであり、馬の腸を味噌で煮込んだ料理です。秋田県の鉱山労働者の食文化であった馬肉が、入植者によって歌志内に伝えられ、馬肉料理から馬腸料理へと形を変えていったと考えられています。

No.191 旧空知炭鉱倶楽部（こもれびの杜記念館）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	歌志内市字本町 74-4	
建築年等	明治 30（1897）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	非公開	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	歌志内市	
管理者	歌志内市教育委員会	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1897（明治 30）年に北炭の社員合宿所として設置され、1933（昭和 8）年、1941（昭和 16）年と増改築が繰り返され、1949（昭和 24）年には別館が建設された。同施設は、幌内・夕張・歌志内の三カ所が建設された（幌内は現存しない）。1954（昭和 29）年には社員合宿所を分離・改造し、接待専用クラブとなり、炭鉱本社幹部、来賓等限られた人達の接待、会食、宿泊等の迎賓館として閉山まで使用された。皇室関係者や著名人も訪れた由緒ある建物。</p> <p>歌志内市が施設・用地を買収し、1998（平成 10）年に改修・原形復旧し、旧空知炭鉱倶楽部「こもれびの杜記念館」として開館した。現在施設老朽化のため非公開。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.192 ハカ大正館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	歌志内市字本町 77	
建築年等	大正 7 (1918) 年	
構造	レンガ造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(内部は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	このレンガの建物は、旧大島商店（酒屋）の倉庫として使用されていた。ハカの屋号は、大正時代から続く先代の森田商店から同店に受け継がれてきたが、人口の減少とともに地域の購買力が低下したため、平成に入ってから閉店していた。1996（平成 8）年 11 月、地元の画家が倉庫を買収し、一部を増築して、掛時計をはじめ生活骨董を多数収蔵する大正館という名称のギャラリーをオープンさせ、現在に至っている。地元に残る数少ない、大正時代のレンガ造建物。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.193 郷土館「ゆめつむぎ」

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	展示施設	
所在地	歌志内市字本町 1027-1	
建築年等	平成 9 (1997) 年	
構造	鉄筋コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	歌志内市	
管理者	歌志内市教育委員会	
文化財登録/指定		
解説文	歌志内の石炭の歴史を中心とした資料が収蔵され一般に公開されている。炭鉱シアターの「炭鉱の生活」は、昭和の炭鉱の暮らしを伝える映像展示にリニューアル(令和5年度設置)。廃線直前の歌志内線の車窓風景が見られる映像展示「よみがえる歌志内線」(令和6年度設置)。炭鉱関係の資料が充実し、昭和期の生活用具が多数展示されており、「炭鉱の記憶」を伝える郷土資料館となっている。	
参考情報	歌志内市郷土館ホームページ http://www.city-utashinai.sakura.ne.jp/kyoudokan	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	ホームページでは、デジタルアーカイブとして、昭和 30~40 年代を中心に、市内各地区・まつり・学校・鉄道など、炭鉱時代の写真・映像を多数公開している。	

No.194 空知炭礦ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	歌志内市字東光	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ(敷地内は要許可)	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	空知炭礦（株）	
管理者	空知炭礦（株）	
文化財登録/指定		
解説文	かつてはズリ山の高さが炭鉱の隆盛を示すバロメーターといわれ、本町市街からそびえて見えていた。現在、赤ズリ（路盤材等に活用）を搬出していることもあり、往時より低くなり、形状も変化している。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.195 神威変電所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	歌志内市字神威	
建築年等	大正 13（1924）年頃	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	不可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	空知炭礦（株）	
管理者	空知炭礦（株）	
文化財登録/指定		
解説文	<p>炭鉱閉山まで使用されていたこの変電所は、レンガ造りの建物部分のみが残っている。同変電所は大正時代に北炭が大型発電所を建設（1924（大正 13）年・滝ノ上水力発電所、1926（大正 15）年・清水沢火力発電所）し、系列の炭鉱へ送電するため、高圧送電線網の整備（1924（大正 13）年に夕張～歌志内間約 100km の送電線網が完成）により建設された。</p>	
参考情報	北炭七十年史（S33）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.196 神威史跡広場

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	歌志内市字神威神楽岡	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	歌志内市歴史資料収集・保存会	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1992（平成4）年11月3日に、歌志内歴史資料収集・保存会が中心となり市内で散逸していた石碑を集約し、史跡広場としてオープンした。主な石碑として、「御大禮記念」碑（1915(大正4)年11月)・「新歌志内礦之碑」(1953(昭和28)年8月)、「馬魂碑」(1924(大正13)年甲子年8月)、「安全の塔」(1936(昭和11)年9月)がある。</p>	
参考情報	石碑石仏を訪ねて 四訂版（H6）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.197 住友歌志内砒ズリ山

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	歌志内市中村	
建築年等	昭和 5（1930）年頃	
構造		
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	住友石炭鉱業（株）	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1890（明治 23）年に試掘後、中村弥六経営の中村炭砒から奔別炭砒、山下鉱業等を経て、1930（昭和 5）年、住友炭砒株式会社歌志内砒となった炭砒から排出されたズリ（廃石）を集積してできたズリ山。同炭砒が 1971（昭和 46）年に閉山したあと、野草、灌木が生い茂るようになり、山頂も丸くなったが、炭砒まちのシンボルとして当時の姿を今に伝えている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.198 住友密閉坑口

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	歌志内市中村	
建築年等	明治 38（1905）年頃	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	歌志内市	
管理者	歌志内市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>1971（昭和 46）年に閉山した住友石炭鉱業株式会社歌志内砒の中央斜抗の跡地となっている。同炭鉱は、1890（明治 23）年河野虎雄が試掘許可を受け、1899（明治 32）年、中村弥六が買収、1905（明治 38）年中村炭砒として開抗し、1912（大正元）年、佐々木慎思郎が買収、1917（大正 6）年、奔別炭砒(株)が経営、1918（大正 7）年、山下鉱業(株)が経営、1924（大正 13）年、北海道鉱業(株)が経営、1928（昭和 3）年、住友系列の住友坂（ばん）炭砒(株)の経営となったあと、北海道の住友鉱業(株)の主力炭鉱となった。</p> <p>現在は、炭鉱施設跡地に、旧抗口から湧出する良質の鉱泉（冷泉）を利用した温泉施設「チロルの湯」が建設され、周辺には、スポーツアリーナ、「デイサービスセンター」、老人ホーム「楽生園」、「道の駅うたしないチロルの湯」などの施設が整備されている。</p>	
参考情報	新歌志内市史(H6)	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.199 中村八幡神社

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	炭鉱	 	
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	歌志内市字中村 38-4		
建築年等	明治 38（1905）年頃		
構造	木造		
現存状況	有		
見学可否	可		
現地看板			
刊行物掲載			
所有者	中村八幡神社奉賛会		
管理者	中村八幡神社奉賛会		
文化財登録/指定			
解説文	<p>1905（明治 38）年、中村炭鉱が開抗したのに伴い、地域住民の心の拠り所として柱碑が建てられたのを始まりとして、昭和初期に小祠を建立され、一時は住友歌志内鉱の車庫前に移転し、1953（昭和 28）年に閉山した住友慎歌志内鉱神社の資材をもらい受け、当時の住友歌志内鉱神社の近くの丘陵に社殿を移築した。</p> <p>1971（昭和 46）年、住友歌志内鉱が閉山したため、同神社を譲り受け祭神を合祀し「中村八幡神社」となった（旧社殿はお祓いし焼却）。社務所はなく、常駐する宮司はいない。（毎年 9 月に祭典が催されている）。</p>		
参考情報	新歌志内市史(H6)		
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.200 旧上歌会館（悲別ロマン座）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	歌志内市字上歌	
建築年等	昭和 28（1953）年	
構造	R C 造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	歌志内市	
管理者	歌志内市	
文化財登録/指定		
解説文	<p>旧住友上歌志内砒の職員厚生施設（映画館兼集会場）。1953(昭和 28)年 8 月 4 日にオープンした。炭鉱の全盛期には東海林太郎、菊池章子など当時の一流歌手のショーなどが催され、大勢の市民で賑わった。炭鉱の閉山後は活用されることもなく、廃墟状態だったが、「昨日、悲別で（脚本 倉本聰）」のテレビドラマのロケ舞台となり、注目を集めたことで、市内の有志によって保存運動が展開され、会館の一部も改修された。現在、歌志内市役所が管理運営している。</p> <p>上部の屋根は崩落しており、ロビーとステージ部分のみが残っている。映写室には、解体された空知礦会館の映写機が移設され保存されている。年に数回、各種イベントが開催されている。</p>	
参考情報	新 歌志内市史（H6）	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	設計者が大正生まれの著名な建築家、渡邊洋治であることが判明し、現存する作品として大変貴重なものであることが注目を集めている。	

(1 1) 上砂川町

1887（明治 20）年上砂川炭田が発見され、その後 1899（明治 32）年に福井県鶉村から来た開拓者・山内甚之助氏他 8 名によって、この地に鍬が入れられたのが発祥です。1914（大正 3）年に三井鉱山株式会社が起業し、石炭のまちとしての歴史が始まりました。1918（大正 7）年には砂川ー上砂川間に三井専用鉄道が開通、鉄道が開通したことによって石炭の生産も増加していきました。三井は抗口を次々と開抗し、発電所、学校、水道や病院も建設し、石炭の町として急激な発展を遂げ、上砂川地区の人口も 2 万人まで増加したことから分町運動が展開し、1949（昭和 24）年に当時の砂川町、歌志内町の一部を分割して「上砂川町」が誕生しました。

その後、出炭量も増加し、1952（昭和 27）年には最大人口の 32,103 人を数えましたが、エネルギー革命の急速な進行により 1987（昭和 62）年に閉山となり、73 年の炭鉱の歴史に幕を閉じました。上砂川町では三井砂川中央堅抗を活用した無重力実験センターも開業、その後センターは廃止となりましたが今も上砂川のシンボルとなっています。1994（平成 6）年に上砂川線が廃止になった後はテレビドラマの舞台となった上砂川駅が現在の位置に移転し上砂川の名所のひとつとなりました。炭鉱館では歴史や文化を振り返り、炭鉱遺産を知ってもらうための施設として多くの展示を行うなど、歴史に根差しながら交流人口を増やしていく取り組みを推進し、産炭地としての遺産を次の世代へ伝承していきます。

No.201 三井砂川炭鉱跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	上砂川町字上砂川 35-1	
建築年等	大正 3（1914）年頃	
構造		
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	大手町地所株式会社	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1898（明治 31）年、三井鉱山合名会社により上砂川地区で本格的な炭鉱開発調査が開始され本地区の鉱区の大部分を市取得、1911（明治 44）年に三井鉱山(株)が設立され、1914（大正 3）年、三井砂川炭鉱が開坑。三井資本による道内で初めて鉱区開発した三井砂川炭鉱の鉱業所跡。</p> <p>現在も正門には標語塔が残っており「総力の発揮」「責任の完遂」「業績の向上」の文字を読み取ることができるが、鉱業所施設はほとんど撤去され残っていない。鉱業所跡の奥には第一坑坑口、人道坑口が残されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.202 三井砂川炭鉱中央堅坑櫓

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	上砂川町字上砂川7	
建築年等	昭和43（1968）年	
構造	鉄骨造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	上砂川町	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>三井資本が道内で初めて鉱区開発から採炭まで行った炭鉱。仕様：深さ766m コンクリート捲完成：1968(昭和43)年5月、巻上設備：ケーブルスキップ巻上機（揚炭能力毎時600トン）。水準下660mレベルの深部採炭を目的に開削された立坑で、1987(昭和62)年の三井砂川炭鉱閉山時まで使用されていた。閉山後は同鉱の廃坑を利用した地下無重力実験センター（JAMIC）の落下塔として使用されていたが、2003(平成15)年無重力実験センター事業廃止により本施設は閉鎖された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.203 上砂川炭山郵便局

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	上砂川町字上砂川 30	
建築年等	昭和 15（1940）年	
構造	木造 2 階建	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	昭和 15（1940）年 6 月開局、10 月には新局舎が現在地に完成し移転開局。現在も営業中。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.204 上砂川駅（悲別駅）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	上砂川町字上砂川 266-3	
建築年等	大正 15（1926）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	可（冬期間除く）	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1918(大正 7)年に砂川炭鉱の石炭輸送専用線として上砂川駅（貨物駅）が開業され、その後、1926(大正 15)年に函館本線（砂川～上砂川間）として旅客営業が開始されるのと同時に、上砂川駅が開業。1984(昭和 59)年には、テレビドラマ「昨日、悲別で」のロケ地として使用され、一躍ブームとなったが、1994(平成 6)年に廃線となった。</p> <p>廃線後、駅は閉鎖されていたが、TVドラマ「昨日、悲別で」、映画「駅」のロケ地にもなったことから、道内外のファンが数多く来町し、町の観光の柱として重要な役割を担ってきたため、1996(平成 8)年から駅舎内にドラマ撮影当時の写真やパネル、色紙等を展示し公開している。5月から 10 月のみ開放。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.205 かみすながわ炭鉱館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	上砂川町字上砂川 22-11	
建築年等	平成 5 (1993) 年	
構造	R C 造	
現存状況	有	
見学可否	可 (冬期間除く)	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>1993(平成 5)年開館。石炭産業技術や人々の生活、街並みの移り変わり等、上砂川町の歴史・文化を紹介する施設として、1993(平成 5)年に開館した。1964(昭和 39)年に三井砂川鉱で導入された水力採炭技術は国内でも珍しいもので、高い評価を得たものであるが、本施設内において水力採炭の展示を行っている。その他にも実際に使用されていた工具類や、立坑櫓、炭住八軒長屋の再現など、かつての上砂川の生活を偲ばせるものを多数展示している。5 月から 10 月の土日祝とお盆期間のみ開館。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(12) 栗山町

栗山町は1888(明治21)年に宮城県角田藩士泉麟太郎氏が「夕張開墾起業組合」を設立し入植したことで始まりました。1890(明治23)年には「角田村」設置、1900(明治33)年、角田村戸長役場が設置されました。同年、札幌で創業していた小林酒造が炭鉱で発展し始めた夕張にほど近く、自然の豊かさと豊富な水のある栗山に酒蔵を移転しました。

開田事業に加え、二股炭鉱が開抗したことなどによってまちも発展し、1926(大正15)年に北海道炭礦鉄道が夕張の石炭などを運搬するために夕張鉄道(栗山-新夕張間の本線)を開業。1928(昭和3)年には室蘭本線も開通しました。1930(昭和5)年に夕張鉄道が野幌-栗山間を開業したことにより栗山駅は2つの線路の交点となりました。昭和に入り北炭角田炭鉱の発展とともに人口は20,000人を突破し、角田炭鉱専用鉄道も引かれました。1949(昭和24)年に町制が施行され「栗山町」と改称、1963(昭和38)年には役場庁舎を角田から栗山へ移行しました。

その後、石炭産業の斜陽化と共に1970(昭和45)年に角田炭鉱は閉山。鉄道輸送は減り夕張鉄道は1975(昭和50)年に廃止されました。栗山では基幹産業である農業をベースにこれまでの歴史から生まれた産業・商業、小林酒造の蔵といった建造物を栗山の交流や観光の重要な拠点のひとつとしています。

No.206 栗山町立日出小学校（日出クラシックパーク）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	栗山町日出 230-1	
建築年等	明治 34（1901）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	喫茶店利用により可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	個人	
管理者	個人	
文化財登録/指定		
解説文	<p>角田炭鉱は、1898（明治 31）年頃から奈良義路・川島由太郎が採炭を開始し、1899（明治 32）年に篠原兼市郎に名義変更、1901（明治 34）年には二股炭鉱馬車鉄道(株)を設立し栗山まで馬車鉄道を敷設したがうまくゆかなかった。1905（明治 38）年に北炭が篠原兼市郎から買収した後は、小野貞蔵に採炭を請け負わせていたが、1933（昭和 8）年に直営に切り替え、戦中・戦後にかけて増産体制が敷かれたが、1954（昭和 29）年に角田炭鉱(株)として分離され 1970（昭和 45）年に閉山した。</p> <p>日出小学校は角田炭鉱子弟が通っていた小学校で、1901（明治 34）年に二岐簡易教育所として設立された。炭鉱閉山時の 1970 年には 140 名・6 学級だったが、1980（昭和 55）年には 30 名・3 学級となり、1981（昭和 56）年に閉校した。木造の体育館が現在も残っており、喫茶店を併設したクラシックカー展示場として民間利用されている。</p>	
参考情報	『北炭 70 年史』『くりやまの教育』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.207 夕張鉄道継立駅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	栗山町継立	
建築年等	大正 15（1926）年	
構造	木造	
現存状況	有	
見学可否	外観のみ可能（建物および敷地内は立入不可）	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	松原産業株式会社	
管理者	松原産業株式会社	
文化財登録/指定		
解説文	<p>新夕張～野幌間 53.2 km を結んでいた夕張鉄道の駅舎で、ホームは 1 面 2 線。1926（大正 15）年の新夕張～栗山間開通時に建設。基本的には周辺農産物の搬出と、運転上の列車交換のための駅であり、駅舎も新二岐駅よりは規模が小さい。夕張鉄道の敷設目的の一つであった炭鉱坑内で充填のため使用する火山灰土の採取・運搬のため、継立駅から約 1.1 km の北炭専用鉄道が、1927（昭和 2）～1930（昭和 5）年に接続されていた。</p> <p>この専用鉄道によって、鉄道敷設免許を得ていた継立駅～夕張線川端駅（北炭の火山灰採取地があった）9.6 km は建設意義がなくなり、1928（昭和 3）年に起業廃止している。1971（昭和 46）年に旅客営業廃止、1975（昭和 50）に営業廃止された後、駅舎は地元企業の事業所として使用されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.208 栗山町開拓記念館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	栗山町角田 60-4	
建築年等	昭和 63 (1988) 年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	栗山町	
管理者	指定管理者 (株式会社日東総業)	
文化財登録/指定		
解説文	<p>栗山町開基 100 年記念事業施設として 1988 年に建設された記念館。収蔵資料 7,438 点、延床面積 716 m²。開拓期に使用された生活用品や農機具、模型やジオラマ、空の上からの栗山を映像で見る「空中散歩」など、まちが発展していく姿を偲ばせる資料のほか、栗山町内の炭鉱に関する道具や資料なども展示している。</p> <p>隣接する泉記念館は 1898 年に泉麟太郎が建築した木造平屋建ての茅葺屋根住宅 (延床面積 126 m²) で、栗山町有形文化財に指定された。</p>	
参考情報	栗山町公式観光ガイドブック	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.209 小林酒造建造物群・北の錦記念館

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	栗山町錦3丁目109	
建築年等	明治33（1900）以降	
構造	レンガ蔵倉庫群：レンガ造、北の錦記念館：鉄筋コンクリート造	
現存状況	有	
見学可否	北の錦記念館は一般公開	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	小林酒造（株）	
管理者	小林酒造（株）	
文化財登録/指定	国指定登録有形文化財	
解説文	<p>空知に残るレンガ造りの施設としては最大規模の歴史的建造物で、現在も酒造施設として利用され、13棟が国の登録有形文化財（建造物）に指定されている。小林酒造は、1878（明治11）年、新潟出身の小林伝四郎が札幌で創業した。その後、伝四郎の次男である初代・小林米三郎によって、石炭大露頭の発見を契機に炭鉱開発で活況を呈しつつあった夕張に近く、1901（明治34）年に豊富な水や広大な用地の確保が可能な栗山へ移転した。</p> <p>商標の「北の錦」は、米三郎が北海道で錦を飾ってやろうという意気込みを表したものと伝えられている。「北の錦」は、炭鉱マンたちに愛飲され、炭鉱の発展とともに生産量を伸ばしていった。小林酒造旧事務所は、小樽の銀行をモデルに設計され、1944（昭和19）年に完成したもので、1995（平成7）年から「蔵元 北の錦記念館」として一般公開され、酒造りの歴史と蔵人の仕事を伝える酒器や什器、身の回り品、歴代首相からの手紙や色紙といった幅広い人脈と交友を示す品々などの展示のほか、ガイド付の酒蔵見学やお酒の販売・試飲も行っている。</p>	
参考情報	栗山町史、栗山町公式観光ガイドブック	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.210 室蘭本線栗山～栗丘増線

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	栗山町桜丘	
建築年等	昭和 44（1969）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>由仁～栗山間と同様の経緯で、栗山～栗丘間 4.2 kmの増線工事が 1965（昭和 40）年に着工し、1969（昭和 44）年に供用開始した。単線時の長万部起点 194.6～194.9 km区間は、1962～1964 年までに 3 度にわたって法面崩壊し 7 日間不通となった経緯があり線路変更も含めて計画された。土工 16 万 m³（切取 1 万 m³・盛土 15 万 m³）、橋梁 7 カ所、隧道は新栗山トンネル 1,053.5m。さらに、在来線の栗山トンネルは、将来の電化に備えて交流電化断面特 1 号に全面改築された。</p> <p>皮肉にも工事完成とともに出炭量は減少基調に転じ、複線化による能力増強を生かすことなく、計画されていた電化も行われずに終わった。現在は、旧在来線は放棄され、新線のための単線運行が行われているが、栗山トンネルや路盤はそのまま残っている。</p>	
参考情報	『札幌工事局 71 年史』	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

(13) 月形町

1880（明治13）年、福岡藩出身で内務官僚だった月形潔を団長とする集治監選定の調査団が来道、1881（明治14）年9月3日、政治犯などを収容し北海道を開拓する目的で樺戸集治監（当時の刑務所）が国内で3か所目の集治監として設置されました。集治監の開設に伴い、一帯には看守やその家族も移り住み、輸送や物資の納入などに関わる出先も増えていきます。

四人たちによって原野は田畑へと開拓され、1887（明治20）年から空知集治監（三笠）との共同事業により国道12号線の前身である上川道路、網走へ続く北見道路、樺戸と市来知を結ぶ樺戸道路、さらに月形と増毛を結ぶ天塩道路などが開かれていき、開拓の礎を作っていました。その後1919（大正8）年、囚人の減少や過酷な外役の事故への批判が強まったことなどによって樺戸集治監は廃監となりました。その後1935（昭和10）年、札幌から沼田へ繋がる鉄道、札沼線が敷かれたことで月形は監獄のまちから農業のまちへと大きく舵を切りました。農家の集落が増えると共に商店なども増え、米に加えて花き栽培、メロンやスイカ、トマトなどの果菜栽培も進み今日の月形の農業へと続きます。1983（昭和58）年には、東京都の中野刑務所の廃庁に伴い、月形刑務所が開庁したことで月形は再び「矯正のまち」として歩んでいます。

No.211 月形炭鉱坑口・選炭場跡

分類	関連文化財	写真	
炭/鉄/港区分	炭鉱		
文化財区分	有形文化財（建造物）		
所在地	月形町字中野（道有林内）		
建築年等	昭和 35（1960）年頃		
構造			
現存状況	有		
見学可否	不可（立ち入りは要許可）		
現地看板			
刊行物掲載	有		
所有者			
管理者			
文化財登録/指定			
解説文	<p>1890（明治 23）～1901（明治 34）年に 5 名が試掘権設定した後に、1906（明治 39）年に金子元三郎が鉱業権を設定。その後、所有者が変転し 1947（昭和 22）年に石狩炭鉱(株)が本格的な採炭を開始したが、1948 年・寿炭鉱(株)が復金融資に期待して買収→1950 年・休山→1951 年・東華炭業(株)→1953 年・日満炭業(株)と所有が短期間で変転した。1954（昭和 29）年に月形炭業(株)が租鉱権を設定、1958（昭和 33）年には羽幌炭砒鉄道(株)が日満炭業(株)を買収し月形炭業(株)に社名変更。1963（昭和 38）年に整理促進交付金を受けて閉山した。急傾斜採炭のため採炭法は欠口採炭またはシュリンケージ採炭、排水・通気は自然法（一部に局部扇風機使用）、主要坑道運搬にはディーゼルロコが利用されていた。羽幌炭砒鉄道の傘下となった 1957（昭和 32）年が生産ピークで、年間生産量 45 千 t、職員 42 名・鉱員 192 名・臨時 21 名・請負 74 名で、山元には炭鉱集落が形成されていた。現在は、山元には坑口と選炭機基礎部分が残っている。</p>		
参考情報	『月形町史』『北海道炭鉱史料総覧』		
アピールポイント			
権利/安全上の注意			
その他特記事項			

No.212 旧樺戸集治監本庁舎（月形樺戸博物館）

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	樺戸郡月形町 1219	
建築年等	平成 8（1996）年改修	
構造	木造、鉄骨、鉄骨（3 館）	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	月形町	
管理者	月形町	
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>月形町の歴史は、1881（明治 14）年に国立の監獄「樺戸集治監」（現刑務所）が開監したことに始まる。博物館では、樺戸集治監の開監から廃監までの 39 年間の歴史を当時の資料を基に展示している。樺戸集治監は、北海道内陸部の道路開削や屯田兵屋の建築など、北海道開拓の基礎を築いてきた。樺戸集治監が設置されたことによって、当時は空知管内で最も栄えていた。</p> <p>集治監を建設した大倉組（現：大成建設）をはじめ、帝国製麻、競馬場、雪印などが月形村にあった。北漸寺や円福寺の建物は囚人が建てたもので、修復されながら現在でも使われている。</p>	
参考情報	月形町史、樺戸監獄史話 著者：寺本界雄、樺戸集治監獄話 著者：寺本界雄	
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.213 北漸寺

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	明治 18（1885）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>曹洞宗永平寺派の寺院で、1885（明治 18）年に創建された。永平寺で大講義の職にあった鴻春悦師が、1882（明治 15）年に教誨師として集治監に赴任し囚人教誨の任に当たったのを契機に、1884（明治 17）年には月形潔典獄の援助のもと囚人の労役によって仮御堂を建築、1910（明治 42）年に本堂が建立された。</p> <p>囚徒でありながら棟梁を務めた奥田房太郎は、京都東本願寺の山門を建てた実績をもつ実力者であり、本堂や玄関まわりの彫刻は腕の立つ囚人たちの仕事で、月形町ならではの文化財として異彩を放っている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.214 樺戸集治監水道遺跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地		
建築年等	明治 19（1886）～平成 4（1992）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	<p>樺戸集治監の囚人作業による水道遺跡、取水塔・バルブ装置・水門の3種と三段のテラスからなる。1886（明治 19）年当初の水道は集治監上流の沢の水門より取水したとみられ、1892（明治 25）年にはその上流にダムを設け、集治監用の上水道としたほか、地域の水かめとして樺戸地域の発展に貢献した。</p> <p>1892（明治 25）年のダム等の設計者は北海道庁技手両角熊雄であり、1888（明治 21）年より函館水道の建設に2年間、東京での水道工学勉強後に樺戸の水道を設計し、その後函館市水道部長や藤倉貯水池（重要文化財）建設時の秋田市水道部長などを歴任した。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.215 円福寺

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	明治 20（1887）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>真宗大谷派の寺院で、1887（明治 20）年に現在地に前身の中嶋布教所が創設され、1896（明治 29）年に本堂が囚人の手により建立された。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.216 月形スギ保護林

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	記念物（天然記念物）	
所在地		
建築年等	明治 23（1890）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1890（明治 23）年に樺戸集治監開庁 10 周年の記念植樹のスギ林で、囚人の手により約 600 本が植えられた。群生地としては国内北限とされている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.217 篠津山囚人墓地

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	月形町南耕地 2	
建築年等	昭和 56（1981）年	
構造		
現存状況		
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>樺戸集治監開監から廃監までの 39 年間に獄死した 1046 人の囚人の内、引き取り手のいなかった 1022 人が眠っている。過酷な道路開削や炭鉱労働により多くの犠牲者が出たことを物語る。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	炭鉄港カードに採用	

(14) 沼田町

沼田町の石炭の歴史は 1873 (明治 6) 年にライマンが調査を行い炭鉱開発の基礎をつくったことから始まりました。その後開拓は 1894 (明治 27) 年、富山県人沼田喜三郎翁が郷里から 18 戸の移住を図ったのがはじまりです。1914 (大正 3) 年、北竜村より分離し上北竜村と称し戸長役場を設置、1922 (大正 11) 年沼田村と名前を改めました。1910 (明治 43) 年に留萌港への石炭や木材、海産物等の輸送のため留萌本線が引かれ、1930 (昭和 5) 年には明治鉱業 (株) が昭和炭鉱を、浅野雨竜炭鉱 (株) が浅野炭鉱を開鉱しました。恵比島駅から同町内の昭和駅を結ぶ炭礦線 (たんこうせん) も引かれ、1961 (昭和 36) 年には九州鉱山 (株) により太刀別炭鉱も開鉱しました。

しかし石炭から石油へのエネルギー転換が進んでいくと 1968 (昭和 43) 年に浅野炭鉱が閉山、翌年に昭和炭鉱と太刀別炭鉱が閉山すると存在意義を失った留萌鉄道も廃止されました。最盛期の昭和 30 年代に約 5 千人もの人が住んでいた浅野地区には沼田ダムの建設が進められ、市街地部分はダムの底へと沈みました。炭鉱の閉山後は稲作中心の農業の町へと転換した沼田町ですが、留萌鉄道と昭和炭鉱で使われた機関車「クラウド 15 号蒸気機関車」は沼田町指定文化財になるなど保存へと動き、ほろしん温泉近くの専用の格納庫に保存され、また隣接する「沼田町炭鉱資料館」では各炭鉱の歴史を見ることがもできるなど、まちの歴史を内外に伝える役割を果たしています。

No.218 明治鉱業昭和鉱業所

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	沼田町昭和	
建築年等	昭和 5（1930）年頃	
構造		
現存状況	有	
見学可否		
現地看板		
刊行物掲載		
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1930（昭和 5）年、明治鉱業により開坑、年間約 20 万 t を出炭する小規模の炭鉱であったが、1969（昭和 44）年、閉山。選炭場基礎をはじめ、隧道マーケット、炭住街などが森林内に残っている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.219 浅野雨竜炭鉱選炭場

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	 
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	沼田町	
建築年等	昭和 5（1930）年頃	
構造	R C 造	
現存状況	有（基礎部分のみ）	
見学可否	外観のみ可能	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者		
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	1905（明治 38）年、浅野総一郎により試掘権を設定し、開発を主導、途中、関東大震災とその後の不景気により、一次開発は頓挫したが、1930（昭和 5 年）浅野雨竜炭鉱が開業。1952（昭和 27）年古河鉱業に営業権譲渡、1962（昭和 37）年に雨竜炭鉱に経営権が譲渡。1968（昭和 43）年 11 月、閉山。集落はホロピリ湖（ダム湖）に沈み、選炭施設など炭鉱関連施設は湖岸に残っている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.220 クラウス 15 号蒸気機関車

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	沼田町字幌新	
建築年等	明治 22（1889）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	現存（ほろしん温泉ほたる館前で一般公開）一般公開（1 1 月～4 月閉館）	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	沼田町	
管理者	沼田町教育委員会	
文化財登録/指定	市町指定有形文化財、準鉄道記念物	
解説文	<p>この機関車は、1889（明治 22）年 4 月にドイツ・クラウス社で製造された。その後、九州鉄道に輸入され、日本国有鉄道、東京横浜電鉄を経て、1931（昭和 6）年に私鉄留萌鉄道（沼田町）で石炭運搬などに活躍し、さらに明治昭和鉱業所（沼田町）の貨物専用線において石炭貨車運搬用として 1967（昭和 42）年 12 月まで使用された。その後、1969（昭和 44）年 4 月の昭和炭鉱の閉山に伴い、沼田町に寄贈された。</p> <p>この機関車は沼田町の文化財として保存されており、2010（平成 22）年には JR 北海道より準鉄道記念物に指定された。現在は、ほろしん温泉ほたる館前にて一般公開されている。なお、僚機の 17 号は、栃木県那須烏山市的那須川清流鉄道保存会において保存されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.221 炭鉱資料館

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	展示施設	
所在地	沼田町字幌新	
建築年等	平成 22 (2010) 年	
構造	鉄筋コンクリート	
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載	有	
所有者	沼田町	
管理者	沼田町産業創出課	
文化財登録/指定		
解説文	かつて昭和炭鉱のシンボルだった選炭場周辺を再現したジオラマや炭鉱労働の解説パネル、石炭の標本、炭鉱で実際に採炭作業に使われていた道具等が展示されています。2010(平成 22 年)開設、それまで町のふるさと資料館で保存、展示していた資料のうち、炭鉱に関係するものを移管した。雨竜炭鉱や昭和炭鉱の写真パネル、昭和炭鉱でクラウス 15 号が走る様子を再現したジオラマもある。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.222 太刀別炭鉱ホッパー

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地		
建築年等	昭和 36（1961）年	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	沼田町	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>東美唄炭鉱などを経営していた九州鉱山(株)によって 1960（昭和 35）年に開鉱着手され、1963（昭和 38）年から本格的な出炭を開始した。留萌鉄道の路線があった幌新太刀別川と鉱区との間が離れていたことから、原炭を索道により留萌鉄道に新設された太刀別駅まで搬出した。現在残っている貨車積込ホッパーは、この開鉱時期に建設された。出炭はピークでも年産 10 万トン程度で、切羽の深部移行による湧水や通勤バス事故を契機とした鉱員大量退職のため、出炭開始からわずか 7 年の 1969（昭和 44）年に閉山。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.223 恵比島駅

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	沼田町恵比島 357	
建築年等	昭和 60（1985）年頃	
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載	有	
所有者	沼田町	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	<p>恵比島駅は、1910 年の国鉄留萌本線深川～留萌間の開通に伴い開業。1930 年、留萌鉄道炭鉱線が開通し、雨竜炭田の石炭が恵比島駅経由で留萌港から各地へ運ばれていった。隣接する「明日萌駅」は 1999 年 NHK の連続テレビ小説のロケ地となった際にセットとして建てられたもの。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	炭鉄港カードに採用	

No.224 留萌鉄道本社跡

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（建造物）	
所在地	沼田町恵比島	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	沼田町	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	昭和3年から46年まで、留萌町内から昭和炭鉱までを結んだ留萌鉄道の本社社屋として建てられた。敗戦後、現存する化学会社の社屋として使用されたものの使用されなくなり、壊されることもなく今なお佇んでいる。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.225 隧道マーケット

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	炭鉱	
文化財区分	文化的景観	
所在地	沼田町浅野	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	要許可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	沼田町	
管理者		
文化財登録/指定		
解説文	全国的にも珍しい、昭和炭鉱の隧道マーケット。10軒ほどの商店が営業して炭鉱夫たちの暮らしを支えていた。雪深い山奥という地域特性から生まれたと考えられている。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項	炭鉄港カードに採用	

(15) 安平町

安平町内の追分地区は、1892（明治 25）年に北海道炭礦鉄道の岩見沢駅－室蘭駅間開業と同時に、追分駅構内に「追分機関庫」が設置されて以来、長らく鉄道の要衝として発展してきました。室蘭本線と夕張線（現・石勝線）の合流点だったため空知地方や夕張から採掘された石炭を室蘭方面に運ぶ拠点として、多い時は 60 台以上の機関車が配置されるなど、道内では 5 本の指に入るほどの大きな機関区でした。

1975（昭和 50）年、室蘭～岩見沢間を日本最後の SL による定期旅客運行列車が運行。同年、追分～夕張間を SL さよなら貨物列車が運行しました。石炭専用列車が追分駅構内に到着し、すべての国鉄本線から SL が姿を消し、引退しました。1992（平成 4）年には運転士が追分駅に編入、2005（平成 17）年には岩見沢運転所へ再編入され、追分は運転拠点としての使命も終わりました。その後、2019（平成 31）年に鉄道資料館を併設した「道の駅あびら D51 ステーション」オープン。蒸気機関車「D51 320 号機」や鉄道関連資料が展示されました。安平町追分 SL 保存協力会により整備、保存されている『D51 320 号機』は全国でも屈指の美観を誇っており、地域の手によって鉄道の歴史が後世に受け継がれています。

No.226 蒸気機関車 D51 320 号機

分類	構成文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	安平町追分柏が丘 49-1	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	安平町	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	D51 320 号機は 1939（昭和 14）年日立製作所で造られ、1976（昭和 51）年に追分機関区を最後に廃車となるまで北海道で活躍した機関車。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.227 蒸気機関車 D51 241 号機 動輪・ナンバープレート

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	安平町追分柏が丘 49-1	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	安平町	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	<p>国鉄最後の SL 貨物列車をけん引した D51 241 号機は、追分機関区に配属されてから退役まで同機関区に所属し、退役後の 1976（昭和 51）年に火災で焼失した。同機を残そうと、煙室扉と動輪がモニュメント化され、D51 320 号機とともに D51 ステーションへ移設し保存されている。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.228 1890年代の軌道レール

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	有形文化財（美術工芸品）	
所在地	安平町追分柏が丘 49-1	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板		
刊行物掲載		
所有者	安平町	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定有形文化財	
解説文	ドイツ、イギリスに北海道炭鉄鉄道会社が製造発注したレール2本。1892（明治25）年室蘭線の開通時を町の誕生と定めた同時期のレールとして貴重。	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.229 北海道炭鉱鉄道骸炭所（コークス工場跡）

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	安平町追分白樺 1 丁目（白樺公園内）	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	安平町	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	1901（明治 34）年、当時は東洋一の規模を誇るコークス工場が建設。翌年よりコークスの製造が開始された。（1922（大正 11）年閉鎖）	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

No.230 追分機関区跡地

分類	関連文化財	写真
炭/鉄/港区分	鉄道	
文化財区分	記念物（史跡）	
所在地	安平町追分白樺2丁目	
建築年等		
構造		
現存状況	有	
見学可否	可	
現地看板	有	
刊行物掲載		
所有者	安平町	
管理者		
文化財登録/指定	市町指定記念物	
解説文	<p>1892（明治25）年8月1日、室蘭線と夕張線の開通に合わせて追分機関庫が設置された。北海道の中でも5本の指に入る大きな施設であり、赤レンガに白い緑線の入った扇形車庫と配属された数十両もの蒸気機関車の姿は壮観なものであった。その姿は、国鉄民営分割化の波の中で1992（平成4）年、すべての建物が取り壊され往時の面影を残すものはなくなった。追分機関区（庫）の跡地として語り継ぐものである。</p>	
参考情報		
アピールポイント		
権利/安全上の注意		
その他特記事項		

3. 位置図

構成文化財および関連文化財の位置は、以下の Google Map で確認することができます。

URL :

<https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1VeTZUr2F2I4se7t7n5Aow-jVIRa9tho&usp=sharing>

4. サブストーリー

炭鉄港のストーリーは、産業革命や近代化を背景とした、150 年間にわたる北海道の発展の歴史を物語るものです。このストーリーは、以下の A から D の 4 つの時代区分に整理されています。

- ・ A (1851~1868 年) : 薩摩藩による産業革命と明治維新、そこで北海道の重要性が認識されるストーリー
- ・ B (1869~1930 年) : 旧薩摩藩士を中心に近代北海道の基盤が整えられるストーリー
- ・ C (1931~1969 年) : 太平洋戦争を挟んで国内資源の重要な供給地としての役割を果たしてきたストーリー
- ・ D (1970 年~) : 主として B から派生し道内との関係・広がりという点で認識しておくべきストーリー

これらの 4 区分は均等な割合ではなく、B を主体にしながらも、C の結果としての「すでに起きた未来」という厳しい現実まで描くことが、炭鉄港ストーリーの独自性となっています。

このたび、関連文化財の選定にあたり、炭鉱・鉄鋼・港湾・鉄道の価値をより深く掘り下げることができる文化財が多く挙げられました。また、構成文化財のみでは十分に扱うことができなかった、生活に関連する文化財も見出されました。

そこで、構成文化財および関連文化財を基に、5 つの「サブストーリー」を構築しました。サブストーリーは、A から D の時代別ストーリーを補完するものであり、4 つの産業別の視点によるストーリーと、生活史に焦点を当てたストーリーで構成されています。

(1) 空知の石炭産業の移り変わり（炭鉱史）

イギリスで始まった産業革命に欠かせなかった燃料、それが石炭でした。日本でも、開国とともに外国船舶向けに燃料を供給する必要に迫られ、石炭の需要が高まりました。北海道で本格的に石炭産業が始められたのは、江戸時代末期です。幕府はアメリカからブレイクやパンペリーを招いて地質調査を行い、茅沼炭鉱を開発するなど、外国技術の導入が進められました。この時点では採炭の機械化には至りませんでした。

明治になると、富国強兵のため炭鉱開発が急務となり、1873（明治6）年からライマンらが調査を実施しました。1879（明治12）年開鉱の官営幌内炭鉱では、火薬を用いた採炭と人力運搬が主流でした。一方で、坑外では官営幌内鉄道が建設されて輸送手段の近代化が進んでおり、人力に頼る坑内の状況とは対照的でした。

坑内の機械化が本格化したのは、1889（明治22）年に官営幌内炭鉱が北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）に払い下げられ、民営化されてからです。幌内炭鉱では大規模な竪坑が掘削され、坑道開削にはアメリカなどから導入された削岩機が使用されるようになりました。その後、道内の炭鉱における北炭の独占体制が崩れると、新たな採炭機の導入とともに、動力が蒸気から電力へと転換され、さらなる技術革新が進められました。

1995（平成7）年に空知炭鉱が閉山し、空知の炭鉱開発の歴史は幕を閉じました。しかし、この地の石炭産業が発展を遂げた背景には、海外の技術を学び、機器を積極的に導入してきた長い歴史がありました。



北炭幌内炭鉱立坑（三笠市）は、深部での採炭への対応と幌内・新幌内両炭鉱の統合による能率向上を目的として、戦後に一時掘削されたものの中止となった三笠山立坑の位置に、新たな立坑として建設されました。1967（昭和42）年に稼働を開始し、1989（平成元）年に閉山しました。坑口は密閉されましたが、立坑の西側には、隣接する巻上機と建屋が2004（平成16）年まで残っていました。現存する日本最深の立坑として知られています。



旧自走杵工場内の住友赤平炭鋳採炭用機械類（赤平市）。自走杵とは、それまで坑夫の手作業に頼っていた採炭を、効率的かつ大量に掘削するために開発された大型機械です。現在、自走杵は整備工場内で当時のまま、炭塵が付着した状態で保存されています。工場内には、住友赤平炭鋳で使用されていた大型の機械類が約 100 点展示されています。

関係する構成文化財/関連文化財

No.	市町村	文化財名
42	夕張市	夕張の石炭大露頭「夕張 24 尺層」
43	夕張市	北炭北海道支店石炭分析室
44	夕張市	北炭夕張炭鋳北上坑口
45	夕張市	北炭夕張炭鋳社光ズリ山
46	夕張市	夕張炭鋳総合ボイラー煙突
47	夕張市	北炭夕張炭鋳大新坑
48	夕張市	北炭夕張炭鋳高松ズリ捨線
49	夕張市	北炭夕張炭鋳千歳坑口
50	夕張市	旧北炭夕張炭鋳天龍坑口
51	夕張市	北炭夕張炭鋳夕張第 3 砦坑口
63	夕張市	旧北炭夕張炭鋳模擬坑道（夕張市石炭博物館）
64	夕張市	北炭化成工業所コークス炉煙突
65	夕張市	北炭平和炭鋳坑口・ズリ山
67	夕張市	北炭清水沢炭鋳事務所・繰込所
68	夕張市	北炭清水沢火力発電所
69	夕張市	旧北炭清水沢水力発電所
70	夕張市	北炭清水沢炭鋳ズリ山
72	夕張市	北炭真谷地炭鋳貨車積ポケット
74	夕張市	北炭楓坑発電所
75	夕張市	北炭真谷地炭鋳楓坑ズリ山
76	夕張市	旧北炭滝ノ上水力発電所

77	夕張市	三菱大夕張炭鉱ズリ山
78	夕張市	三菱大夕張炭鉱若葉坑
83	夕張市	三菱大夕張炭鉱 大夕張炭業所の坑口群（通洞、新斜坑材料坑道ほか）
89	岩見沢市	北星炭鉱ズリ山
91	岩見沢市	万字炭鉱選炭場跡
92	岩見沢市	万字炭鉱ズリ山
93	岩見沢市	北炭送電線鉄塔
94	岩見沢市	万字変電所
95	岩見沢市	旧英橋
96	岩見沢市	旧巴橋
99	岩見沢市	炭鉱の記憶マネジメントセンター石蔵
101	美唄市	美唄市郷土史料館
102	美唄市	三菱美唄炭鉱立坑櫓
103	美唄市	三菱美唄炭鉱開閉所
104	美唄市	三菱美唄炭鉱原炭ポケット
107	美唄市	三菱美唄記念館
115	美唄市	三井美唄炭鉱第2坑選炭場
116	美唄市	三井美唄炭鉱第二坑原炭ポケット
117	美唄市	三井美唄炭業所事務所
118	美唄市	三井美唄炭鉱選炭場の跡
119	美唄市	三井鉱山（株）美唄炭業所の碑
128	芦別市	三池8トン有線電車
129	芦別市	星の降る里百年記念館
135	芦別市	三菱・北菱記念碑
144	江別市	北海道炭礦鉄道野幌煉化工場のれんが
145	江別市	北海道炭鉱鉄道（株）野幌煉化工場登り窯ジオラマ
148	赤平市	北炭赤間炭鉱選炭工場跡（原炭ポケット）
149	赤平市	北炭赤間炭鉱ズリ山
150	赤平市	住友赤平炭鉱立坑櫓・周辺施設
151	赤平市	住友赤平炭鉱関連採炭用具等（赤平市炭鉱歴史資料館）
152	赤平市	住友赤平炭鉱等関連資料
153	赤平市	空知川露頭炭層
154	赤平市	住友赤平炭鉱ズリ山
155	赤平市	赤間炭鉱の碑
157	赤平市	茂尻炭鉱の碑
158	赤平市	豊里記念の丘公園

159	赤平市	豊里炭鉱ズリ山
160	赤平市	豊里炭鉱の碑
162	三笠市	空知集治監典獄官舎レンガ煙突
163	三笠市	北炭幌内炭鉱音羽坑
164	三笠市	北炭新幌内炭鉱ズリ山
165	三笠市	北炭新幌内炭鉱選炭機
166	三笠市	北炭幌内炭鉱常磐坑口
167	三笠市	北炭幌内炭鉱布引排気風洞
168	三笠市	幌内変電所
169	三笠市	幌内砒水道施設（奔幌内水源地ダム）
173	三笠市	北炭新幌内砒坑口
174	三笠市	北炭新幌内砒選炭機
175	三笠市	北炭幌内炭鉱立坑
177	三笠市	住友奔別炭鉱立坑櫓・周辺施設
180	三笠市	三笠市立博物館
181	三笠市	住友弥生炭鉱坑口
182	三笠市	狸掘り跡
183	三笠市	北炭幾春別炭鉱錦坑口
184	三笠市	北炭幾春別炭鉱資材倉庫
185	三笠市	北炭幾春別炭鉱錦立坑櫓
193	歌志内市	郷土館「ゆめつむぎ」
194	歌志内市	空知炭礦ズリ山
195	歌志内市	神威変電所
196	歌志内市	神威史跡広場
197	歌志内市	住友歌志内砒ズリ山
198	歌志内市	住友密閉坑口
201	上砂川町	三井砂川炭鉱業所跡
202	上砂川町	三井砂川炭鉱中央堅坑櫓
205	上砂川町	かみすながわ炭鉱館
208	栗山町	栗山町開拓記念館
211	月形町	月形炭鉱坑口・選炭場跡
212	月形町	旧樺戸集治監本庁舎（月形樺戸博物館）
214	月形町	樺戸集治監水道遺跡
216	月形町	月形スギ保護林
218	沼田町	明治炭業昭和炭業所
219	沼田町	浅野雨竜炭鉱選炭場

221	沼田町	炭鉱資料館
222	沼田町	太刀別炭鉱ホッパー

(2) 石炭と鉄道をきっかけに栄えた鉄鋼業（鉄鋼史）

イギリスで始まった産業革命に欠かせなかった素材、それが鉄でした。この頃、製鉄法が劇的に効率化し、産業革命を成し遂げた鉄製機械の数々を製造できるようになったのです。

日本では幕末に、迫り来る外国船との最前線に立たされていた薩摩藩で大砲製造のための製鉄や造船が取り組まれ、この経験が後の北海道開拓の糧となりました。

明治政府は日清戦争後、戦時の軍用船確保のため鉄鋼船の建造を助成するようになりました。1897（明治 30）年には鉄鋼の国産化を目指して北九州に官営八幡製鉄所を設立し、その後民間の鉄鋼会社設立も進みます。

北海道では、明治期に空知一円から室蘭へ向けた鉄道網で石炭輸送体制を築き上げた北海道炭礦汽船株式会社（北炭）が、鉄道事業を国に売却して得た資金で、鉄鋼業に進出しました。イギリス企業との合弁によって1907（明治 40）年に室蘭で設立された、株式会社日本製鋼所です。

その後、室蘭の鉄鋼会社の体制は千変万化を続けましたが、第一次世界大戦、満州事変や太平洋戦争による軍事需要、さらに戦後は高度経済成長に支えられ、室蘭の鉄鋼業は発展していきました。その背景には、戦時中に製鉄と製鋼を一貫して行う体制が築かれたことも挙げられます。しかし、1960年代以降に全国各地で臨海型の最新鋭製鉄所が建設されると、苦境に陥る会社も現れました。

現在は鉄鋼だけでなく石油関係の工場も加わり、室蘭は「鉄のまち」と称されています。



旧火力発電所（日本製鋼所）は、室蘭市で1909（明治 42）年に建設された火力発電施設です。煉瓦造で延床面積は3,241 m²。発電機3機とボイラー20基が格納され、1928（昭和 3）年に電力会社から初めて電力の供給を受けて自家発電との併用を開始しました。その後この発電所は予備扱となり、1961（昭和 36）年に廃止されました。



瑞泉閣（室蘭市）は、1911（明治44）年に建設された宿泊・接待のための施設です。大正天皇が皇太子時代に北海道を行啓した際、日本製鋼所室蘭製作所を視察され、その宿泊所として建設されました。建物は和洋折衷で、洋館内部は英国風の華麗な装飾が特徴的です。2008（平成20）年に外壁や屋根瓦などを建設当時の様式に可能な限り再現し、現在も同製作所の迎賓館として使用されています。



御傘山神社（室蘭市）は、日本製鋼所が社運発展と操業の安全を記念して建立した神社です。

関係する構成文化財/関連文化財

No.	市町村	文化財名
17	室蘭市	旧火力発電所（日本製鋼所）
18	室蘭市	瑞泉閣
20	室蘭市	旧三菱合資会社室蘭出張所（北星）
21	室蘭市	日本製鋼所室蘭製作所製造 複葉機エンジン「室0号」
22	室蘭市	日本製鋼所配水池跡
29	室蘭市	知利別会館
30	室蘭市	旧チマイベツ浄水場
33	室蘭市	恵比寿・大黒天像
34	室蘭市	工場景観と企業城下町のまちなみ

38	室蘭市	御傘山神社
39	室蘭市	輪西神社

(3) 石炭積出港の盛衰（港湾史）

イギリスで始まった産業革命を支えたのは海運業であり、その玄関口たる港湾でした。日本でも、江戸幕府が鎖国から開国に転ずると、箱館（現在の函館市）を含む複数の都市が開港されました。当時の箱館は北前船による交易で賑わっており、やがてその賑わいは北上して小樽に到達します。

港湾都市として歩み始めた小樽では、明治初期から港湾整備が進められました。そして、官営幌内鉄道が開通すると小樽は石炭の積出港として大きな役割を担うようになりました。明治末期には石炭の積み出しのために高架栈橋が整備され、1915～1930年の間には移輸出入貨物量が3倍に増加する大活況を呈しました。

一方室蘭も、明治初期こそ港湾整備が不十分でしたが、北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）が鉄道網を拡大し、空知一円から室蘭へ向けた石炭輸送体制を整えると、石炭積出港として飛躍的な発展を見せました。

室蘭港と小樽港では、鉄道で輸送された石炭を船舶に積み替える工程を効率化するため、昭和初期に港湾施設の抜本的な整備が進められました。しかし戦後になると、苫小牧港に石炭積出が流出し、さらにエネルギー革命の影響で石炭輸送量自体が激減したため、ともに1970年代には石炭の積出港としての役割を終えることとなりました。役割こそ変わりましたが両港は今も活躍しており、特に小樽は港湾都市や金融都市の面影を残す建造物や運河の景観が観光面で注目を集めています。



かつての小樽港の様子を伝える絵葉書。「(商港の小樽) 年百八十萬噸の石炭を自動的に船積する高架栈橋と手宮貨物駅貯炭場」と書かれています。



三輪商会倉庫（室蘭市）は、1927（昭和3）年に建設された石造倉庫です。現在はギャラリー「千穂万歳堂」として使われています。



色内銀行街の旧三菱商事小樽支店は、1922（大正11）年に建てられた鉄筋コンクリート造の4階建てです。1階は銀行、2階は鉱業、3階は商事の各支店が入り、往時は活気にあふれ世界中と商取引が行われていました。

関係する構成文化財/関連文化財

No.	市町村	文化財名
1	小樽市	旧北海道庁土木部小樽築港事務所見張所
2	小樽市	旧右近倉庫
3	小樽市	旧広海倉庫
4	小樽市	旧浪華倉庫
8	小樽市	モルタルテストピース
9	小樽市	小樽港北防波堤
10	小樽市	北炭ローダー基礎
11	小樽市	小樽港斜路式ケーソン製作ヤード
12	小樽市	旧三井物産小樽支店（色内銀行街）
13	小樽市	旧三菱商事小樽支店（色内銀行街）
15	室蘭市	輪西屯田兵火薬庫

25	室蘭市	旧北炭室蘭海員倶楽部
26	室蘭市	旧室蘭灯台(大黒島灯台)
27	室蘭市	三輪商会倉庫
31	室蘭市	室蘭市役所本庁舎
35	室蘭市	中央埠頭倉庫 (プラットホーム跡地)
36	室蘭市	旧国鉄埠頭・旧北荷埠頭
37	室蘭市	ホーレス・ケプロン顕彰碑

(4) 石炭とともに歩んだ鉄道（鉄道史）

鉄道は、産業革命を背景に、19世紀前半にイギリスで誕生しました。その目的の1つは、工業を支える石炭の輸送で、それまでの馬車鉄道に替わる大量輸送手段として画期的なものでした。

日本でも、江戸幕府が鎖国から開国に転ずると、外国船への燃料供給が必要となり、石炭の需要が高まりました。そんな中、明治初期に蝦夷地（現在の北海道）の幌内（現在の三笠市）で石炭が発見されます。富国強兵を目指していた明治政府は、1879（明治12）年に官営幌内炭鉱を開鉱し、産出した石炭を運び出すために手宮（現在の小樽市）～幌内間に官営幌内鉄道を開通させました。これが北海道最初の鉄道です。

その後1889（明治22）年に、全国的な官営事業払い下げの流れの中で、官営幌内鉄道は北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）に払い下げられました。そして北炭は鉄道網を拡大し、空知一円から室蘭へ向けた石炭輸送体制を整えます。しかし、1906（明治37）年に北炭を含む全国の主要な鉄道路線が国有化されると、北炭はその売却で得た資金をもとに室蘭で鉄鋼業に進出するようになりました。

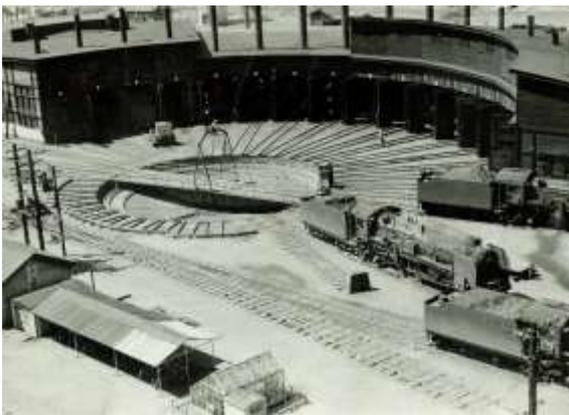
国有化後も石炭輸送で活躍した北海道の鉄道ですが、1960年代には石油が石炭に取って代わり、鉄道輸送も衰退しました。1987（昭和62）年の国鉄分割民営化に際しては、幌内線（岩見沢～幌内間）を含む多くの鉄道路線が廃止されました。現在は各地で、往時を偲ぶ鉄道遺構が保存・公開されています。



「しづか号」は、1885（明治18）年にアメリカから輸入され、官営幌内鉄道で活躍した蒸気機関車です。その後日本製鋼所室蘭工場で1952（昭和27）年まで働き、現在は原形に復元され、小樽市総合博物館の「しづかホール」に展示されています。鉄道記念物指定、日本遺産「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」構成文化財。



旧手宮線（手宮～現・南小樽間）は、北海道最初の鉄道である官営幌内鉄道の一部として1880（明治13）年に開通しました。幌内（現在の三笠市）から小樽に向けた石炭輸送に活躍しましたが、1962（昭和37）年に旅客営業が廃止され、1985（昭和60）年に廃線となりました。旧手宮線で使用されていた鉄道施設を残したオープンスペースが整備されているほか、当時の線路がそのまま残されています。



追分機関区は、1892（明治25）年に室蘭～追分～岩見沢間と追分～夕張間に鉄道が開通したことに合わせ、設置されました。北海道の中でも5本の指に入るものでしたが、1992（平成4）年にすべての建物が取り壊され、往時の面影を残すものはなくなってしまいました。写真は1972（昭和47）年の機関区の扇形車庫の様子です。



旧北海道炭礦鉄道（北炭）岩見沢工場（岩見沢レールセンター）は、手狭になった手宮工場の分工場として1899（明治32）年に設置された岩見沢製作所を前身としています。建物の壁面には北炭の社章（コバルト色の円の中に赤い星）が残っています。東西南北に交わる鉄道の要衝としての岩見沢の歴史を物語るもので、現在も北海道旅客鉄道株式会社（JR北海道）が使用しています（外観のみ見学可）。

関係する構成文化財/関連文化財

No.	市町村	文化財名
5	小樽市	手宮線跡及び附属施設
6	小樽市	旧手宮鉄道施設
7	小樽市	小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群
14	小樽市	小樽中央市場
19	室蘭市	室蘭市旧室蘭駅舎
40	室蘭市	「室蘭線発祥の地」記念碑
41	室蘭市	S-205号 蒸気機関車
60	夕張市	北炭夕張炭鉱専用鉄道高松跨線橋
61	夕張市	S L館の鉄道車輛
66	夕張市	夕張鉄道軌道敷
71	夕張市	国鉄夕張線（石勝線=通称夕張支線）
73	夕張市	北炭真谷地炭鉱専用鉄道跡
79	夕張市	大夕張森林鉄道夕張岳線第一号橋梁
80	夕張市	大夕張森林鉄道夕張岳線第五号橋梁・第六号橋梁
81	夕張市	三菱大夕張鉄道橋梁旭沢橋梁（5号鉄橋）
82	夕張市	三菱大夕張鉄道車輛
84	岩見沢市	旧北海道炭礦鉄道岩見沢工場（岩見沢レールセンター）
85	岩見沢市	上志文駅舎
86	岩見沢市	岩見沢操車場跡
88	岩見沢市	朝日駅舎
97	岩見沢市	万字駅舎
113	美唄市	美唄鉄道東明駅舎・4110形式十輪連結タンク機関車2号
114	美唄市	美唄鉄道線路跡
130	芦別市	ディーゼル機関車、貨車
131	芦別市	旧三井芦別鉄道 炭山川橋梁
132	芦別市	旧三井芦別鉄道 三井芦別駅舎
147	江別市	炭鉱鉄道遺産群（山田コレクション）
171	三笠市	幌内線線路

172	三笠市	三笠鉄道村（三笠鉄道記念館）
176	三笠市	唐松駅舎
179	三笠市	森林鉄道跡
188	三笠市	萱野駅駅舎
204	上砂川町	上砂川駅（悲別駅）
207	栗山町	夕張鉄道継立駅
210	栗山町	室蘭本線栗山～栗丘増線
220	沼田町	クラウドス 15 号蒸気機関車
223	沼田町	恵比島駅
224	沼田町	留萌鉄道本社跡
226	安平町	蒸気機関車 D51 320 号機
227	安平町	蒸気機関車 D51 241 号機 動輪・ナンバープレート
228	安平町	1890 年代の軌道レール
229	安平町	北海道炭鉱鉄道骸炭所（コークス工場跡）
230	安平町	追分機関区跡地

(5) 炭鉱を支えた人々の生活（生活史）

炭鉱で働く人々の生活は、時代とともに変化を遂げてきました。当初は厳しい生活環境に置かれていましたが、ひとつの転機となったのが、1889（明治 22）年に官営幌内炭鉱が北海道炭礦鉄道株式会社（北炭）に払い下げられ、民営化されたことです。

北炭による炭鉱住宅は、初期のものは簡素な造りでしたが、1937（昭和 12）年の戦時体制下で石炭の需要が高まると、平家建の標準化された住宅が数多く建設されました。現代でも企業が社員向けに社宅を提供する例はありますが、北炭による炭鉱住宅の整備は、そうした福利厚生先駆的な事例のひとつといえます。さらに、戦後の労働運動によってこうした福利厚生はさらに充実しました。映画は札幌よりも先に炭鉱まちの映画館で封切られ、白黒テレビ・冷蔵庫・洗濯機などの家電も道内でいち早く家庭に普及しました。

また、炭鉱住宅の増加とともに、そこで暮らす人々の結びつきも強まり、「友子制度」と呼ばれる独自の制度が形成されました。特に登川楓地区（夕張市）では、炭鉱開発の困難な地形的条件も影響し、この制度が昭和 50 年代まで続いていたとされています。

こうした炭鉱住宅の形態やコミュニティのあり方は、鉱区や地域ごとに異なり、それぞれの労働環境や風土を反映した独自の特色を持っていました。



朝日炭鉱住宅群（岩見沢市）は、1930 年代の幌向炭鉱時代に 80 戸、1940 年代前半の日本硝子時代に 280 戸が建設されました。1957（昭和 32）年には全戸の桁葎屋根がトタン葎屋根へと改修され、1970（昭和 45）～1971（昭和 46）年度には大規模な住宅改修が行われて内便所方式に変更されました。



友子の墓（三笠市）。弥生墓地は、明治中期に幾春別墓地として開設され、周辺の北炭幾春別炭鉱や住友炭別炭鉱で働く人々を含む、地域住民の集合墓地となっていました。この墓地には多くの友子の墓が残されており、時代とともに変化する友子の仏参の意識の変化を知ることができます。

関係する構成文化財/関連文化財

No.	市町村	文化財名
52	夕張市	採炭救国坑夫の像
53	夕張市	末広墓地石碑群
54	夕張市	日本キリスト教会夕張伝道所
28	室蘭市	旧北炭役宅
32	室蘭市	室蘭市立絵鞆小学校円形校舎
55	夕張市	福住人車軌道敷
56	夕張市	旧北炭鹿ノ谷倶楽部（夕張鹿鳴館）
57	夕張市	清水沢宮前町・清栄町住宅
58	夕張市	北炭夕張新炭鉱清陵町住宅
59	夕張市	本町商店街
62	夕張市	幸福の黄色いハンカチ思い出ひろば
87	岩見沢市	朝日炭鉱住宅群
90	岩見沢市	北星炭鉱住宅群
98	岩見沢市	一の沢水源地
100	美唄市	人民裁判の絵
105	美唄市	沼東中学校屋内体育館
106	美唄市	沼東小学校
108	美唄市	我路郵便局（旧美唄炭山郵便局）
109	美唄市	元衆議院副議長岡田春夫の生家

110	美唄市	炭鉱住宅（落合地区）
111	美唄市	旧栄小学校（安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄）
112	美唄市	落合会館
120	美唄市	山神社の碑
121	美唄市	三井美唄炭鉱の祭神祠
122	美唄市	三井美唄炭鉱員住宅群
123	美唄市	三井美唄互楽館
124	美唄市	三井美唄消防署
125	美唄市	三井美唄炭鉱所長住宅
133	芦別市	新坑夫の像
134	芦別市	旧頼城小学校（星槎大学）校舎及び体育館
136	芦別市	高根炭鉱殉職者慰霊碑
137	芦別市	殉職者之碑、油谷晨介之碑、胸像台座
146	江別市	輪環窯時代のれんが工場の人々
156	赤平市	茂尻炭鉱炭鉱住宅
161	三笠市	北炭幌内鉱業所長宅
170	三笠市	招魂碑、哀悼之碑
178	三笠市	殉職者之霊碑
186	三笠市	住友弥生炭鉱住宅
187	三笠市	三笠市民会館緞帳
189	三笠市	三笠市役所庁舎
190	三笠市	友子の墓（弥生墓地）
191	歌志内市	旧空知炭鉱倶楽部（こもれびの杜記念館）
192	歌志内市	ハカ大正館
199	歌志内市	中村八幡神社
200	歌志内市	旧上歌会館（悲別ロマン座）
203	上砂川町	上砂川炭山郵便局
206	栗山町	栗山町立日出小学校（日出クラシックパーク）
209	栗山町	小林酒造建造物群・北の錦記念館
213	月形町	北漸寺
215	月形町	円福寺
217	月形町	篠津山囚人墓地
225	沼田町	隧道マーケット



日本遺産「炭鉄港」構成文化財・関連文化財一覧

2025年3月発行

発行：炭鉄港推進協議会

（事務局）北海道空知総合振興局 地域創生部 地域政策課内

〒068-8558 北海道岩見沢市8条西5丁目

Tel: 0126-20-0034

制作協力：株式会社ジオ・ラボ

（令和6年度 日本遺産『炭鉄港』コンテンツ深掘り事業により実施）